

---

# SEEDとギアスとリリカルと召喚獣！

御餅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SEEDとギアスとリリカルと召喚獣！

### 【Nコード】

N36490

### 【作者名】

御餅

### 【あらすじ】

バカテスその他のクロスオーバーです。毎週月曜日更新。只今絶賛キャラ募集中。

…だったのですが、現在絶賛停滞中。暫く復帰できません><

ブローグ〜Fクラスにいたのは……僕だったア——!! いつのまにかア!! (

最初からクライマックスだぜ!

(意識) ちよつとウホッな描写があるから注意してね☆

プロローグ／Fクラスにいたのは……僕だったア——！！いつのまにかア！！

そこには男が二人、生まれたままの姿で絡み合った。

その姿は、勇ましい獣が争い合っているかのように優美な姿かもしれない。

「雄二……んぐう……！くすぐりたいよお……」

「明久……少し我慢しろ」

雄二と呼ばれた逞しい体躯を持った男が明久と呼ばれた男に執拗な愛撫をしていた。

全身をなぶられている明久が、抗議の声を上げながらも、しかし気持ち良さそうに身体をくねらせる。

力ない講義を上げるが抵抗らしい抵抗をしない明久の声に、雄二は段々征服欲が高まっていくのを身体の奥から感じて行く。

「もっと……優しくしろよお……」

「なんだよ、そんなに気持ちよさそうにしゃがって。説得力がないだろ」

雄二はわざと意地悪そうにそう言って焦らす。明久は涙目になっていく。

そんな明久を見て雄二は更に気分が高まっていく。

「こんなに濡らしやがって。もう欲しいのかよ」

「早くう……雄二い……！」

「じゃあ入れるぞ……フンっ！」

「あ……ああー！」

雄二の凶悪な一物が明久の中に侵攻していった。そして雄二は明久を思う様蹂躪した。

「あ、あ、ああ雄二いい！激しいよう！もっとおやさしくういいい！」

「明久、もっと力抜けよ……！キツイ……！くっ出るっ！」  
「あ、ああああー……！」

そして明久の中に雄二の欲望が解き放たれた――――

☆

A M 7..32

「ぶはあ！！！」

吉井明久は跳び起きた。そして眠気を一気に吹き飛ばした。

「最悪の悪夢を見た……！今日は厄日だ……」

いきなり幸先の悪い一日の始まりだった。

☆

文月学園の制服を着て走る茶髪のサイドテールの少女がいた。

「おはよう、フェイトちゃん、はやてちゃん」

「あ、おはようなのは」

「おはようなのはちゃん」

彼女が声をかけた先には、金髪紅眼の少女と童顔のショートカットの少女がいた。

美少女の三人が並ぶ姿は、とても華やかに映る事だろう。

この三人は8年前の事件をきっかけに仲良くなった。その事件に関してはここでは語りませんよ。

彼女等は揃って同じ教室に向かっている。

「でもよかったよ。ちゃんとAクラス入りできて」

「なのはちゃんと勉強頑張ったから当然だよ」

「ありがとフェイトちゃん。フェイトちゃん達が助けてくれたからだよ」

「お互い様だよ。こっちだって国語とかはまずかったし」

「そうやなく。フェイトちゃんも古文とかは結構ひどかったしなく」

「は、はやて！それは言わないでよ」

そんな一見ただの女子高生の会話の一部に見える。が、

「そういえばなのは、教導官のお仕事の方は？」

「うん、こっちは中々見どころある新人ばかりで楽しいよ。フェイトちゃんのほうはどう？」

「こっちはそんなに大きな事件もないから平和だよ」

「うーん、やっぱりそれが一番やなあ」

「はやてちゃんのほうは？」

「もう少し捜査官として経験をつまんなあ。学ばなあかん事がまだたくさんあるわ」

「大変だねえ」

「それはまあ、お互い様やな」

彼女等は時空管理局という場所で仕事に就いている。正確には研修、という形でだが。

本編と違って、こちらの彼女達は学生生活をメインにしている。仕事<青春 である。

本人の自由意志であるとはいえ人手不足の管理局から言えば、彼女らの様な才能溢れる若者が欲しいだろう。

なので、彼女達は形は研修でも、既に前線に立たされることが多い。普通の高校生にはない、彼女達だけの境遇である。

☆

「スウザクウウウウ!!」

一人の少年が叫んだ。

少年の名前はルルーシュ・ランペルージ。黒髪で整った顔立ちの美少年である。

「ごめんルルーシュ。あそこの問題がどうしても解けなくてさあ」

謝っている少年はスザク。癖っ毛のある茶髪の少年である。

「ごめんじゃない! 今回の振り分け試験の対策をやってきたんだぞ! 何度も教えたはずだ! 少なくともFクラス行きは絶対に」

避けられるようにと思ってやったのに、お前と言う奴は……!」

「悪かったよ、ルルーシュ。折角手伝わってもらっておいてこんな結果に終わってしまうなんて……」

落ち込み俯くスザクを見て、ルルーシュはしまったと言わんばかりに顔をしかめた。

「ま、まあ今回のでちゃんと反省しろ。特に苦手科目は集中してやらないと手も足も出ない事がわかっただろう」

「うん。ありがとうルルーシュ。こんな僕に勉強付き合ってくれて」  
素直に感謝の念を伝えるスザク。一瞬呆然となったルルーシュはすぐにそっぽを向いた。

「う、うるさい。そんなことよりもお前はFクラスなんだから早く教室に行け。遅れるぞ」

「じゃあまたルルーシュ」

スザクが陽気に手を振って去っていった。ルルーシュはそれを見て溜息をついた。

今のルルーシュはもう一つ気がかりな事がある。

それは――ブリタニア皇帝シャルルの失踪。

地球連合が先の戦争で空中分解し、大西洋連邦が神聖ブリタニア帝国に乗っ取られた後、当時皇帝に台等していたシャルルが、何の前触れもなく消えたというのだ。

今では第二王子シュナイゼルがその役を任されているが、ルルーシュのある事情により無視できない情報でもあるのだ。

（何が起きている？あいつがなぜ突然消えるのだ？暗殺でもされたのならともかく）

少なくともただ日本にいてはわからないので、ルルーシュは水面下で調査しているのだった。

☆

「ここが日本国か……」

一人の少年が呟いた。



少年の名前はキラ・ヤマト。ショートジャギーの童顔の少年である。東洋系で一見すれば日本人と言っても通じそうな容姿の持ち主だ。

「ええ、でももうあなたの学校は振り分け試験が終わっているそうよ。ごめんねもう少し早くすれば」

「いえ、マリューさんには感謝してます」

マリューと呼ばれた女性は憂げにキラを見た。その表情には何か哀しみが漂う。

「私にできる事はこれくらいよ。でもいいの？ オーブから離れて。もう戦争は終わったんだから」

「すいません、今は……オーブに戻る気が無いので。せめてもう少し落ち着いてから、それから考えます」

「……そう」

マリューはキラの手をとって、確認するように言った。

「前の戦争で、私達はあなたに何度も救われたわ。今度は私があなたを助ける番よ。だから困ったことがあったら何でも言って」

「……ありがとうございます」

キラはただ感謝の念を伝えた。

（僕は……元の自分に戻れるかな……）

キラは心の中で自問自答する。

無理だ。

あれだけたくさん人を殺し、死なせた自分は、もう二度と戦争の前の自分には戻れない。

オーブは故郷だけど、あそこには悲しい思い出が蘇りそうで怖い。特に『彼女』の顔が――

だから、離れた土地でやり直そうと、この日本まで来た。だというのに、変わる気がしない。

罪の意識が消えるものか、これは一生持っていくことになるだろう。……そこでキラは気付く。

（なんか矛盾してるな、僕）

キラは晴れ渡る朝の青空を見上げた。

☆

ここは明久が通う文月学園。

明久は肩を落として校舎内を歩いていった。

その明久の落ち込みぶりは、先ほどの西村教諭との会話にあった。

~~~~~

『今だから言うがな、吉井』

『はい、なんですか？』

『俺は去年のお前を見て、『もしかすると吉井はバカなんじゃないか？』などという疑念を抱いていたんだ』

『ははっそれは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、更に『節穴』なんていう渾名をつけられますよ？』

『ああ。今回の振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気付いたよ』

『そう言ってもらいえると嬉しいです』

『喜べ吉井。お前への疑いは無くなった』

吉井明久・Fクラス

『お前はバカだ』

〃〃〃

あの呆れたような鉄人（西村教諭の陰での渾名）の表情を見て更に肩が重くなった明久であった。

こうして色んな思惑が集まる中、文月学園の新たな一年が始まるのだった。

ブローグ／＼Fクラスにいたのは……僕だったア——!! いつのまにかア!!!(

餅「最初に言っておきます。一卷分のお話はほぼカットしていきま  
す」

明久「えー!なんで!?!」

餅「正直言うと、バカテス一卷の話ってキャラクター紹介が派生し  
たような内容なんだよ。つまり今後のストーリー展開の為の

キャラ関係はFクラスの周りの状況などの構成構築みたいな話  
なんだよ」

明「そんな大層なこと言ってるけどさ、要するに面倒くさいだけだ  
ろ? 作者的には」

餅「モチよ。だってバカテスは二次創作的な意味で二巻以降の方が  
話が展開させやすいんだもん」

## 設定紹介〜これが精一杯ですorz〜（前書き）

多分キャラが増えていくと思います。

正直バカテスの世界観がよくわからん。現代と同じ？

## 設定紹介（これが精一杯ですorz）

### 世界観設定

この世界ではバカテス＋SEED＋ギアス＋リリなのというごちゃ混ぜの世界です。

一部の設定が矛盾してたり無くなったり時期が違ってたりするのは御愛嬌。

### （世界設定）

#### ・日本

ユーラシア連邦の一部だったりブリタニアの植民地と言う事もなく、現代の日本に一番近い。中立国家。

前大戦では外交での圧力に負け中立を捨てたが、戦後すぐに戻った。しかしサクラダイトの産出が盛んだり、独自の兵器を開発してたりと違う部分も見られる。

オーブとは技術協力している。そのせいかコーディネイターでの差別意識があまりない。勿論彼らの移住も認めている。

どちらかと言うとオーブよりもある。

#### ・ヤキン・ドゥーエ戦役

本編の一年前に終結した世界大戦。本編と違い、9月ではなく2月に終結したことになる。

血のバレンタインの約二年後である。

大量破壊兵器が多く投入され、数多の犠牲者を出して終結と言う過去類を見ない悲惨な戦争となった。

故に、歴史家がその余りの惨たらしさに華やかな名称をつける事を忌避し、この戦争はただ単に最終決戦の舞台となった

要塞ヤキン・ドゥーエの名前をそのまま取られた。“血のバレンタイン戦争”と呼ばれる事もある。

日本は特に被害を食う事はなかった。しかし経済の悪化は避けられていない。

本編は戦後である。

・本編ではあまり出ないもの（説明すんのr y）

・プラント

宇宙コロニーで、コーディネイターの住処。砂時計の様な形をしている。

・神聖ブリタニア帝国

北・南アメリカ大陸を領土に持つ超大国。元は旧アメリカ。

・時空管理局

次元世界をまとめて管理する、警察と裁判所が一緒になったところ。

（登場人物紹介）

・Fクラス

キラ・ヤマト（機動戦士ガンダムSEEDシリーズ）

ガンダムSEEDの主人公。最高のコーディネイターの唯一の成功体。

前大戦でフリーダムガンダムに乗って戦争終結に尽力した伝説のパイロット。

戦争が終わった後、心を癒そうと平和な生活に戻ろうとした彼に対して、エリカ・シモンズの紹介により文月学園にきた。

元々工業カレッジの生徒だった上に最前線で最新鋭機を乗り回して

いた上に整備などもしていたので、

理系分野は教師よりも遥かに高い点数を誇る。代わりに国語系（特に古文）と日本史の点数は微妙。

身体能力は非常に高く、今作では戦闘能力は最も高い。最も戦う場面は来ないと思うが。

日本に来るのが振り分け試験よりも遅かった為、点数なしでFクラス行きが決定した。Fクラスの中核戦力。

SEEDと言う特殊能力を持っている。

枢木スザク（コードギアス 反逆のルルーシュシリーズ）

内閣総理大臣・枢木ゲンプの嫡子。温厚で生真面目な性格であるが、“生きる”ギアスで暴走することがある。

ルルーシュとナナリーとは小さい頃からの幼馴染で、彼らを大事にしている。

高い身体能力を誇り、運動神経も抜群。しかし学業はそれほど高くはない。

それどころか国語、日本史、保健体育以外は明久以下と言う悲惨な成績を持つ。

実はブリタニアのユーフェミア皇女と一定以上の関係を持っている。が、FFF団にはばれないように隠している。

紅月カレン（コードギアス 反逆のルルーシュシリーズ）

Fクラスの数少ない女子生徒。瑞希と並んで美波の天敵（主に身体の一部のせい）。兄ナオトと二人暮らし。

元々ブリタニアの留学生だった為カレン・シュタットフェルトを名乗っていたが、二年になってこちらに変えた。理由は後述。

彼女も高い身体能力を持ち、スザクにも引けを取らない。学業の方も低くはない。

しかし一年の頃ある理由で欠席気味で、留年は免れたものの授業に出なかった事が災いし、振り分け試験の結果は散々なもの。



一年の頃と二年の頃とでは彼女のギャップが大きく違う為、戸惑う者も多い。

原作と違ってルルーシュがゼロをやらない為、彼とのフラグが立たない。どうすればいいか検証中。

見ている皆さん、教えてください（別の奴のとフラグでもいいんで）。このままじゃ空気になる！

#### ・Aクラス

ルルーシュ・ランペルージ（コードギアス 反逆のルルーシュシリーズ）

コードギアスシリーズの主人公。シスコン。ナナリーとロロと三人暮らし。

彼の正体は元ブリタニア皇子で、今はその名を捨てている。ナナリーと共に人質として日本に送られた。

……しかしヤキン・ドゥーエ戦役によりその存在も忘れられ、更に人質として彼らを送った皇帝シャルルが失踪したので、

本国からは完全に忘れられてしまった。彼らの素性を知っているのはスザクとミレイのみである。

学業はトップレベルで、本校では霧島翔子と同じく一位。代表は初の男女一人ずつと言う事になっている。

運動能力は並で、体力は無い方。長身美形で、非常にもてる。一日に三十人の女性とデートしたという伝説があったりする。

ギアスと言う力を持っている。

アスラン・ザラ（機動戦士ガンダムSEEDシリーズ）

キラの幼馴染。一人暮らし。ほぼキラに付き添う形でこの学校に来た。典型的な優等生タイプ。

前大戦での関係上、名前はアレックス・ディノと名乗っているが、キラは普通にアスランと呼ぶ。

元ザフトのトップエリートだけあって身体能力は高い。学業も万遍なく高い。二年では五本指に入るほど。

彼も非常にもてる。ルルーシュと肩を並べるほど。この二人はFF F団では危険視されている。

今作では少し影が薄いかもしれない。彼もSEEDを持っている。

高町なのは（魔法少女リリカルなのはシリーズ）

リリカルなのはシリーズの主人公。自宅から電車で通っている。サイドテールの少女。

Sランク魔導士で、いつも相棒レイジングハートと一緒に。原作と違い、高校生である。中卒ではない。

しかしすでに時空管理局から強く勧誘されている。

学力はAクラス相応に高い。運動能力も鍛えている為低くはない。足は意外と遅い。

過去に生死の境目を迷うほどの大怪我を負っている。少し原作とは違うシチュエーションである。詳しくは後ほど。

フェイト・T・ハラオウン（魔法少女リリカルなのはシリーズ）

なのはの幼馴染。彼女とは九歳からの付き合い。美しい金色の長髪を持つ美少女。

彼女もSランク魔導士であり、相棒バルディッシュと共に行動している。彼女も時空（ry

学力はAクラス相応、特に英語は非常に高い。身体能力は非常に高い。

優れた容姿と優しい性格の為、告白が毎日のように来る。

八神はやて（魔法少女リリカルなのはシリーズ）

なのは、フェイトの幼馴染。同じく九歳からの付き合い。ヴォルケンリッター三人と一匹と暮らしている。

彼女はSSランク魔導士で（ry

Aクラスにいたので学力も高い。今では普通に立てる。

（細かい設定）

・S・E・E・D・

Superior Evolutionary Element  
Destined-factor（優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子）の略称。

かつて一度だけ学会誌に発表され議論を呼んだ概念。その後の詳細は不明。

今作ではキラとアスランのみ持っている特殊能力。現在使いこなせるのはキラ・ヤマトのみ。

発現すると目から光が消え、頭脳や身体能力などの全般的な能力が向上する、視界がクリアになる、冷静になるなど、

色んな副作用があるが、特に人体への害はない。召喚獣にもこの能力が付随する。

ギアスの力を完全に遮断する効果もある。「進化の力」が「王の力」を超える為かも知れない。

・ギアス

「王の力」と呼ばれる他者の思考に干渉する特殊能力。ルルーシュのギアスの効果は「絶対遵守の力」。

発動の際には左目に紋様が浮かび上がる。特殊な光情報を伝って命令をダイレクトに相手の大脳に刻みつけることにより、

いかなる命令にもいくつかの制限に縛られる事が無い限りは一度だけ従わせることができる。二度は効かない。

召喚獣にもこの能力が使える。しかし本体と違い、様々な制約がある。

1. 簡単な命令しか使えない（高度な命令は情報処理が追いつかない為）

2. 人↓召喚獣は不可能。その逆も勿論不可能。
3. 点数で負けていると全く効果が無い。勝っていても点数が近いとその分だけ効果が薄い。

逆に点数が大幅に勝っていると効果は絶大。目安として一科目百点差なら自在に操れる。

4. 一度の召喚に対して使えるのは一人につき一度のみ。逆に言うなら召喚し直せばまた同じ相手に使える。
- 以下のとおりである。特にルルーシュの学力ならば3が非常に優秀なアドバンテージになる。

上で挙げた二つの能力は、一定以上の点数獲得の際の腕輪の特殊能力とは全く別物である。要するに彼らだけの専売特許なのだ。

（ちょこつと蛇足）

## 英語力

- ・ペラペラに話せる
- キラ・ヤマト
- アスラン・ザラ
- ルルーシュ・ランペルージ
- フェイト・T・ハラオウン

※上の者たちはなんか国語か喋れます。

- ・読み書きくらいは

紅月カレン

それ以外はどっこいどっこい。

## 設定紹介（これが精一杯ですorz）（後書き）

餅「こんちわー。見てもらえば分かる通り、Aクラスは原作とは比べ物にならないくらい強いです」

キラ「どうするんだよ作者……打倒Aクラスが最終目的なのに」

餅「仕方ないだろ。クロスオーバーさせた作品で各キャラの学力を考えるとこうなるんだよ。それでも頑張った方だぞ？

特にカレンは」

ルルーシュ「最初俺がFクラス行きの案もあったらしいな」

餅「あったさ。でも無理だ。姫路さんみたいに身体が弱い設定持ちの奴なんかいねえだろ。どう考えても二番煎じじゃん。

Aクラスにぶち込んだ方が自然だろう。それにルルーシュがFクラスに来たら雄二涙目じゃないか」

キ「完全にキャラが食われるしなあ……」

ル「しかし俺がAクラス行きだとますます難攻不落になるんじゃない……」

餅「原作で何とかしてくれ。頼むぜ美少女」

いやマジで。自分で言うのもなんだがどうやって勝てばいいか想像もつかん。

## 1話くらまんす・どーん？（前書き）

人は、平等ではない。

生まれつき足の速い者。

美しい者。

親が貧しい者。

病弱な体を持つ者。

生まれも、育ちも、才能も、人間は皆違っておるのだ。

そうっ！ 人は差別される為にある！

だからこそ、人は争い、競い合い、そこに進化が生まれる。

不平等は悪ではない！ 平等こそが悪なのだ！

権利を平等にしたEUはどうだ？ 人気取りの衆愚政治に座しておる。

富を平等にした中国連邦は、怠け者ばかり。

だが、我がブリタニアはそうではない。

争い、競い、常に進化を続けておる！

ブリタニアだけが前へ、未来へと進んでいるのだ！

戦うのだ！！

競い、奪い、獲得し、支配し、その果てに未来がある！！

オールハイルブリタニア！！！！

（全ブリタニア皇帝、シャルル・ジ・ブリタニアの演説抜粋）

バカテスト【第一問】（科学）

問 以下の問いに答えなさい

「調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。

この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。」

姫路瑞希の答え

『問題点：マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例：ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』ではダメという引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点：ガス代を払っていなかったこと。』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。それに、ガスコンロの火で溶けることはありません。

吉井明久の答え

『合金の例：未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

紅月カレンの答え

『問題点：紅蓮の輻射波動を使わなかったこと』

教師のコメント

兵器を使わないでください。

枢木スザクの答え

『鍋はつくるよりも買った方が安い事に気付いた』

教師のコメント

お金は関係ありません。

## 1話くらまんす・どーん？

「すみません、ちょっと遅れましたっ♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

愛嬌たっぷり（本人曰く）言い放った明久に雄二は容赦なく暴言を  
発した。

「聞こえなかったのか？ ああ？」

余りの暴言に明久は雄二を睨みつけた。ややあって目をパチクリさ  
せた。

明久はようやく相手を認識したようだ。

「……雄二、何やってんの？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？ なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？ それじゃあ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ。これでこのクラスの全員が俺の兵隊というわけだ」

ニヤリと口の端を釣り上げた雄二。

明久が空いている席（卓袱台）を探していると、後ろの扉ががらりと開いた。

「えーと、ちょっと通してもらえないかね？ HRを始めるので」

覇気のない声とともに、どこにでもいそうな冴えない風のおっさんがそこにいた。



明久と雄二はそれぞれ返事をして席に着いた。

「えー、おはようございます。二年F組の担任の福原慎です。よろしく願います。では皆さん、ちゃんと卓袱台と

座布団は支給されてますか？不備がある人は——後で用具室に取りに来なさい。苦情は補習室に言ってください」

——え？死ねと？

明久を筆頭に、Fクラスは顔を引き攣らせた。

補習室に苦情↓鉄人と熱いバトル開始↓B A D      E N D

「さて、ではそろそろ——」

ガラッ

先生が何かを言いかけた途端、扉が唐突に開いた。

その扉から、息を切らしている、可憐で小柄な少女の姿があった。

「あ、あの、遅れて、すみません……」

『え？』

何故かクラスの全員が、全く同じ反応を示した。その感情は“困惑”の色が強い。

「あの、姫路瑞希と言います。よろしく願います……」

「丁度よかったです。今から皆に自己紹介してもらおうと思っています」

「そ、そうでしたか……先走ってすいません……」

「とんでもない。気に病み事はないですよ」

瑞希が先生との会話を終えた瞬間に間入れず男子生徒が高々と挙手した。

「はいっ！質問があります！」

「へ？は、はいっ、なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

ある意味誰もが湧く疑問であった。

当然だ。入学テストでは学年二位を記録し、上位一桁の常連である彼女が、最低クラスのこの教室にいる事が異質である。

普通に考えたらAクラスだろう、それが彼らの共通認識である。しかし、それを聞いた瑞希は緊張しながらもどこか無念そうな声色でこう言った。

「そ、それは……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

その言葉で、クラスの全員の疑問が氷解した。

振り分け試験は、欠席、途中退場は無得点扱いとなる仕様なのだ。点数が無いのであれば、ここにいても納得する。

『いやー俺もさ、熱（の問題）だ出たせいでFクラスに』

『ああ、あれは化学だったな。あれは難しかったな』

『俺は妹が事故に会ったのを聞いて実力を出しきれなくて』

『黙れや末っ子』

『前の晩から明け方まで、彼女が寝かしてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう、童貞』

ちらほらと聞こえる言い訳に、明久は呆れたような顔になった。

（みつともないなあ……僕は自信満々だったぞ。十点中一点は固かったんだからな）

そんな彼は間違いなくこのクラスの一員。

「あー静かにしなさい」

うるさくなった彼らを黙らせる為、先生は黒板をバンと叩いた。

バキィ バラバラバラ……

先生の前で黒板がスクラップに変わった。

「えー、替えのホワイトボードを用意します、少し長くなりますが、待っていてください」

先生は気まずそうに教室から立ち去った。

「で、ではこの一年間よろしく願いします！」

逃げるように雄二と明久の間の空いた席に滑り込んだ。

「……………」

明久は改めて壊れた黒板と教室の環境を見回した。そして、壊れた教卓を見て苦笑いをしている瑞希を見た。

それを見て、明久の中で一つの決意が付いた。明久は欠伸を噛み殺しているFクラス代表に話しかけた。

「……雄二、話があるんだ。ちょっといい？」

「ん？ なんだ？」

「ここじゃ話しくいから、廊下に行こう」

「別に構わんが」

明久は雄二を廊下にでた。一瞬だけ瑞希と目が合ったが、今はあえて無視した。

「んで、話って？」

「この教室についてなんだけど……」

「Fクラスの事か。想像以上に酷いもんだな」

「やっぱり雄二もそう思うよね」

「もちろんだ」

「で、Aクラスの設備は見た？」

「ああ、あれはすごかったな。あんな設備の教室は他に見たことがない」

明久はそこまで言って、ようやく本題に入った。

「そこで僕からの提案。折角二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「……姫路の為か」

目を細めた雄二が呆れかえった声を上げた。明久はぎょっとして聞き返した。

「ど、どうしてそれを！？」

「やっぱお前は単純な奴だな。カマかけるだけですぐ引っかかりやる」

「ハッ！　ち、違うよ！　あの設備が余りにも――」

「まあ動機なんてどうでもいいさ」

必死で弁解しようとする明久の言葉を遮って、雄二は楽しみとは別の、何かを企んでいるような笑みを顔に張り付けていた。

「どうでもいい、て？」

「お前に言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ」

「え？　どうして？　雄二だって全然勉強なんてしてないよね？」

「世の中学力が全てじゃないってこと、証明してみたくてな」

「???」

「それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたしな。話は終わりか？」  
「うん」

話を打ち切った二人が、教室に入っていく。

先生はまだ戻ってこない。先生不在の教室で、再び雄二が教壇に立った。

雄二は教卓に手をつき、全員に向き直った。

「全員、こちらを見ろ！」

雄二が喝を入れる。不思議と全員が雄二の方を向いた。

「Fクラス代表坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きに呼んでくれ。――さて、皆に聞きたい事がある」

雄二が視線を教室の各所に映し出す。皆もそれに従って視線の先を追いかける。

その――Fクラスの現状の姿を、だ。

暫くして雄二が目を閉じ、数秒後、こう始めた。

「Aクラスは冷房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが、俺達をご覧のあり様だ。さて——不満はないか？」

『大ありじゃあ——！』

Fクラスの魂の叫びが教室に響き渡った。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱えている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？余りにも差が大き過ぎる！』

「皆の意見も最もだ。そこでだ、これは代表としての提案なんだが——」

皆の反応に満足した雄二は、自身に満ち溢れた笑みを受かべて、こう言った。

「——FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

☆

ところ変わってAクラス——

そこは、とても学びやとは思えないような程の光景だった。五十人の生徒が使う教室にしては有り得ない広さ、中の豪華さ、設備の贅沢さ——どれをとっても高級ホテルと思えるほどだ。

「――では、初めにクラス代表を紹介します。今回は学校初めての  
同着主席により、代表が男女各一名となりました。

皆さん、ちゃんと覚えておいてください。ではお二人とも、前に  
来て下さい」

「……はい」

「はい」

呼ばれた二人が席を立った。

女子生徒の方は肩まで伸ばした黒髪に物静かな雰囲気を出す整  
った顔立ち。穢れを近づけさせない神々しさを放っている。

男子生徒の方は短く切った黒髪に長身で鋭い目つきが印象的である  
整った顔立ち。周りを威圧する覇気を放っている。

どちらも容姿はもちろん――この学年の頂点に位置する人物である。

「……霧島翔子です。よろしく願います」

「ルルーシュ・ランペルージだ。よろしく頼む」

二人はその場で会釈した。

☆

とりあえず先生が戻ってきてクラス全員の自己紹介も無事平和に終  
わった。吉井明久が震えているのはあえて放置する。

ようやく本題に戻った。

『勝てるわけないだろ……常識的に考えて』

『無理ゲーどころの騒ぎじゃねえ』

『姫路さんがいれば何もいらない』

悲鳴が次々と続出する。

しかしそれは当然の反応だ。

何故なら、AクラスとFクラスでは戦力が大きく離れているのだ。この宣戦布告は余りにも無謀すぎる。

例えるなら、サメハダーVSヌケニンくらいである。

ウハWWW詰んでるWWWと思いたくもなるだろう。

だが、そんな圧倒的な戦力を知りながらも、雄二は少しも怯む様子はない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たして見せる」

『何を根拠にそんな事を言ってるんだよ』

『無理に決まってるんだろ常考』

『馬鹿なの？死ぬの？』

否定的な声が多数上がる。

しかし誰がどう考えても勝てる戦いではない。勝ち目のない戦いを挑むなど只の馬鹿のすることだ。

それでも尚雄二は態度を変えない。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争をで勝つことのできる要素が揃っている」

『なん……だと……？』

この言葉に皆ざわついた。疑問に思う者もいて当然だ、そんな要素があるならFクラスにはいない。

しかし不敵な笑みを浮かべたまま、雄二はこう続けた。

「それを今から説明してやる。……おいムツツリーニ。豊に顔を近づけて紅月のスカートの中覗いてないで前に来い」

「……………!!」



「！ フンッ！！」

否定しようとしたムツツリーニと呼ばれた小柄な少年が、紅月と呼ばれた少女の拳をかわして前に来た。

「こいつの名前は土屋康太。あの有名な、寡黙なる性識者だ」  
ムツツリーニ

「……………！！」 ブンブン

『ムツツリーニだと……………！』

『馬鹿な……………実在していたのか……………！』

『だがあれを見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……………！』

『さすが、ムツツリに恥じない姿だ』

ザワ…………ザワ…………

男子生徒の中で異名が轟いているようだ。流石伊達ではない。良いか悪いかは置いておこう。

「姫路の事は説明する事もないな。皆もその力を良く知っているだろう」

「えっ？ わ、私ですか？」

「そうだ。うちの主戦力だ。期待している」

殆ど切り札と言って違いない彼女の實力。Aクラス攻略には必要不可欠な存在になる事が予想される。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだ』

『彼女ならAクラスにも引けを取らないな』

『ああ、彼女さえいれば何もいらなないな』

（さっきから誰だ、姫路さんにラブコール送っているのは。一人と

は限らないけど)

明久が周りを見渡す。

「スザク、前に来い」

「? わかった」

見た目が優しそうでいてなぜかワイルドにも取れそうな印象の少年が前に出た。

「枢木スザクだ。こいつの実力も知ってるだろう?」

『確か枢木ゲンブ首相の息子だったよな』

『文系科目なら高得点取れる奴だったな確か』

(それ以外は僕にも劣るけどね)

「木下秀吉だっている。木下優子を姉に持っているのは知っているな?——そして当然、俺も全力を尽くす」

段々教室の士気が上がってきた。

(これはもしかして、いけるんじゃないか?)

「そして、吉井明久もいる」

## 1話くらまんす・どーん？（後書き）

書いてみて気付いたこと

カレンのキャラがわかんねええええええ

誰か教えてください。

とりあえず報告します。

当作品は、更新を週に一度、月曜日とします。よろしく。

前にも言ったけど、一卷分の話はかなりカットしますのであしからず。

果たして明久に秘められた能力とは……驚愕すべき存在の正体は、

次号公開！！

絶対に見逃すな！！

## 2話「明久」「試召戦争、やらないか」D「ウホッいいカモ」明久「アッー!」

バカテスト【第二問】（国語）

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（2）悪いことがあったうえに更に更に悪いことがおきる喩え』

姫路瑞希の答え

『（1）弘法も筆の誤り』

『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、

（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（2）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

ルルーシュ・ランペルージの答え

『（2）土下座に足蹴に拘束』

教師のコメント

何故か実感が感じられます。

2話「明久」「試召戦争、やらないか」D「ウホッいいカモ」明久「アッー！」

『誰だよそいつ』

『聞いたことないぞ』

一気に下がる士気。明久は雄二に食ってかかった。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！折角上がりかけた士気が下がったじゃないか！」

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書は『観察処分者』だ」

明久を無視した雄二が、説明を付け加えた。それに一人の生徒が反応した。

「それって確か、バカの代名詞じゃないか？」

「ち、違うよ！それ「いかにも、バカの代名詞だ」肯定するなバカ雄二！」

激昂する明久に、瑞希が小首を傾げた。

「あの、それってどういうものなんですか？」

「説明中」

「そうなんですか？それってすごいですね。そんな事が出来るならとっても便利ですよ」

「あはは、そんなに大したものじゃないんだよ」

目をキラキラ輝かせている瑞希に、明久はむずがゆいような表情になる。

何せ、効果範囲は必ず教師の監視下なのだ。便利どころか只の罰でしかないのだ。

「まあ、こいつの戦力では雑兵Aが関の山だな。とにかく、俺達の力の証明として、まずはDクラスを制圧してみようと思う」

「もしかして、さりげなく僕雑魚扱いされてない？」

明久が不満を言うが仕方ない。学力から考えるとそうなのだから。雄二は全員に向き直り、手をパンパンと叩いて注目を集めた。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『おう！』

「ならば全員筆を執れ！ 出撃の準備だ！」

『おおー！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおおおお！』

「お、おおー……」

クラスのほぼ全員が雄叫びを上げた。瑞希もそれに合わせて小さく声を上げた。

「さてと、早速だが明久、Dクラスへの宣戦布告の死者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の死者って大抵酷い目に遭うよね」

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ  
て行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」  
(ただの馬鹿だと)

明久はそう言いたくなる口を塞ぎ、明久は気が進まない様子で反論しようとする。

「でもさ……」

「俺を信じる。俺は友人を騙すような真似はしない」  
(くっ……その言い方は卑怯だぞ……)

その言い方にずるさを感じつつ、悪い気がしなかった明久は立ち上がった。

「わかったよ。それなら死者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

明久はクラスメイトの歓声と拍手を背に、教室から立ち去った。

「……ホント、単純な奴だな」

雄二は独りごちた。すると明久と入れ違いに福原先生が戻ってきた。

「そうそう、さっきHRで言い忘れていた事なんだが、明日、このクラスに転校生が来ることになっている」

『女子ですか!？』

Dクラスの男子の殆どが一斉に立ち上がってそう叫んだ。先生は呆れたような顔でこう言った。

「残念だが、男子だ。代表の坂本君、放課後一人分の卓袱台と座布



団を用意しときなさい」

それだけ言い残し、先生は去っていった。

男子生徒は「なんだあ、野郎かよ……」と落胆したような表情で座り込んだ。

雄二も大して関心もなくこの話題を頭の隅にやった。今日の戦争では使い物にならないからだ。

それに転校生もテストを受けているから、点数もあるはず、ならば雑兵が一人増えるだけ……と大して受け止めもしなかった。

——この時は、だが。

☆

「騙されたあ！」

戻ってきた明久が開口一番に言った言葉がそれだった。その風体はボロボロだった。

そんな明久を見て、雄二は平然とのたまった。

「やはりそう来たか」

「やはりってなんだよ！ やっぱりこうなるのは予測済みだったってことかよ」

「当然だ。そんなことも予想できないようにで代表が務まるか」

「少しは悪びれろよ！」

「吉井君、大丈夫ですか？」

雄二と口論している明久に瑞希が駆け寄った。

明久は表情を変えて平気そうにふるまった。彼の男の意地かもしれない。

「うん。大丈夫。殆どがかすり傷だよ」

「吉井、本当に大丈夫？」

今度は数少ない女子生徒である島田美波が駆け寄ってきた。自己紹介を割合したのでこれが初登場でもある。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチがまだ殴る余地があるんだ」

「ああ！もうダメ！死にそう！」

「いつまでもコントやってないでさっさとミーティングやるぞ」

彼らのやり取りを無視して場所を移そうと教室を出る雄二。流石に興味のない事には無関心である。

「あの、痛かったら言って下さいね？」

そう言って瑞希は小走りで雄二の後を追った。

「大変じゃったのう」

「災難だったね」

後ろから二人の生徒が話しかけてきた。片方は男子生徒で、もう片方は女子生徒だった。

男子の方は枢木スザク、女子生徒の方は木下秀吉だ。

彼らが明久の肩を叩いた。

後ろに自分の頬をさすりながら歩く男子——ムツツリーニが続く。

「……………」サスサス

「ムツツリーニ、覗いていた時の畳の後ならもう消えてるよ？」

「……………！！」ブンブン

「いや、今更否定されても、ムッツリーニがHなのは知ってるから」  
「……………!!」ブンブン

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いの  
うよ」

「……………!!」ブンブン

「——で、何色だった？」

「赤」

「フンッ!!」

突然カレンの拳が飛んできて、明久とムッツリーニが吹き飛んだ。  
情けなく横たわる明久とムッツリーニの胸倉を掴んで引き寄せ、カ  
レンが二人にしっかり聞こえる様に言った。

「忘れなさい」

「「はい」」

屍と化した二人を投げ捨てて、カレンは行った。

「どうでもいいけど、あの人去年とキャラが変わり過ぎだよね。何  
があったんだろう」

「……………一年遅い高校デビュー？」

殴られた個所を擦りながらのんびり会話して屋上に向かった。

（今回の発端はある意味僕なんだから、ちゃんとミーティングには  
参加しないとね）

☆

雲一つない空から眩しい光が差し込んだ。その光に全員目を細めて  
いた。

何故か顔に赤い紅葉を作って鼻血を流しているムッツリーニを除いて。

「さて、明久。宣戦布告はしてきたな？」

「うん。一応今日の午後に開始予定と告げてきたけど」

全員が腰を下ろす。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼くらいはまともな物食べろよ？」

「そう思うならパンの一つでも奢ってくれると嬉しいんだけど」

「僕のをやろうか？」

スザクが笑顔で明久に言った。明久の顔が引き攣った。

「スザクのパンは硬過ぎて食べ物じゃないよ……」

「それでもないよ？」

バキィツと音を立てフランスパンをへし折ったスザクは一つを明久に手渡した。

「はいこれ」

「……」

複雑な顔をした明久がそれを齧る。明久は涙目になった。

「吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

明久が涙目のまま振り返ると、驚いたような表情の瑞希が明久の方を向いていた。

「いや、一応食べているよ」

「……あれは食べていると言えるのか？」

雄二が横槍を入れる。明久はムッとなって反論した。

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って——水と塩だろ？」

「失礼な！きちんと砂糖だって食べているさ！」

「それ、食べるって言うの？」

「舐める、が正しいじゃろうな」

皆が奇異な目で明久を見た。

「まあ、飯代まで遊びに注ぎ込むお前が悪いがな」

「し、仕送りが足りないんだよ！」

明久が必死に弁解していると瑞希がおずおずと手を上げた。

「あ、あの、良かったら私がお弁当を作ってきましたようか？」

「あ？」

——なん……だと……？

「本当にいいの？ 僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ」

「どんな生活してるんだ……？」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

素直に喜んでいる明久を一瞥して、美波が面白くなさそうに呟いた。

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井“だけ”に作ってくるなんて」

そんな棘のある言葉に明久は焦った。

（なんてこと言うんだ！そんなこと言ったら僕のライフラインがつ！）

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

しかし予想に反して、瑞希は意外な提案をした。

「俺達にも？ いいのか？」

「はい。迷惑でなければ」

「それは楽しみじゃのう」

「……………」コクコク

「楽しみだなあ」

「私もお願いしようかしら」

「……お手並み拝見ね」

（少し多すぎじゃないのか？これじゃあ姫路さんの負担が大きくなるんじゃない）

「わかりました。それじゃ、皆さんにも作ってきますね」

やはり嫌な顔一つせずになんか言った瑞希に、明久はポロっと口に出した。

「姫路さんって優しいね」

明久の嘘偽りのない言葉に、瑞希が顔を赤く染めた。

「そ、そんな……」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君の事好き」「おい明久、今振られると弁当の話は無くなるぞ」

――にしたいと思ってました」

（フッ。失恋回避成功。きっとNT顔負けの回避運動。流石は僕の判断力だ）

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、只の変態じゃぞ」  
（畜生！怨むぞ僕の判断力！）

「明久、お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「すごいなあ。そんな事を堂々と言えるなんて」

「……通報しとこうか？」

「だって……お弁当が……」

明久が社会的に危険な存在となった。

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻そうか」

そうして、Dクラス戦の作戦会議が始まったのだった。

## 2 話く明久「試召戦争、やらないか」D「ウホッいいカモ」明久「アッー!」く

明久と雄二と瑞希以外空気ですなあ

あ、あとキャラ募集します。感想の所に出してほしいキャラの名前と年齢、原作名を書いてください。

いや、本当をお願いします。

・15〜19に年齢調整できるキャラ

・教師キャラもおk

・三年キャラ求む!

一応NGキャラも

・人外(人の形を保って下さい)

・超人(美少女はおk)

・概出のキャラとの関係上年齢調整できないキャラ

(例) シン、スバル、ティアナ



3話〜F「Dクラス戦の行動は既に終わってました」D「なん…だと…」(音

問題【英語】

以下の英文を訳しなさい

『This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly.  
』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。二人ともきちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

『☆●◆▽♪＊― ー』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

枢木スザクの答え

『この◆▽♪※…』

教師のコメント

吉井君と同じレベルですか。

### 3話／F「Dクラス戦の行動は既に終わってました」D「なん…だと…」

なんかかんやでDクラス戦に勝利したFクラス。

設備交換を雄二が拒否し、代わりに条件を押し付けてこの試召戦争は終わった。詳しくは原作で。っーか姫路さん無双ね。

明久は雄二と帰宅していた途中、忘れ物を取りに帰る為に学校に引き返して行った。

「たっだいまー」

明久はまるで我が家のようにFクラスの教室に入ってしまった。こんな汚い教室に一日で自宅の様な親近感を覚えるとは、この男の生活レベルが気になる。

因みに鍵など掛かっていない為、容易に出入りすることができる。最も、好き好んでこんな汚い教室に入ってこようと思う奴は、少数派なのは間違いないが。

「よ、吉井君！？ どどどどどうしたんですか！？」

「あれ？ 姫路さん？」

明久は誰もいないと思って教室に入ってしまったので、先客の存在に目を丸くした。

しかしどちらかと言うと驚いたのは瑞希の方だった。誰もいない薄暗い教室でいきなり「たっだいまー」ときたのだ。

驚くのも当然だろう。

しかし瑞希は驚いただけではなく、慌てだした。明久が不審がると、彼女の後ろの卓袱台に何かがあるのにきづいた。

「あ、あのっ、これはっ」

（あれは……まるで雄二へのラブレターに使うような便箋と雄二へのラブレターに使うような封筒だけど、使い道がわからない）

——現実を見ろ。明らかにラブレターじゃないか。

（また現れたか僕の中の悪魔！僕はそんな虚言に騙されはしない！  
大体、そこまで言うなら翔子はどこにあるのさ！！）

「これはですね、そのっ」

「うんうん、わかってる。大丈夫だよ」

「えっと——あんっ」

卓袱台につまづく瑞希。その拍子に手紙の中身が見えた。その見えた一文が、こうだった。

《あなたの事が好きです》

（……………）

——……これ以上ない物的証拠だと思うが？。

（……………）

——わかっただろう？これが現実だ。さっさと諦めて認めようぜ？

明久は手紙を綺麗にたたんで、笑顔で瑞希に差し出してこう言った。

「変わった不幸の手紙だね」

——いやいや、現実見ろよ！

「あ、あの、それはそれで凄く困る勘違いなんですけど……」

「ハハハそんなことをしないで、言ってくれたら僕が直接手を下して上げるのに。ああ大丈夫。スザクから打撃の方法を教わっているから、法には触れないと思うよ」

「吉井君。これは不幸の手紙じゃないですから」

「嘘だ！」

明久は某オヤシロ様の如く叫んだ。己の無念を含んで。

「それは間違いなく不幸の手紙だ！現に僕はこんなにも不幸な気分になっているじゃないか！」

「吉井君」

子供のように手を振り回していると、瑞希が優しそうに明久の手を握った。

そのぬくもりにハッとした明久は、暴れるのをやめて瑞希の目を見た。心も段々落ち着く。

「落ち着いてください。そんなに暴れると身体をぶつけてけがをしちゃいますよ？」

その言葉を聞いて、明久はようやく自分の身体を蝕む感情を理解した。これは――敗北感だ。

「――仕方ない。現実を認めよう」

明久はそれを言い切った途端、ガクツと膝をついた。orzになった。

こうして、明久の儂い憧れは潰えてしまったのだった――。

☆

ルルーシュ・ランペルージは帰宅していた。初日で代表と言う事もあって少し遅くなってしまったらしい。

これから妹のナナリーの為に晩御飯を作ってやらねばならない。腹をすかせて待っている妹の事を思うと早く帰ってやりたくなる。

今日も無事に帰る事が出来たのだろうか。沙代子がいるとはいえ、暴漢や変態の類はまだ安心できるも、悪い虫がついては困る。

沙代子はああ見えて常識が飛んでいる事もあるので、そういう方面の防衛はあまり効果が無い。

新学期が始まるのだ、ナナリーに関わってなかった奴がナナリーに関わる。

そうするとナナリーの魅力に惹かれて近づこうとする身の程知らずが現れるかもしれない。

確かにナナリーは可愛い。そして純粹だ。差し詰め可憐に舞う穢れを知らない妖精の如しだ。その可愛さは最早絶対的と言っていいだろう。不可侵の領域だ。

それを汚そうとするなど、万死にも値する罪だ。

そういえば最近よくナナリーと一緒にいるのを見かけるY（仮）はナナリーを狙っているのかもしれない。

——ふざけるなよ……！　誰がナナリーの魅力を磨いていると思っているのか……！？

朝五時に起きてナナリーが寝ている間に良い香りが出る香水をつけて、服は常にクリーニングに出して、

（ナナリーの）髪の手入れも毎朝一時間かけているんだぞ……

！　そんな手塩をかけて磨いてきた妹を、

どこの馬の骨ともわからん奴に渡せるものか！　やはり……早めにギアスをかけるべきか……？

「おい、ルルーシュ」

聞きなれた声にルルーシュは思考を中断して振り返った。

「スザクか」

「やあ偶然。随分と帰りが遅いね」

「まあAクラスの代表ともなれば、何かと面倒な仕事が多いからな」

「ふーん。大変そうだね」

「面倒ではあるがな。それよりお前はなんでこんなに遅いんだ？」

「今日は試召戦争があったんだよ。僕のクラスとDクラスとで」

「ほう……」

そう言えば、新学期初日でいきなり試召戦争という、文月学園始まって以来初の出来事があった。それは全校生徒が知っている。

勿論ルルーシュもその事は耳にしているが、さっきも言ったように色々忙しくそちらにまで情報が回らなかった。

ルルーシュはそれとなく情報を聞き出してみた。

「で？ どちらが勝ったんだ？」

「Fクラスだよ。僕も正直言って今やって勝てるとは思わなかったよ」

「ふむ……」

相槌を打ったルルーシュだったが。内心では驚いていた。

——なんだと？ 振り分け試験直後のこの段階で？

何度も言うが、今日は二年生の初日なのだ、クラス分けの振り分け試験の結果がそのまま点数に、戦力に出る。

つまり今の段階ではクラスのランクがそのまま戦力差となっているはずなのだ。

ましてやFクラスは最下級クラス、二つ上のDクラスに勝てるとは

思えない。いくら策を練ろうが、Fクラスでは――  
気になったルルーシュはまたもやそれとなく聞いてみた。

「しかし、本当に意外だったな。DクラスにFクラスが勝つなんて」  
「姫路さんがいてくれたおかげかな。彼女がいなかったら勝てたかどうかかわからなかったよ」

（姫路……姫路瑞希、か？）

確か入学の時の試験で高い点数を取っていた女子生徒の名前だったな、とルルーシュは思った。

そう言えば、Aクラス確実と言われていた彼女がAクラスにいなかった。その時点で、その可能性を考えてみるべきだったか。まあいいか、とルルーシュは会話を続けた。

「まあ、何にせよ良かったなスザク。これであのFクラスの設備とおさらばできたからな」

「いや、設備はまだそのままだよ？」

「ああ、そうだったな。今日はもう遅いから明日変えるのか」

「違うよ。僕らの目標はDクラスの設備じゃないらしいよ。代表がそう言ってた」

「目標があるのか？」

「うん。Aクラスの設備だって。絶対に勝つって言ってたほどだよ」  
（なっ……!?!）

ルルーシュはその言葉を聞いて絶句した。

――Fクラスの代表は正気なのか？

自惚れるつもりではないが、Fクラスがいくら頑張ってもAクラスには勝てない。それはそうだ。最上級クラスと最下級クラスだ。

その差は絶望的だ。しかも、振り分け試験の直後、姫路がいたとしても無理だ。



だが――逆に考えるなら、何か勝つ為の策があると考えてもおかし  
くはない。

少なくとも今の時点でFクラスの目標が自分の所属するクラスであ  
る以上、最悪のパターンを想定しなければならない。

それがAクラスの代表の自分の責務でもあるのだ。

後でとりあえずAクラスの代表である坂本、そしてFクラスのメン  
バーの事を調べる必要があるそうだ。

少なくとも姫路一人でAクラスに挑もうと思えない。何か策か、あ  
るいは切り札があるだろう。

そのままスザクと別れ、帰宅したルルーシュは絶句した。

ピザの箱が多数散らかっているからだ。

「C・C. ーーーーー!!!!!!」

「なんだ、うるさいな……」

「ど、どうしたんですか？ お兄様」

ナナリーとC・C. が同時に顔を出した。ルルーシュは引き攣った  
顔を隠そうともせずにC・C. の腕を引っ張った。

声だけは穏やかなので見ている側からすると非常に奇妙極まりない  
光景だ。

「ダメじゃないかC・C.、こんなに服を汚して。こっちに来て洗  
濯しないと。ナナリー、すぐに食事の準備をするから、

少しだけ待っててくれ」

「は、はい」

そのまま部屋を変えた後、ルルーシュはC・C. の胸倉を掴み上げ  
た。

「何を考えているんだお前は！ ピザは一日二箱だと決めていただろうが！ なんて十個も箱があるんだ！」

「十じゃない、十二だ」

激昂するルルーシュに対して、C・C・はあくまでしれっと答えた。

「何を怒っているんだルルーシュ。今日は進学と言うめでたい日じゃないか。だからこうしていつもよりも多くピザを注文して

進学記念をしようとしているのに、何を怒るところがある」

「誰の進学記念だ！ お前が一人でピザ食ってただけだろうが！

何かにかこつけても多くピザを食ってただけだろ！ しかも十二…六日分じゃないか！」

「まあそうカリカリするな。五箱買えばサービスが付いてな。一つピザが注文できるんだ。お得だと思わないか？」

「つまりお前は、十のピザを俺の口座から下ろして買ったわけだな」

「そうなるな。二つ分も得するとは、中々の計算だっただろう」

（ダメだこいつ…早く何とかしないと）

偉そうに胸を張るC・C・に、ルルーシュは何も言う気が失せていた。

☆

翌朝――

「うおおおおおおおんん！！」

明久は跳び起きた。そしてすぐに項垂れた。

「……やっぱり、夢じゃなかったかあ……」

昨日の放課後、教室で起こった一連のイベント、そして明かされる瑞希の真実。

その後の、とても否定できない彼女の真摯な想い。

足が震える。それでも明久は立つ。ここで挫けるわけにはいかない。そもそも無理を言って開戦を提案したのは明久なのだ。

ここで折れるわけにはいかない。明久はそう思い直し、台所に向かった。

「パンの耳が三切れ……うん、まだ三日は生きていけるな」

浪費癖が付いているどこかの魔女とは大違いの生活を繰り広げている明久であった。

☆

学校に着いた明久は、教室に入ってすぐ疾走した。

Dクラス戦で船越先生と交際する約束(?)をどうにかする為だ。

明久は未知の存在(船越先生)と遭遇して来るべき対話を果たした結果、無事貞操は守られた。

そうしてFクラスの教室に戻ると、HRが始まっていた。

「吉井君、HRが始まっていますよ。早く席に着きなさい」

「はあい」

特に文句も言わず、明久は卓袱台に着いた。

「アー早速だが、昨日言っていた転校生の紹介をする。――入りなさい」

「はい」

前の扉がガラツと開いて、一人の少年が入ってきた。

「本日よりFクラスに編入になった、キラ・ヤマトです。よろしく  
お願いします」

礼儀正しくお辞儀をするキラに、明久達Fクラスは第一印象は良く  
映った。

彼の席が宛がわれて、彼もそこに座る。

「では、今日も一日勉学に励むように」

☆

『うあー、疲れたー』

多くの生徒が卓袱台に突っ伏した。  
この時点で四教科が終了。只でさえ勉学が不得意な彼らは、精神的  
にも肉体的にも疲労が激しい。

「うむ、今回は疲れたのう」

「うーん、結構難しかったしね」

「……………」コクコク

スザクと秀吉とムツツリーニが揃って明久の方に来た。

どうでもいいが、秀吉のポニーテール姿を見て明久は僅かに股間が  
反応した。余談だが作者もポニテは興奮する。

ムツツリーニは無口で存在が薄いようだが、彼にしてみれば好都合  
なのだそうだ。

スザクはいつものように朗らかに笑う。しかし目尻を良く見ると疲労しているのがわかる。

「よし、昼飯を食いに行くぞ！」

勢いよく立ち上がる雄二。彼からは疲労らしきものは見当たらない。借りにも代表である。健康管理は勿論、試召戦争において代表が疲れを見せていては全体の士気にもかかわるだろう。

「あ、あの、皆さん……」

全員が立ち上がり、学食へ向かおうとした矢先、か細い声が彼らを止めた。

「あ、姫路さん。一緒に学食行くかい？」

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

「おお、もしや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑でなかったらどうぞ」

瑞希が後ろのバッグから黒い風呂敷に包まれた箱を取り出した。見るからに大きい弁当箱だ。きっと全員分作ってきたのだろう。明久は顔を輝かせた。

「迷惑なもんか！　ね、雄二！」

「ああ、そうだな。これはありがたい」

「そうですか？　良かった」

こうして楽しい楽しいお昼ご飯が始まるのだった。

### 3話〜F「Dクラス戦の行動は既に終わってました」D「なん…だと…」

全然クロスオーバーの良さを活かせていない……これが、文才のなさか……

キラはBクラス戦まで空気だと思って。なのは達に至ってはAクラスまで……

てか早くAクラス戦やりてえ

あとルルーシュがこんなに書きやすい奴とは思わなかったです。

キャラ募集少し訂正します。よろしく

感想の所に出してほしいキャラの名前と年齢、原作名を書いてください。

・できるだけ今やっていない原作の作品キャラ求む

・地球が舞台の作品のキャラ

・15〜19に年齢調整できるキャラ

・教師キャラもおk

・三年キャラ求む！

一応NGキャラも

・無個性なキャラ（強力な個性が無いとダメ）

・人外（人の形を保って下さい）

・超人（美少女はおk）

注意

・頭のいいキャラは基本的にFクラスには来ません（あくまで基本的に、だけど）

・飛び級はなし（あって一人。勿論Aクラス行き）

#### 4話／俺、これ食い切ったら故郷で結婚式挙げるんだ……（前書き）

##### 問題【数学】

以下の問いに答えなさい

(1)  $4\sin X + 3\cos 3X \parallel 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する  $X$  の値を1つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、？／？の中から選りなさい

$\sin A + \cos B$        $\sin A - \cos B$        $\sin A \cos B$        $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

(1)  $X \parallel \pi / 6$

(2) ？

教師のコメント

そうですね。角度を『 $\circ$ 』ではなく『 $\pi$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

(1)  $X \parallel$  およそ3

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

紅月カレンの答え

(1)  $X \parallel \pi / 3$

教師のコメント

正直言うと、今回の(1)の問題は非常に正解率の低い物です。解こうとした気概は認めます。

枢木スザクの答え

(2) ?か?

教師のコメント

複数回答は×です。ついでに言うと、どちらも間違いです。

どうでもいいけど、この問題難し過ぎないか? 多分偏差値65以上ないと解けない気がするんだが……少なくとも高2の問題にしては難易度高過ぎると思う。



#### 4話　俺、これ食い切ったら故郷で結婚式挙げるんだ……

瑞希がお弁当を用意してくれたので、一同は屋上へと場所を移した。Fクラスで食事となると、男臭さと腐った畳やら埃やらで美味しく食べられないからである。

なので、場所移動に反対する者は誰もいなかった。

「天気が良くて何よりじゃ」

「そうだね」

「気持ちいいねー」

「……………」コクコク

「今シート広げますね」

何かとピクニック気分の一同。屋上には誰もいないので貸切状態だ。瑞希が大きな重箱の蓋を開けた。

「あの、あんまり自信はないんですけど」

『おおお!』

料理の定番のメニューが揃っていて、一見してとても美味そうだ。

「それじゃ雄二には悪いけど、先に」

「……………」ヒョイ

「あ、ずるいぞムツツリーニ」

「……………」パク

素早い行動でムツツリーニがエビフライを口に運んだ。

ボタン　ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ

いきなり顔から倒れ、小刻みに震える。顔色が真っ青だ。

「……………」

「……………」

「……………」

明久と秀吉とスザクは顔を見合わせた。

「わわっ、土屋君!？」

瑞希が割り箸を落として駆け寄った。ムッツリーニはムクリと立ち上がった。

「……………」グッ

握り拳に親指を立てて、良い笑顔で——散った。

(なぜだろう、ムッツリーニが今までで一番輝いて見える?)

(身体があんなに震えて……僕でもどんな打撃食らってもあそこまでの状況に陥ったことないよ)

(というか、原因はどう考えても——)

「あ、お口に合いましたか? それは良かったですっ。皆さんもどんどん食べてくださいね」

笑顔で勧めてくる彼女。普通の健全な男子なら無下にはできない。……のだが、

(……どう見ても、ムッツリーニのあれは演技には見えん)

（というより、今演技する理由も必要性もどこにもないからね）  
（うん、ヤバいね）

ヤバくね？ 的な空気の仲、三人とも顔には笑顔を張り付けている。

（ならば、ここはワシに任せてもらおう）

（そんな！ 危ないよ！）

（ここで無駄死にする気か！）

（じゃが、誰かがこの人を全うせねばいかんじやろう——）

悲壮な覚悟をする秀吉とそれを制止しようとする男二人。そこに未来を切り開く革新者がきた。

「おう、待たせたな。へー、こりゃ美味そうじゃねえか。どれどれ？」

「あ、雄二」

と、止める間もなく卵焼きを口に放り込み

パク バタン——ガシャン ガタガタガタガタガタ

ジュースの缶の中身をぶちまけて崩れ落ちた。その姿を見て三人が思いつき顔を引き攣らせた。

「さ、坂本！？ ちょっと、どうしたの！？」

「な、何が起こったの！？」

遅れてやってきた美波とカレンが目丸くして雄二に駆け寄る

『毒を盛ったな？』

雄二が目で訴えてきた。明久は目で返事する。

『違うよ。これが姫路さんの実力だよ』

アイコンタクトって超便利っすね。

「あ、足が攣ってな……」

「あははは、さっきダッシュで昇り降りしたからじゃないかな」  
「うむ、そうじゃな」

「そうなの？坂本って結構鍛えられてると思うけど」

「それでも、やっぱり攣る時は攣るもんだよ」

（どうするのじゃ？）

（とにかく、まだ事情がわかっていない島田さんをここにいさせるのは危険だ）

（そうだね、すぐにでも退場願おうか）

「ところで島田さん、その手についてるあたりに虫の死骸があったよ」

「ええ！？」

勿論嘘である。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がいいよ」

「そうね。ちょっと行ってくるから」

美波はそのまま姿を消していった。

男達の必死の緊急会議にカレンが混ざった。カレンは何かを察したようだったので、退場しなかった。

（で？　　どういうこと？）

（それはかくしかじかで……）

（あれはさっきの決心が鈍る……）

（でもどうする気なんだい？ この状況を打破するには、誰かが食べなきゃいけないよね）

（逝け！ 明久！ 逝って未来を切り開け！）

（絶対嫌だ！ そうだ！ こんな時は公平にジャンケンでも！）

（まあ……それなら文句なしかな）

（恨みっこなしじゃぞ）

というわけで五人はじゃんけんしました、まる

明久 パー

雄二 パー

秀吉 パー

カレン パー

スザク グー

「なんで……あの時グーなんか……」

「文句なしね」

「頼んだぞスザク！」

後ろで声援を受け取りながら、スザクが悲壮な覚悟を決めて、改めて瑞希の弁当箱を見つめた。

スザクの脳裏に、無念を残して散っていったムツツリーニ死んでいった雄二の姿がフラッシュバックする。

——そうか……僕はここで死ぬんだ……僕は……僕は……！ 俺は！

突然、スザクの目が赤く発光した。

「俺は！ 生きなきゃならないんだあああつあああ！！！！」  
「何！？」

「スザクめ！ 血迷ったか！」

すつくと立ち上がったスザクがこの場から退避しようと屋上の出口に向かおうとした、ところを雄二とカレンに取り押さえられた。

「邪魔をするな！ 俺は生きなきゃならないんだあああああ！」

「ええい、公平に決まった事だろうが！ 文句を言うな！」

「あなたに、正義さえあれば！」

「あ！ 姫路さん！ あれはなんだ！？」

「え？ なんですか？」

明久が指差した方向を瑞希が見た。

（隙ありいいいい！！）

「やめもごっ」

明久はスザクの口いっぱいに弁当の中身を押し込んだ。

暴れようとするスザクをカレンと雄二が捻じ伏せ、明久が顎を掴んで咀嚼させた。

次第にスザクの身体の力が抜けていき、クタツと倒れた。白目をしているところが恐ろしい。

「ん、これでよしと」

「お主ら……凄い連携プレイじゃのう」

秀吉が感心しているのか呆れているのかわからない口調でそう言った。

「…？何もないですよ？」

「ごめんごめん、見間違いだった」

古典的な罨に引っ掛かっていた瑞希がこちらを見た。

「弁当美味しかったよ、ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

「そうね。良かったと思う」

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。特にスザクが『美味しい美味しい』ってすごい勢いで」

因みにスザクは泡を吹いて倒れている。へんじがない、ただのしかばねのようだ

瑞希はそんなスザクの状態に気付いていない。

「そうですか！ 嬉しいです」

「そういえば、美味しいと言えば――」

『また作ってきますね』阻止作戦、始動。

「ああ、あの店じゃな。確かに評判は良いな」

「へえ、そんな店があるんですか」

「うん。確か翠屋だっけ。今度今日のお礼に雄二が奢ってくれるってさ」

「てめ、勝手な事を言うなっの」

「あ、そうでした」

「う？ どうしたの？」

瑞希がバッグの中を漁り始めた。一同は嫌な予感した。





「お前は……たしか転校生？」

今日来たばかりのキラ・ヤマトその人だった。

「代表、話が……って、何してるの？」

「良い所に来た転校生！ 今皆でデザート食べているんだ！  
を深める意味でも一緒に食べないか！？」 親睦

雄二が必死の形相（しかし完璧な笑顔）でキラに勧めた。

親睦を深める、と言うところでキラは顔を赤らめた。

「え……いいの？」

「いい、むしろ歓迎するぞ！」

「そうだよ！ 食事は数が多いほど楽しいしね！」

「な、なら……遠慮なく」

キラが座る。未知の存在が入った容器をキラに手渡す。キラは嬉しそうにスプーンですくって、口の中に入れた。

「……！！！！？！！？！！？」

キラが突然目を白黒させてこちらに振り向く。全員一斉に目を逸らした。

「えと……ヤマトさん……どうですか？」

瑞希がキラに聞いた。

「うん……す、すごいよこれ」

キラの一応嘘ではない素直な感想だった。後ろで一同が感心したような表情で見つめる。

キラは決心を決め、一気に容器の中の物をかきこんだ。後ろで「おお……！」と声ができるがキラは気にしている余裕がない。

全ての物体を呑み込んだキラは嫌な汗をかきまくった。瑞希の目の前で吐かないように必死で身体を抑えつけた。

（スーパー説明タイム）

諸君！ 説明しよう！

SEED知っている人間なら説明不要だろうが、キラ・ヤマトは最高のコーディネイターなのである！

コーディネイターを超えたコーディネイターとも言えるな。

コーディネイターがナチュラルより強靱な肉体や頭脳、免疫力を持っていることも知ってるな！

そしてそれが最高のコーディネイターならその能力は凄まじい物だ！

即ち、身体に入った異物の分解能力は凄まじい！ ばい菌や毒物だけではなく薬物や麻酔も効果が薄い！

手術の時とか考えたくないな！ 虫歯を取る時は痛いだろうな！

優秀なのかそうでないのかよくわからんな！

（スーパー説明タイム・終了）

意識…ポリバケツ乙

結果から言うと、キラは気を失うことなく瑞希のデザートを完食し切ったのだ。

明久と雄二が丸くなって蹲っているキラの背中に、惜しみなく賞賛を与えた。

「転校生……お前は間違いなく漢だ……！」

「すごかったよ……君の後ろ姿、すごかったよ……！」

雄二と明久の賞賛が全く嬉しく感じないキラであった。  
転校初日から劇物を食わせられるという、ある意味トラウマレベル  
の体験をしたキラであった。

☆

こうして、多数の犠牲者を出しながらも、壮絶なお昼ご飯タイムは  
無事終了した。

ムッツリーニとスザクは、明久達の必死の救命活動（心臓マッサー  
ジ）によって命を救われた。

余談だが、参加できなかった美波がごねていた。彼らはそれに反論  
する元気もなかったとか。

**4話　俺、これ食い切ったら故郷で結婚式挙げるんだ……（後書き）**

ようやく他作品キャラを出せた気がする。Aクラス戦まで彼らはまた空気がどね。

しかし初めてのクロスオーバーネタがこんなので大丈夫なんだろうか……？

キャラ募集は随時やってますのでお願いしますね。三年キャラ本気で頼む

## 5 話く無印ガンガンの自由マジチートく(前書き)

### バカテスト問題【物理】

以下の文章の( )に正しい言葉を入れなさい

『光は波であって、( )である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます。

枢木スザクの答え

『眩しいの』

教師のコメント

そうですね。でも間違いは間違いです。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

キラ・ヤマトの答え

『粒子であり、粒子と波動の両方の二面性も持ち、電磁波の一種ともされ、一般的に触れることができず、直進しかない、

とされてきた。特殊な粒子の磁場形成理論の応用技術によって収束、固定する事が出来、

よって“個体の光”を作り出すことに成功している。発光色は基本的に黄色か桃色とされている。

また、この固体化した光同士のぶつかり合いは理論上では不可能とされてきたが、実際には可能である事が実地で証明された。

この現象により、光とは粒子や波動だけではなく、固体としても存在できる事が証明された。

尚、この固体化した光は高エネルギー体なので一般的に触れた物を“高熱で焼き切る”ようになっていて直接触れられず、

理論上では切断できない物はないとされている。これは固形化を保つための熱・運動エネルギーが高過ぎる為である。

故に、固形化した光は、現在同じ物同士でしか接触できないとされている』

教師のコメント

詳し過ぎです。初めて聞いた言葉もあるくらいです。

## 5話 無印ガンガンの自由マジチート

楽しい昼食タイムが終わったあと、美波が雄二に質問した。

「そういえば坂本次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のことか？」

「うん。どうして相手はBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょ？」

「ああ、そのことか」

確かにBクラスに攻め入る理由がよくわからないから、彼女の言うことも一理ある。

するとそれを聞いた雄二は神妙な顔になった。

「正直に言おう。どんな作戦を練ろうが、うちの戦力ではAクラスには勝てやしない」

攻め入ろうとする代表の言葉とは思えない降伏宣言。

とは言え、冷静になってみると確かにその通りである。戦力があまりにも違いすぎる。

だが雄二はすぐに自信満々な表情になった。

「だが、安心しろ。目標を変えるつもりはない。Aクラスをやる」

「え？ でも今勝てないって」

「ああ。クラス単位では勝てないだろうな。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちに？ どうやって？」

「Bクラスを使う」

「？」

相変わらず首をかしげている明久に、雄二は呆れたように溜息をついた。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？ も、もちろん！」（やばい！ さっぱりだ！）

そして明久は窮地に立たされたのだった。  
そこに瑞希が助け船を出した。

（吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ）

「設備のランクを落とされるんだよ」

雄二がジト目になった。瑞希からのリークを見ていたのだろう。

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

「で、上位クラスが負けた場合、下位クラスと設備を入れ替えるわけだ。そのシステムを利用して交渉をする」

カレンが続けるように言った。

「つまり、Fクラスに負けてFクラスの設備か、Aクラスに負けてCクラスの設備か、ってことね」

「そうだ。それをネタにして交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「うんうん。で、Bクラスに頼みに行くの？」



「……ムツツリーニ、ペンチ」

「ややつ。僕を爪切りいらずの体にする動きがっ」

明久が飛びすぎる。雄二はまたも溜息をついた。

「要するにAクラス戦にはBクラス攻略が必要不可欠なんだよ。それぐらい話の流れで分かれ」

「ご、ごめん。まあどちらにせよAクラス打倒には必要なんだね」

「で、明久。今日のテストが終わったらBクラスに宣戦布告して来い」

こうして明久はBクラスの死者となりましたとき、まる

☆

なんかかんやでBクラス戦がありましたとき。

教室荒らされていたり協定結んだり美波が人質に取られたり明久が殺されたりと色々ありました。面倒だから省くね。

今試召戦争はFクラスもBクラスも両方とも協定通り休戦中である。

「……………」トントン

「お、ムツツリーニか。何か変わった事はあったか？」

いつの間にかムツツリーニが雄二の肩を叩いていた。

因みにムツツリーニは今回は情報係で、先頭に直接参加はせずに周囲を窺っていた。

「何？ Cクラスの様子が怪しいだど？」

ムツツリーニは無言で肯定した。

「漁夫の利でも狙うつもりか。いやらしい連中だな」

確かにCクラスならA、もしくはBクラスの設備が欲しいかもしれない。

そしてAクラスはともかく、Bクラスなら消耗するだろうし、Fクラスが勝っても同じ事だ。

「雄二、どうする？」

「んー、そうだなー。Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とか言って脅してやれば

俺達に攻め込む気もなくなるだろう」

「それに、僕らが勝つなんて思っていないだろうしね」

「じゃあ、早速今から行くとするか」

雄二が立ち上がった。

「ああそうだ、秀吉は残っていてくれ」

「ん？ なんじゃ？ ワシは行かなくていいのか？」

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障をきたす。悪いが残ってくれ」

「よくわからんが、そういうのであれば残っておこう」

素直に引き下がる秀吉。雄二は数人引きつれて教室を出た。その途中、キラが明久を呼び止めた。

「吉井君」

「何だい？ ええと」

「キラでいいよ」

「何か用かい？ 今からCクラスに行くんだけど」  
「これ持っていておいて。念の為」

そう言ってキラが手渡したのは何かの機械と通信機。

「何これ？」

「使わない事に越したことはないけどね」

そう言ってキラは引き下がった。明久はよくわからないまま雄二達の後を追った。

☆

途中で須川と美波という仲間（盾）を手に入れた一同。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

Cクラスの教室の扉を開くなり、雄二がそこにいる全員に告げた。  
まがかなりの人数が教室にいる。

「私だけど、何か用かしら？」

出てきたのはCクラス代表小山友香。中林さんと違ってアニメでも  
空気の女の子。根本もあんなに存在感出したしなあ。

個人的に小山さんの事気に入っているので準ヒロイン化してほしい  
です。いつか表紙になってくれると期待してますよ美少女。いや寧ろ  
葉賀さんのほうが？

「Fクラスの代表として交渉に来た。時間はあるか？」  
「クラス間交渉？ ふうん……」

何かといやらしい笑みを浮かべる小山。

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本くん？」

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

小山が振り返った先には、Bクラス代表根本恭二がいた。

「なっ！？ 根本君！？ Bクラスの君がどうしてこんなところに

！」

「酷いじゃないかFクラスの皆さん、協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したはずだよな？」

「何を言って――」

「先に協定破ったのはソッチだからな？ これはお互い様、だよな！」

小柄な数学教師の姿が現れた。相手は既に戦闘態勢に入っている。

「僕らは協定違反なんてしていない！ これは――」

「無駄だ明久！ 根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るつもりだ！」

「ま、そゆこと♪ さてと、さっさとFクラスの代表を狩り取れ！」

「坂本！ ここは俺が食い止める！ さっさと逃げろ！」

「くそっ！」

須川が戦闘に入り、他は離脱に入った。

非常にまずい状況になった。FクラスとBクラスの戦力差は歴然、瑞希は消耗、こっちの人数だけでも辛い。

「はぁ……ふう……」

「ちょっと姫路、大丈夫なの？」

カレンが瑞希に心配そうに声をかけた。瑞希は肩で息をしている。元々運動が得意な方ではなく、体力もない彼女に、全力疾走を求めるのも酷かもしれない。

「あ、の、さ、先に……行ってください……！」

声を必死に振り絞ってそれだけ言った。

明久は彼女の様子を見て、後ろの追手を見て、決断した。

（見捨てろ、か。そんなことできるわけないだろ！）

「雄二！」

「なんだ明久！」

「ここは僕が引き受ける！ 雄二達は皆と早く離脱しろ！」

明久は、こんなかつこいい事を言う日が来るなんて、という気持ちを呑み込み、立ち止まった。

「シュタットフェルトさん！」

「カレンでいい！」

「カレン、姫路さんの事お願い！」

「よ、吉井君、私の事はいいからワッ！」

「ちょっと黙って！」

瑞希の声を遮ってカレンが瑞希を担いだ。なんか男らしいな、と思ったのは秘密だ。

「……………」ピタッ

「僕も残ろうか？」

「いや、二人とも逃げてほしい。多分明日は戦争のカギを握るだろうから」

スザクとムッツリーニが残ったが、明久は逃げるように言った。

スザクは貴重な遊撃戦力、ムッツリーニは切り札、ここで失うわけにはいかない。

「んじゃ、ウチは残ってもいいかしら。隊長殿？」

最後に残ったのは美波。

「頼めるかな？」

「はいはい。お任せあれっと」

笑いながら隣に立つ美波。

「……………」グッ

「ごめん。ありがとう」

スザクとムッツリーニが走り去る。

「……さて、どうするの？ 隊長殿」

「さて、どうなるんだろう」

「……は？」

美波は間拔けな声を上げた。

『いたぞ！ Fクラスの島田と吉井だ！』

『ぶち殺せ!』

迫ってくるBクラス。

「何も考えてないの!?!」

「い、いやあ……咄嗟に出た言葉だから……あはは」

「どうすんのよ!?! 何かあると思ったから残ったのに! 補習室送りなんて嫌よ!」

「仕方ないじゃないか! 姫路さんをここで失うわけにいかないだろ! あんなに点数も体力も消耗してるのに!」

「……!!」

明久がそう言うのと、美波の表情がさっと変わった。

(え? 何か僕不味いこと言った?)

「……とにかくここを切り抜ける事が先決よ」

とりあえず明久達は逃げだした。

☆

「……やっぱりそうなるか」

「何をしているのじゃ? キラ」

キラがノートパソコンのキーボードを叩きながら呟いた。

「なんでもないよ木下さん。ちょっと調べ物」

「?」

(やっぱり、かつて連合が開発したシュミレーターマシンを改良したシステムを更に改良したのが召喚システムなんだ。)

でもこれなら現行のシュミレーターマシンの方が性能は上だし、何より肉体のフィードバックが付くなんて危険過ぎる。

頭身が小さいのは出力の問題か。人の倍近い力があるのは出力制御ができていない証拠だね。まだ技術に問題があるな)

キラは顎に手をやる。

(でもこれだと確かにエンタメ性はある。マスコミも注目するだろう。しかも地球にもプラントに良い顔もできる。

地球の企業は黙ってはいないだろうね。しかも今は戦後、かなりの不景気だ。少しでも利益は欲しいだろうし。

この学校って結構危険な立ち位置なのかもしれない……生徒を取られた他校との因縁もあるから、少なからずこの学園長の失脚を望んでいる人間もいるはず。教育者としても技術者としても、ね。評判が上がれば似た技術を持っている企業が反発してくる可能性もある。

モルゲンレーテ社やマティウス・アーセナリー社から技術協力もあるからな。だからコーディネイターでも入学は可能なのか。

オーブはともかく、プラントに利益や宣伝が行くのは我慢ならないだろうな。地球の企業——特にフジヤマ社からすればね。

強力なスポンサーがいるから表立っての行動は制限されるのは救いか？

もう戦争が終わったから兵器メーカーでは生き残れないだろうし……良い事ではあるんだけど)

その時通信機から音が鳴った。

(召喚システムが作動した？　　ということとは協定締結は失敗したのか)



秀吉が不審そうに顔を覗かせた。

「キラよ、どうしたのだ？ さっきから通信機から音がなっとるが……」  
「いや、保険をかけておいてよかったよ。ついだったし」  
「？」

首を傾げる秀吉を余所に、キラは通信機を手を取った。

☆

明久と美波が逃げていたが、この先には行き止まりに当たってしまったので、これ以上逃げるのは不可能となった。

「吉井！ どうするのよ！」

「どうするって言われても、どうしよう！」

「いいから何か考えなさい！」

「よし、こうしよう！ まず島田さんが四人を引き付ける！」

「ふんふん、それで？」

「僕が逃げ易くなくおとおお！？」

「……アンタとは一度決着をつける必要があるそうね」

走ってくる姿が見え始めてきた。行き止まりなのでどちらにしろ接敵するのは目に見えていたが――

「あんたが変なこと言うから追いつかれたじゃない！」

「あれ？ 僕が殴られたのに、なんで僕が責められてるの？ 誰か教えてくれ！」

「わけわかんないこと言ってるやないで、何もないわけ！？」

「それじゃ島田さん、召喚獣呼んで！」

「それで？」

「僕の盾に「フンっ！」うわ！　いきなりどうしたの！？　キレる十代！？」

十代はあっという間だぞ若者よ。

ピピッ

明久の胸ポケットから音が鳴った。

「これは……キラから渡された通信機！？」

ボタンを押して通信機を耳に当てる。そこからキラの声が漏れた。

『明久君、召喚システムが作動してるみたいだけど、大丈夫？』

「今結構ピンチなんだけど。ところで何！？」

『え？　ちょっと状況を教えてくれない？』

「えっと、Bクラスに追われてるんだ！」

『撒いてこれる？　ちょっと君に用があるんだけど――』

「かなり厳しいと思う！」

キラが少し黙って、

『……五分時間を稼げる？』

「え？　それくらいなら多分……」

『わかった。ごめん、僕の身勝手に付き合わせて』

「???」

それで通信が切れた。明久はキラの意図がわからずにいた。

「ちよろちよろ逃げ回りやがって！ 疲れるだろうが！」

「というか、別にこいつらを追い回す必要なかったんじゃないか？」

「仕方ないだろ？ こいつらのジョークに付き合っているうちに坂本達に逃げられちゃったんだから」

「さっさと片付けて帰らない？」

Bクラス四人がやる気なさそうに好き勝手なことを言い始めた。  
その言葉に美波が反応し、一歩前に出た。

「ちよっと、好き勝手言ってくれるじゃないの」

強気な態度で食ってかかる美波。Bクラス達が顔を合わせた。

「だって……なあ？」

「だって、何よ」

「お前ら、最低クラスじゃん」

「クラスは最低じゃないぞ！ メンバーが最悪なだけだ！」

「吉井は黙ってなさい！」

（あれ？ フォローしたのに怒られたよ？ なんで？）

「Fクラスだからって甘く見ない事ね」

「そうか？ 所詮Fクラスだろ？」

「なら、自分で確かめる事ね！ 試獣<sup>サモン</sup>召喚っ！」

「上等だ！ 実力差を思い知らせてやる！」

召喚獣同士がぶつかり合った。美波の方が押し負けると思いきや——  
つか思ったけど、召喚獣同士の戦闘書いたのこれが初めてなんじゃね？ 我ながら己の怠慢に驚いたわ。

『Bクラス 工藤信二 VS Fクラス 島田美波  
数学 159点 171点』

どうでもいいが、バーローと名前似てないか？ コイツ。

「なん……だと……」

「僅か十二点差……だと……」

「しかも負けている……だと……」

点数の僅差に驚くBクラスのメンバー。得意げに（薄い）胸を逸らす美波。

「ふふっ。数学で勝負を挑んだのが間違いだったわね。これなら漢字が読めなくても何とか解けるのよ！」

「因みに島田さん、古典の点数は？」

「一桁よ」

言い切るとは、流石男らしい。異性より同性に人気出るのも頷ける。因みに勘違いが無い様に言っておくが、美波が特殊（ドイツ語が読める）なだけで日本で漢字が碌に読めない人間が数学が解けるなんてことは絶対にないので、ちゃんと漢字の勉強もしておこう良い子の諸君！

中高生以上なら尚更だ！ 勘違いすんなよ！ 絶対にすんなよ！

「バー、じゃなかった、工藤君、フォローしようか？ こんなので補習室送りにはなりたくないでしょう？」

「くっ……、頼む」

工藤が悔しそうに唇を噛んだ。だがこれで相当楽になるはず。逆に美波が厳しくなる。

「島田さん、フォローしようか？ こんなので補習室送りにはなり

たくないでしょう？」

「足手まといよ」

「酷いっ」

少し涙目になりながらも明久も召喚した。魔法陣から徐々に姿を現した。

精悍な顔立ち。

しなやかな形態。

軽やかな動き。

喚び出す旅に感じる絶対的な強さが顕現する。

「BGM タラちゃんの足音」

「吉井に構うな！ 見るからに雑魚だ！」

「返せっ！ 僕のカッコいい描写を返せ！」

「どきなさい雑魚でヘナチヨコ！」

「こ、これが四面楚歌か……」

Bクラス四人相手に美波とヘナチヨコ。戦力差は大きい。

「これはキツイわね……！」

美波が表情を歪ませる。消耗が激しいのだろう。

「それじゃ、さようなら」

そこに切りかかるBクラス女子の召喚獣。そこに明久の召喚獣が滑り込んだ。

「させるかつ。足払いっ」

「ああっ！」

相手の召喚獣が明久の足払いに盛大に転んだ。中々ファンシーな光景だ。

「いいよいしょーっ！」

明久の召喚獣が勢いよく倒れ込む敵の後頭部を掴み、地面に叩きつける。ゴンッと硬質な音が鳴った。

『なん……だと……？』

その場の皆の口からそんな言葉が漏れた。

|       |      |     |      |      |
|-------|------|-----|------|------|
| 『Bクラス | 真田由香 | V S | Fクラス | 吉井明久 |
| 数学    | 166点 |     |      | 51点』 |

トリプルスコア乙。

「何だよ！ 真田の方が点数高いはずだろ！？ 何であんな弱そうな召喚獣にやられてるんだよ！」

工藤が先生に問いかける。しかし不正が働いているわけではない。なぜなら、真田の召喚獣は何事もなかったように起き上がったからだ。

「あれ？ 私の召喚獣、まだ生きてる」

「吉井、どういう事？」

「んー……まあ《観察処分者》の数少ない利点ってところかな？」

簡単に言えば、操作に慣れているという事だ。

アムロやキラなんかも最初は素人だったが、終盤では殆ど変態だったことを思えばわかりやすいだろう。

「なるほどね……」

「こんなところで点数食うわけにいかないな。明日もあるし」

「ああ、本気でやろう」

「あ、いや。できれば本気で来ないでいてくれるとうれしいなあ……」

少し後ずさる明久。そこでまたもや通信機が鳴る。

『お待ちせ』

「キラ!? さっきのは何!?!」

『ちょっと調整したんだ。君の召喚獣はいる?』

「うん! もう戦闘やってる!」

『わかった。あと30秒待って』

「うん、わかった!」

『少し点数低いかもしれないけど……』

通信機を耳に着ける明久。

「よし、俺達も加勢する」

「Fクラス相手に四対二つてのも癪だが、さっさと終わらせたいしな」

「い、いやあく流石にそれは厳しいかな、なんて」

「吉井、違うわ。四対二じゃないわ」

「ん? 援軍でも来てくれたの?」

「五対一よ」

「島田さん、この状況で君は僕を裏切るのかい?」

その場に召喚獣が六体になった。いよいよもって明久達が不利になってきた。

「行くぞコラア！」

チンピラっぽい掛け声とともに飛び掛かってくる敵の召喚獣。避けようとした明久の召喚獣を見た明久は、異変に気付いた。

「……あれ？ いつの間に木刀が二本に？」

すると明久の召喚獣が滑らかに前進して、居合の要領で踏み込んだ。そして目にも止まらぬ斬撃で相手を吹き飛ばしていた。

『なっ……！？』

そこにいる全員（明久含む）が呆然とした。

明久の召喚獣の両脇から襲ってくる二人の召喚獣。どちらも武器を大きく振りかぶっている。

それを余裕を持ってかわす。ギリギリ当たるか当たらないかと言えるほど精密な避けっぷりだ。

かわしたまま慣性に従って踊るかのように木刀を乱舞させる。すると二人の召喚獣が吹っ飛ぶ。

「ちょっと、何よあれ！ 冗談じゃない！」

最後の一人が距離を取る。明久の召喚獣は無造作に木刀を投げ付けた。そして木刀がヒットし、最後の一人が倒れる。

こうして僅か数秒で劣勢だったはずの戦闘が勝利に終わった。



（え……何これ？ 僕は動かしてないよ？）

「何だあの動きは……？ さっきとは全然別ものじゃないか！」

「どう考えてもおかしいわよ！ 1／3の点数の相手に四人がかりで手も足も出ないなんて！」

「くそっ！ なんだってんだよ！」

Bクラスの生徒は結果が気に食わないようだがそのまま引き返した。補習室送りです。

驚いてた美波が明久に近づいた。

「吉井！ あんた一体……」

「いや、僕にもさっぱり——」

そこで明久の召喚獣が更に動いた。

「「え？」」

明久の召喚獣が美波の召喚獣に急接近し、思いっきり蹴り飛ばした。

『Fクラス 島田美波

数学 1点』

※因みに味方勢力の誤射は、補正率25%である。VSシリーズやったことある人なら説明不要だね。

更に言うとは作者はAO勢を応援しています。

「ちょっと吉井！ 何やってんのよ！」

「いやだから、僕はしらな——」

美波が吉井に急接近し、思いっきり蹴り飛ばした。

余談だが、侘びとして明久が美波の事を『美波様』と呼ぶことになった。美波は明久の事を『アキ』と呼ぶようになった。

☆

『Fクラス 吉井明久  
数学 586点』

## 5話く無印ガンガンの自由マジチートく（後書き）

いろいろ適当過ぎワロタ……これが文才のなさか……  
もうチョイでAクラス戦だ！気張っていこう！

最近地の文がネタに走り切っている気がするわ。

ところで唐突ですが皆さん、バカテスで好きなキャラって誰ですか？  
自分は上から順に

- 1、鉄人（この人いてのバカテス）
- 2、秀吉
- 3、久保くん
- 4、小山さん
- 5、高橋女史、中林さん です。皆さんも教えてください。

## 6話くさんもん!く(前書き)

バカテスト問題【化学】

以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

秋山濤の答え

『C6H6』

教師のコメント

簡単でしたかね。

田井中律の答え

『B6Z6』

教師のコメント

そんな物体はありません。

平沢唯の答え

『六角形』

教師の答え

構造式の形はあってますが、化学式なので答えは間違いです。

## 6話くさんもん！

「りっちゃーん。Cクラスに入れてよかったねえ」

「まあな。滯のおかげかな」

ぐでーっと机に突っ伏しているゆるそうな唯と律。

「まあ、流石にAクラス行きは無理だけどな」

「滯ちゃんとムギちゃんはAクラスかあ……二人ともすごいねえ」

「和もな。でもまあ、Cクラスは頑張った方だろ。半分以上だぞ？」

「すごいよねえ。憂がお祝いしてくれたよお」

「寧ろ入学祝いで憂ちゃんが祝われる側だろ。何やってんだよ」

唯の鼻を摘む律。因みに唯の妹平沢憂が文月学園に新入生として入学しました。

なのに『お姉ちゃんすごい！』と何故か唯が祝われる側になった。本人がいいなら構わんが。

普段から『お姉ちゃんはやればできる子！』と言ってるんだけどね。

「それより新入生ゲットしなきゃいけないだろ？ 勧誘もしなきゃいけないし、何より新勧ライブの曲も何か決めておかなきゃな。

新入部員確保しとかないといけないとなー」

「そうだねー。新入部員が増えると楽しいだろうね。可愛い子来ないかな」

そうしていつものように駄弁っている平和な一日が、突然終わりを告げた。

『静かにしなさい！ この薄汚い豚ども！』

Cクラスの教室に入ってきた女子生徒が、いきなり罵声を上げた。

「うおっ！ 何だ！？」

「あれって優子ちゃん？　すごいこと言うね」

驚いた律と相変わらずマイペースな唯。

『な、何よアンタ！』

いきなり登場して罵声を上げた彼女に食ってかかったのは、Cクラス代表小山友香である。

『話しかけないで！ 豚臭いわ！』

『アンタ、Aクラスの木下ね！　ちよっと点数が良いからって良い気になってるんじゃないわよ！　何しに来たのよ！』

『私はね！　こんな臭くて醜い教室は同じ学校内にあるなんて我慢ならないの！　貴方達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！　言うにこと欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

『手が穢れてしまうから本当は嫌なんだけど、特別に今回は貴方達にふさわしい教室に送ってあげようと思うの』

『言わせておけば、調子に乗ってえ！』

『ちょうど試召戦争の準備もしているみたいだし、覚悟しておきなさい。完膚なきまでに叩き潰して上げる。』

そして私達が薄汚い豚の如し貴方達を豚小屋に送還してあげるわ！　覚悟しておきなさい！』

そう言って一方的に会話を打ち切り、優子は出て行った。一時静寂に包まれるCクラス。

暫くして、律と唯は顔を見合わせた。

「……あんなキャラだったか？ 優子の奴」

「そうだね。でも、それよりもさ——」

『Fクラスの相手なんてしてられないわ！ 今すぐにAクラス戦の準備を始めるわよ！』

『うおおおお！』

怒りに駆られたCクラス達が立ち上がる。まああそこまで言われれば怒って当然である。

律と唯はというと——消極的だった。

「おいおい……戦力差が激し過ぎだろ。勝機あんのか？ 振り分け試験の直後だぞ今は」

「Aクラス代表が規格外だし、濤ちゃんやムギちゃんや和ちゃんもいるよ？ 勝てっこないよ」

「だよな。いくらあんな挑発されたからって、もう少し頭冷やした方がいいだろ」

「私達がCクラスにいるのって濤ちゃん達のおかげでもあるのに……」

「ま、しゃあない。クラスが戦争やるんだ。クラスの一員の私達が指咥えて見てるわけにはいかないさ」

「うん……」

律もやれやれと立ち上がる。唯は立たずに優子が去っていった扉を見続けていた。

「……どうしたんだ？ 唯。なんかあんのか？」

「ねえりっちゃん。さっきの優子ちゃんさ——」

唯は首を傾げながら立った。

「――なんか、声変じゃなかった?」

☆

「何? Cクラスが宣戦布告してきただ?」

それを聞いてルルーシュが眉を顰めた。

「ああ。今日の、すぐにでも戦争を申し込むそうだ」

「……なんか、すごく怒ってた」

アスランと翔子がそう続けた。アスランの顔も何か複雑そうだ。ルルーシュはというと、どこか納得したような気分だった。

（なるほど、別のクラスを俺達にぶつけるか。どういう手を使ったかは知らんが……）

恐らくFクラスの仕業と見て間違いないと、ルルーシュは即断した。こういってはなんだが、今の時点では確実にAクラスが最強の戦力を持っている。FクラスもだがCクラスでも勝てるわけがない。だが、Cクラスは宣戦布告してきた。Fクラスがどういう手を使ったのか知らないが、申し込まれた以上対応するしかない。ルルーシュは立ち上がった。

「アレックス、すぐに高町とハラオウンを召集してくれ。奴らが今回の戦争の作戦の要になる」

「わかった」



「霧島、今回の戦争の為の編成をする。今回はお前が代表をやれ。俺は隊長で指揮をやる」

「……うん」

因みにAクラスは代表が二人いるが、戦争の時はどちらか一方が代表となる。もう片方が戦死してもクラスの敗北にはならない。これは代表が二人だと混乱する為の処置である。

「……あの二人をもう投入するなんて、随分と早く戦争を終わらせたいみたい」

「まあそうだな。Cクラスとともにやり合えば必ず勝てる。ならさっさと終わらせる方がいい。後のFクラス戦の為にもな。」

Cクラス戦では策など必要ない、真っ向から力勝負で終わらせる」

そもそも策などは相手をどう切り崩すかであり、普通に戦っても勝てるかどうかわからない相手に使う物なのだ。

戦力で明らかに勝っているなら小賢しく策を練る必要もない。

「……FクラスよりCクラスのほうが楽、ってこと？」

「少なくとも、Fクラスの方は得体が知れない。代表の坂本雄二は必ず何かしらの策を練っているだろうからな」

既に学年の全戦力を把握しているルルーシュ。その上での発言だ。Fクラスは何かと特殊なメンツが揃っていたりするが、Cクラスには、正確には他のクラスには特にない。

翔子は何故か黙って突っ立ったままだ。ルルーシュはそれに気が付いて声をかけた。

「？ どうした？」

「……、いや」

（何か気になる事でも言ったか？ 俺は）

☆

こうしてCクラスとAクラスの試召戦争が始まった。

仕掛けたのはCクラス（煽ったのはAクラスだが）。Aクラスは何故か不思議そうな表情をしていたとか。

唯と律は何故かはしゃぎ出した。

「何か本格的に戦争って感じだねえ！ りっちゃん！」

「なんか楽しくなってきたなー！ 一丁やってみるか！」

前に現れるはAクラスの集団。先行してきたのは十人にも満たない人数だった。

だが、先頭にいる者を見て、Cクラスは驚愕した。

「あいつは、フェイト・T・ハラオウンだ！」

「《金色の死神》か！」

「早く戦闘態勢をとれ！ もう既にハラオウンの間合いに入っているぞ！」

そう叫ぶが、虚しく

「フェイト・T・ハラオウン、Cクラスに数学勝負を挑みます。試召<sup>サモン</sup>喚！」

光り輝く魔法陣から現れる姿は、黒衣のマントの金髪の鎌使い。なるほど、確かに死神の如し風体だ。

『Aクラス フェイト・T・ハラオウン VS Cクラス 砂原よ

しみ

数学

421点

12

9点』

「“ソニック・ムーブ”!!!」

フェイトの召喚獣の腕輪が光った。その瞬間、フェイトの召喚獣の姿が消えた。

「は、速い!」

「見えないぞ! 速過ぎる!」

そう言っているうちに次々と犠牲者が出る。

戦死には至っていないが、ごっそり点数がもぎ取られていく。

「おい、どうするんだ! あいつ止めないと全滅だぞ!」

「任せて!」

そう言って前に出たのは唯だ。

「おい唯! 相手の点数を見ろよ! 勝てるわけないだろ!」

「大丈夫! 数学と英語はかなり解けたから! 試獣<sup>サモン</sup>召喚!」

唯の魔法陣から召喚獣が現れた。

「……なんで武器がギターなんだ?」

「おしゅれ?」

テヘッと笑う唯。

フェイトが唯の方に向かってくる。フェイトは鎌を振りかぶり、思

いっきり振り下ろす。唯はギターでガードした。結果は――  
鎌とギターが鏝迫り合い(?)をしていた。

「なっ!?!」

「おおすげえ! 止めた!」

「今度はこっちからいくよお!」

点数が表示されます。

『Aクラス フェイト・T・ハラオウン VS Cクラス 平沢 唯  
数学 421点 439点』

点』

「すげえ!」

「なんて点数だ! ハラオウンを超えている!」

「平沢ってそんなにできる奴だったのか!?!」

敵味方どっちも驚いている。

唯の召喚獣の腕輪が光り出す。唯の召喚獣が大きく息を吸い、

「“ブラスト・ハウリング”!!」

唯の召喚獣が、ワッと声を出した。同時に周りの空気が歪んだ。フ  
エイトの召喚獣を吹き飛ばした。

『Aクラス フェイト・T・ハラオウン VS Cクラス 平沢 唯  
数学 366点 439点』

点』

点数の修正が入り、フェイトの召喚獣の腕輪が消えた。

同時に、フェイトの召喚獣の移動速度が目に見えて遅くなった。

「し、しまった！ 点数が！」

「まだまだ行くよ！」

今度はギターと一緒に声を張り上げる。音響兵器と化した唯の召喚獣が暴れ始めた。攻めてくるAクラスをジワジワと後退させる。

「平沢に続け！」

「さっきの言葉を訂正させてやれ！」

Cクラスが攻勢に転じて行く。フェイト達Aクラスも微妙に冷や汗を流し始めた。

「くっ、どうすれば……」

「ハラOWNさん、ちょっと待って」

フェイトにそう言ったのは、滞だった。少し後ろにいたようだ。

「え？」

「もうすぐ国語の先生が来る。それから逆転できる」

「本当に？」

「ああ。唯は私に任せてくれないか。他は高町さんとハラOWNさんに任せるから」

「わかった。信じるよ」

Aクラスからは援軍として今なのはを呼んでいる。唯を抑えれば一気に制圧できる。国語の勝負ができればそれがかなうらしい。滞はフェイト達にそう説明した。

後ろから足音が近づいてくる。ムギが教師を一人連れてきたようだ。

「竹内先生、こちらです」

「ナイスだ！ ムギ！」

滯はムギの方を向き、顔を合わせて二人で頷く。そして唯の方に走り出した。

Aクラスの召喚獣達を苦しめている唯の召喚獣が、動きを止めた。

「唯。ここまでだ！」

「今度は私達と勝負ね」

「いいよ！ 軽音部内の対決だね！」

「わっバカ、挑発に乗るなっ」

『試<sup>サモン</sup>獣召喚！！！』

ノリノリの唯を慌てて律が止めようとしたが、時既に遅し。

『Aクラス 秋山 滯 & 琴吹 紬 VS Cクラス 平沢 唯

& 田井中律

現代国語 345点

299点

61点

148点』

唯の召喚獣の腕輪が消え、響き渡っていた音が一斉に止んだ。

「あれ？」

「言わんこっちゃない！ あの状態の唯にバカ正直に相手なんてしてくれるか！」

「そういうわけだ。というか本当に点数差が激しいんだな……」

「ごめんね唯ちゃん。これも真剣勝負だから」

三人とも剣を引き抜く。唯だけはギターを構えた。なんか場違いな

姿である。

「なんか、勝てる気がしないな……」

「大丈夫だよりっちゃん！ 私に任して！」

「一人だけ二桁でよく言えるな」

「さすが唯ちゃん」

☆

「……まずいわね」

Cクラス代表小山友香が歯を噛み締めた。

劣勢だった戦争が、平沢唯のおかげで少しは押し返せたけど、封じられてから再び劣勢になった。

ここに至って段々友香は冷静になっていった。頭が冷えてきた、とも言うべきか。

この戦争は、負ける。

代表がそう思うのはある意味クラスへの裏切りと同じであるが、それでも振り払えない思いである。

振り分け試験直後で点数がほぼ固定されて認知されているのに、格上のクラスに何の策もなく真正面から戦って勝てるわけがないのだ。奇襲ならともかく、真正面からでは。

しかもFクラスと違って勉強が特別できる人がいるわけではない。いたとしても相手はAクラスなので、意味は余りない。

それ以前に、自分のクラスのメンバー、即ち戦力すらまだ完全に把握していないのだ。

そして自分には、この圧倒的不利な状況を覆しきるだけの策を考えだせる頭脳もない。

（……やっぱりそういうのに憧れるんだろうなあ）

頭が良い、正確には頭の回転が速い男性が好みである友香は、うっすらとそんな思いがチラつく。

（根本君は……こういう時どうするんだろう）

卑怯で定評のある根本恭二だが、卑怯と言う事は頭が回るという事だ。自分が有利になるように。そんな彼なら——いや、そもそも彼なら、あんな挑発になど乗らないはずだ。少なくとも感情だけで自爆行為をするはずがない。

そして、感情のままに墓穴を掘っている自分は……彼女として務まるのか？

周りを見てみると、敗色濃厚な戦争なものにも関わらず戦意が衰えない。頭にきているのもあるが、設備を落とされたくないようだ。

——あとは、意地だけか。

こうなってしまった以上代表である自分に全責任がある。勝てなくとも諦めてはいけない。それが代表というものだ。

「ハラオウンが斬り込んできたぞ！」

悲鳴のような声が響く。遂に近衛兵が戦闘態勢に入ったようだ。

Aクラスはまだ全戦力を投入していない。つまり手を抜かれている。更に言えば——舐められている。

その事実にかチンと来る一方で、全力でない相手にこうも簡単に追いつめられている事実を受け入れなければならない現実がある。しかもAクラスは自分達のいる席を狙うFクラスとも戦わなくてはならない。さっさと終わらせたい、そういう意志が見え隠れする。金髪の美少女が凄いスピードで向かってくる。唯に削られて腕輪を失ったとは言え、圧倒的な速さだ。

もう、すぐ目の前に来ている。大声出さなくても声が届く範囲に。



「あなたが、Cクラス代表の小山さんだね」  
「くっ……！ やるしかないようね……！」

|       |              |    |      |      |
|-------|--------------|----|------|------|
| 『Aクラス | フェイト・T・ハラオウン | VS | Cクラス | 小山友香 |
| 数学    | 366点         |    | 190  |      |

点』

刃同士がぶつかり合う。明らかにフェイトの方が力が上で、じわじわと押し負けている。

（数学は結構できてたと思ってたのに……全然敵わないじゃない！  
これがAクラスの実力……！）

「でも！ 相手が一人なら！」

フェイトは持ち前のスピードを活かして、一人で斬り込んできた。  
だが、一々撃墜している暇などなかったはずだ。

現に、点数は持っていかれてもまだ戦死していないクラスメイトが大勢いる。

いくら点数が高くても、多数を一気に相手するなんて——いかにAクラスでも簡単ではないはずだ。

そう思っている友香に対し、フェイトは、

「なのは！」

友香達Cクラスを無視して叫んだ。

☆

高町なのははフェイトが先行してからしばらくして、走っていった。

今回の作戦は非常に単純で『フェイトを先行させて前線を荒らし、混乱したところを大火力で制圧』というものだった。要するに奇襲↓殲滅である。

この作戦は基本的にフェイトが単騎で攪乱するのでフェイトの負担が大きい、少数の戦力で戦果が見込める。

これも大戦力を持つAクラスならではのガン攻め戦法である。

（因みに今作の試召戦争には遠距離攻撃もできます。つーか近接戦闘だけだとなのは戦闘能力の良さが出ねえじゃん）

しかし戦闘空間が基本的に廊下と教室だけなので使える状況が限定的で隙も大きく、更に視認されやすくにされやすい。

何より、点数の範囲に入らないといけないので、砲撃という選択肢を使ってくる事はない。

勿論リスクの分りターンも大きい。何しろ威力絶大で、一気に制圧できるのだ。まさにハイリスクハイリターンである。

「もうすぐだね、なのはちゃん」

「ていうかあの代表、人使い荒くないかしら」

「でも大丈夫だよ、フェイトちゃんなら」

「別に、フェイトの腕を疑ってるんじゃないけどさ……」

なのはと一緒に走るのはアリサ・バニングスと月村すずか。なのはの幼馴染だ。

「もうすぐ点数の範囲内だね。二人とも護衛の方お願い」

「大丈夫、任せて」

「思いつきりいきなさいよ！」

なのはは前を見た。Cクラスの近衛兵の中にいるCクラス代表、そして戦っているフェイトの姿。

「試獸召喚！」  
サモン

なのはの声と共に魔法陣が形成され、白い服と杖を持った召喚獣が現れた。

なのはの腕輪が光り出す。

《フェイトちゃん！ 七秒後に撃つから、それまでに射線上から離れて！》

《わかった！》

なのはが念話でフェイトに話しかけた。ハッキリ言ってこれチートだろ。

「じゃあ行くよ！ 全力全開！ ブラスター3！」

ちょwww自重しろwww

☆

刹那、友香の周りにいたCクラスの近衛兵が一斉に桃色の光に包まれ、蒸発した。

『え？』

フェイトの遥か後方に、一人の女子生徒が立っていた。それを見た生徒が恐怖に震えた。

「あ、あれは《白い悪魔》だあ……」

「殺される……！ 皆殺される……！」

「逃げるんだ！ 勝てるわけがない！」

『Aクラス 高町なのは VS Cクラス 小山友香  
数学 401点 190点』

友香も顔色を一気に青ざめさせ、上ずった声を上げた。

「無理よあんなの！ 敵うわけじゃない！」

今ので近衛兵の半数以上が消滅した。一気に戦意も殺ぎ落とされた。残った者はなのはに殺到しようとしたが、

「だめよ。なのはには近づけさせない！」

「ここから先は通行止めよ」

『Aクラス アリサ・バニングス & 月村すずか  
数学 351点 380点』

アリサとすずかに止められている。

フェイトも相変わらず戦線にいる。まさに八方塞がりである。

「ブラスター・ビット！」

「へ？」

友香の召喚獣に巻きつくビットとチェーンバインド。

身動きが取れなくなった友香の召喚獣に、なのはが杖を差し向けた。

「降伏する？」

友香は黙ってコクコクと首を動かした。

こうして、Cクラス VS Aクラスの試召戦争は決着がついたのだった。

☆

意気消沈するCクラスと、大して喜ぶ事もないAクラス。

殆ど決まり切っていた結末であった上に、Aクラスに得はなく、Cクラスも損するだけに、終わった後の微妙な空気が何とも。

「うえーん、助けて滞ちゃーん」

「みーおー、なんとかしてくれよー」

「無茶言うな！ 私に何とかできるわけないだろ！」  
「うふふ」

滞に泣きついてる唯と律、それを見て微笑むムギ。四人とも戦死していない。する前に戦争が終わったからだ。

「でもいきなり設備がおちるなんてあんまりだよー」

「仕方ないでしょ？ そっちが挑んできたんだから」

泣きつく唯に和がそう言った。

すると律がムツとなって言い返す。

「そんなこと言ってもさー優子の奴がこっちを挑発してきたのが原因なんだぞ？ そんな言い方はないだろ」

「木下さんのこと？ あの人は朝来てから一回も教室を出てないはずだけど？」

「そんなわけないだろ。Cクラスに来たのをうちのクラス全員が見たんだぞ？」

「本当に？ おかしいわね……」

「ちょっと、なんか酷い言い草じゃない。なんで私の名前が出てるわけ？」

話題の人物、木下優子が来た。

「出たな諸悪の根源！」

「ちょっと待ってよ。なんで私がそんなことしなきゃいけないのよ」

「何でも何も、今朝うちのクラスに来て——」

「ねえ優子ちゃん」

律と喋っていた優子はいつの間にか接近していた唯にビックリしながら返事する。

「何？」

「今朝と声が違うけど、どうして？」

「は？ 私は声を変えるなんて——！」

そこまで言って、優子は口を閉じた。何かに気付いたようだ。

（ああ……なるほどねえ）

唯の言葉に何か合点がいったような優子。

そんな会話を余所に、代表同士が話しあっている。主に戦後処理である。

「……好きにしないよ」

「ああ、好きにさせてもらう。挑んできたのはそちらである以上、こちらは無駄な時間を使わされただけだったからな、

設備変更はそっちで勝手にやっておけ」

「……………」

友香がショボンと肩を落としてそう言った。戦う前の勢いはどこにも見当たらない。

ルルーシュはと言うと、正直どうでもよかった。

好きにしろと言われるまでもなく、さっさとCクラスの設備を落としてこの問題を終わらせたい、それだけだ。

ただ、一つだけ心残りがあるルルーシュであった。それを問いただしてみた。

「その前に一つだけ聞いておきたい。なぜこの時期にAクラスに試召戦争を挑んできた？ 俺達が言うのもなんだが、

今のAクラスとCクラスには覆しきれない戦力差があった。それを知った上での行動だろう」

「……ええ、そうね」

「答えてもらおうか、小山友香。何が目的だ？」

「よくもそんな風に言えるものね……！」

友香は肩をフルフル震えさせて、バンッと机を叩いた。

「あんた達AクラスがCクラスの事を豚共だの豚小屋だの好き勝手に言いまくるからでしょ！？ 何でそんな偉そうに言えるのよ！」

「？ 俺は一度もそんな風に言った覚えは」

ルルーシュは友香の言葉に眉をひそめた。まるで心外と言わんばかりの表情だ。

そのすました表情が友香を更に逆上させた。

「とぼけるんじゃないわよ！ 知らないなんて言わせないわ！

今日の朝に、木下がCクラスに使者としてきた時、第一声が『静かにしなさい！ この薄汚い豚ども！』だったのよ！？

あれだけのことを言ってるくせに今更しらばつくれてんじゃないわよ！」

「……」

激昂して怒鳴り散らす友香を余所に、ルルーシュは優子を呼んだ。

「木下」

「何？ 代表」

「お前は今日、Cクラスに行ったのか？」

「行くわけないでしょ？ ていうか登校してから一度も教室出てないんだけど」

「だろうな。今日は朝からAクラスには召集をやかかっていた。欠席も退席者もない。つまりAクラスは朝から動けなかった。

おかしい話だな、小山。お前の話は辻褄が合わないぞ？」

ルルーシュの目を細める。友香は憤慨して怒鳴り付けた。

「何よそれ！ 私が嘘をついているっての！？」

（この様子……こいつが嘘を言っている雰囲気ではないな。となると——）

ルルーシュは優子の方に振り向いた。

「木下、心当たりはあるか？」

「……ええ、思いつつきりあるわね」

「だろうな」

友香は会話の意図がわからず、質問した。

「ちょ、ちょっと、何の話してんのよ」



再びルルーシュが友香の方に振り向いた。

「小山」

「な、何？」

「一つ条件がある。今からお前だけここに残れ。詳しく聞きたい事がある。あと試召戦争を一週間ほど禁止する。」

従ってくればCクラスの設備の件を見逃してもいいが、どうだ？」

「……へ？」

友香が間拔けな声を上げた。

それはそうだろう。負けた下位クラスは設備を落とされるのが普通だ。それを見逃す、つまり設備が落とされないのだ。

しかもその条件が酷く簡単な物なのだ。

友香は疑うような視線をルルーシュに向けた。

「何を企んでるの？」

「不満か？　なら仕方がない、Cクラスの設備を落とさせてもらおうか」

「ちょ、ちょっと待ってよ、まだ条件を呑まないなんて言ってないじゃない」

「勘違いしないでもらおうか。こちらからすればCクラスなどどうでもいい。少し有益な情報が欲しいだけだ。」

それに俺が何を企んでいようがお前には関係のない事だ。余計な口出しをするな。

それで、どうなんだ？　受けるのか、受けないのか。さっさと決めろ」

「わ、わかったわ」

こうして、Cクラスは一応は形での『和平交渉』によって設備を落とされることは免れたそうだ。

## 6話くさんもん！く（後書き）

Cクラス戦とかマジ誰得……

とりあえず実験的に新たにクロスオーバーネタを投下してみた。結構楽しかったよん。

一応募集したキャラがFクラスに来るとは限らないけど、FクラスとAクラスのキャラしか活躍させないというわけではない事を証明しときたかったんです。

折角六クラスあるんだから使わないと、と思いついて……

今回でわかった事を一つ。リリなのキャラは書きにくいな……それに比べてけいおんキャラの書きやすい事書きやすい事。

とりあえず平沢唯さんは主人公なので一つくらい技を持ってもらいました。

元ネタはなんだったっけ。結構こだわりましたここ。

でもあれ、日常系の漫画なんだよなあ。うんそこ、中二くさいとか言わない。

因みに本編の試召戦争は、原作に色々足してみます。もっと自由度を上げてみる様に工夫します。

あとけいおん！は私の友人に最優先で頼まれた物です。その内あずにゃん（一年杣）も出すつもりです。

## 7話〜フタエノキワミアツ〜（前書き）

### バカテスト問題【英語】

以下の問いに答えなさい

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good — better — best  
bad — worse — worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good — gooder — goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。goodやbadの比較級と最上級は語尾に—erや—estを付けるだけではダメです。覚えておきましょう。

枢木スザクの答え

『good — gooder — goodest  
bad — batter — best』

教師のコメント

惜しいですね。あなたの書いたbadの比較級と最上級がgoodのものです。覚えておきましょう。



## 7話〜フタエノキワミアッ！〜

「スザクを前面に！ 障害物を使って戦線を拡大させないように戦うのじゃ！」

秀吉の指示が飛ぶ。

『Fクラス 枢木スザク VS Bクラス 野中長男  
古典 246点 153点』

『Fクラス 近藤吉宗 & 武藤啓太 & 君島博 VS Bクラス 岩下律子

古典 53点 49点 68点  
171点』

比較的古典の点数が高いスザクを先陣に、陣形を組む。

「僕が道を空ける！ 他は続いてくれ！」  
『おお！』

「勝負は極力単数教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

秀吉の指示とスザクの戦力によってじりじりと進軍しつつある。

雄二の指示では『敵を教室内に閉じ込めろ』とのことである。

今は問題なく遂行しつつあるように見えるが、実際には大きな問題が発生していた。

瑞希の戦線不参加。

それどころか戦争に近寄ろうとすらしない。何かに戸惑っているようだ。

明久はそんな瑞希を心配そうに見るが、戦争はそんなに暇を与えて

くれない。

「古典の点数が足りない！ 援軍を求む！」

「左側出入り口、押し戻されている！ スザク一人じゃ限界がある！」

よくない報告が相次ぐ。

「姫路さん！ 左側の援護を！ このままじゃ押し返される！」  
「あ、そ、そのっ……！」

明久が促すも泣きそうな顔でオロオロする瑞希。焦れる明久が突っ込もうとするその時、振り切るように瑞希が駆けだす。

「わ、私が行きます！」

左側の戦線に加わった。

|                                         |      |     |
|-----------------------------------------|------|-----|
| 『Fクラス 姫路瑞希 & キラ・ヤマト VS Bクラス 真田由香 & 工藤信二 |      |     |
| 古典                                      | 373点 | 49点 |
| 点                                       | 168点 | 191 |

「ご、ごめん姫路さん」

「い、いえ。それよりさがってください」

「キラ、少し下がって。補給組の撤退の援護を！」  
「わかった」

キラがそのまま下がる。そのまま瑞希が召喚獣で戦おうとした時、瑞希の顔色がさっと青くなった。その時、

キンコーン

チャイムが鳴った。

ここで説明しておくが、試召戦争というのはあくまで普通の授業と同じ扱いである。故に『休み時間』というのが存在する。

この時間になると一切の戦争行為を中断し、自由に行動できるようになる。

しかしその時間帯は10分間のみで、基本的にはトイレなどの行為のみとなるが、戦闘に参加していない人間は安全に撤退することもできる。

召喚獣を召喚している者は休み時間が終わるまでに元いた位置につかなければならない。

それと、休み時間が終わった時相手が支配する陣地にはならない。またそれを強要することもできない。

前者は問答無用で補習室送り、後者はクラスの無条件の敗北となる。ぱっと見だと大した意味はないが、態勢を整えたり作戦内容を伝えたりと戦争の幅が広がるのだ。

明久はホッと息をつく一方で、瑞希は顔を青ざめたまま立ちつくす。そのまま震えだしている。

尋常じゃない様子に、明久も声をかけずにいられなくなった。

「さっきからどうしたんだい？ 姫路さん」

「そ、その、何でもないんですっ」

「そうは見えないよ。何かあるなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし」

「ほ、本当に何でもないんです！」

泣きそうな顔でそう叫ぶが、全く説得力のない姿だった。



するとBクラスの扉が開き、代表の根本が出てきた。それと同時にビクッと瑞希の肩が震えた。明久はそれを見逃さなかった。何を言うわけでもなく去っていく。

「吉井君、ちょっとトイレに行ってくださいね」

「あ、うん。わかった。時間内に戻ってきてね」

「は、はいっ」

上ずった声で走り去る瑞希。それを明久はじっと見つめた。

☆

結論から言うと瑞希が行ったのはトイレではなく、屋上に行く階段だった。今の時間は鍵がかかっているので行き止まりのはずである。明久は密かに瑞希をつけていた。ムツツリーニから教わった尾行術がこんなところで役に立つとは、と独りごちた。

今そんなところに行く理由など何もない。だが、彼女はそこにいる。手摺を使って向こうからは見えないように身を隠しながら明久は様子を窺う。するとそこには瑞希ともう一人――卑怯者――根本恭二がいた。

根本がイラついたように話を切り出した。

「姫路さん、どういうつもりだい？ 俺の言った事、忘れたわけじゃないよな」

「は、はい……」

（一体何の話をしているんだ？）

明久の所にも割とハッキリ聞こえた。周りに人がいないと思っっているんだろう。確かにこの時間帯にここにいる人はいない。

自軍のエースと敵の代表が密約している。それは立派な裏切り行為

だろう。しかし明久は方は取らなかった。  
さっきから瑞希の様子がおかしい。

「でもさっき戦闘に加わったよな？ 下手すればうちの戦力が減ったかもしれないじゃないか」

「でも、さっきは……！」

「でも何も無い。『戦闘に参加するな』って言っただろ？」  
(何だって……！？)

それはつまり、Fクラスの戦力を大きく削減することになる。これ以上ないほどに。

だが、あの根本が何を持ってそんなことを言えるんだ？

「わ、私には、Fクラスの皆を裏切れない……！」

「はあ？ あんな最悪なメンバーに何肩入れしてんの？」

「最悪じゃありません！ Fクラスの皆は良い人たちばかりです！  
あなたに何がわかるんですか！？」

「でもバカの集まりだろ？ 相手にするのも正直めんどくさい連中  
なんだよこっちは。学力を見れば一目瞭然、戦争も君日より、

何一つ良い所がない……全く、屑の集団だよ」

「そんなことありません！ よく知りもしないのに勝手なことを言  
わないでください！」

「まあそんなことどうでもいいんだよ。最悪だろうと屑だろうと変  
わりないし。あとさ——」

明久は黙ってそれらの会話を聞き流した。言いたいことは山ほどあ  
るが、何が目的かわかってない。

まさか瑞希をここに呼び出したのがこんなことを言う為でもないだ  
ろう、と思ったからだ。

根本がポケットを探る。瑞希の肩がまた震えた。

「——あんまり偉そうな態度取ってくれるなよ。これ、どうなっても知らないよ？」

根本が何かを取り出した。瑞希が息を呑み、明久は目を凝らして見ようとした。

（あれは……！）

只の封筒のように見えるが、明久の脳裏に映るのは一つしかなかった。——三日前の放課後で遭遇した、瑞希の封筒。根本がフンと得意げに鼻を鳴らした。

「約束破ったらどうなるか、教えたはずだよな？」

「ま、待って下さい！　それだけは——」

瑞希の制止の声も待たずに、根本は躊躇なく——封筒をぐちゃっと握り潰した。

明久は目を見開き、瑞希は絶句してペタリと座り込んだ。根本は嘲笑うかのように言う。

「おっとごめん、中身は別に取っておいてあるよ？　安心しなよ」

根本は内ポケットから手紙とおもえる紙を取り出した。

「そうそう読ませてもらったよこれ。しかし今時恋文だなんて時代遅れだねえ。メールとか流通している今じゃ考えられないね。

内容も恥ずかしいよこれ。頭お花畑なんじゃないのか？　姫路さん、Fクラスにいてバカが移ったんじゃないか？」

ネット付くような声で小馬鹿にするかのように笑う根本。瑞希は一言も喋らない。

明久は、目眩がするほどの怒りに支配された。今飛び出していかないう事に意外さを感じるほどだった。

だが、実際にそれは出来ない事は分かっている。それこそ瑞希の事を踏み躪る結果になるのは目に見えているからだ。

「おっと、そろそろ時間か。ああそうそう、わかってると思うけどさ、次はこんなのじゃ済まさないよ？　今度はこの手紙、焼却炉にでも放り込んでやろうか？

それじゃ」

それだけ言い捨てて階段を降りようとする根本。明久は慌てて階段から降りた。

明久は偶然階段の前を通りかかったように装って根本と接触しようとしたが、何をいえないかわからない。

ようやく瑞希の態度に合点が行った。人質ならぬモノジチが取られている以上、動くことができないのは当然と言える。

そもそもあの根本恭二が昨日の協定の時点で対等の条件で乗ってきた時点でおかしいと思うべきだったかもしれない。

既に瑞希を無力化する手段が整っていたというわけだろう。確かに合理的で、失う物も何もない。正にローリスクハイリターンという奴だ。

今、それが分かっただけでも充分だ。でもそれとは別に言いたいことがある。

しかし、接触してどうすればいいのかわからない。これは瑞希の個人的な件だ、明久が関わるのは野暮だし、

何より彼女を酷く傷つけてしまうかもしれない。

明久がそうやって一人で悶々していると、

「お、Fクラスのバカじゃないか。ここで何油売ってんだ？ 戻らなくてもいいのか？」

根本が話しかけてきた。明久はまさかの先手を取られ慌てたが、勿論根本はそんなことを気にもしない。

「まあお前如きが戻ったところで大した問題でもないか。いてもいなくても変わらない雑魚だもんな」

それだけ言い捨てて去っていく。

明久は拳を強く握り締めた。

『最悪なメンバー』『いてもいなくても変わらない雑魚』これは自分も認識していたことだった。

雄二に言われたり、自分でそう言ったりしても、それはFクラス内部だから。

しかし、全く関係ない人間にそこまでハッキリ言われると、漠然としたものではなくハッキリとした怒りが渦巻くのを感じる。

だが、瑞希はそんな自分達を必死に擁護してくれた。モノジチを取られているにも拘らず、弁護してくれた。

嬉しく思うと同時に申し訳なく思う。危うい状況でも、自分達は彼女に頼らなければならぬ。

それも、彼女が困っているのに、助けてやれない。それが情けなくて堪らない。

彼女を助けてあげたい。あの卑怯者を一泡吹かせてやりたい。でも、どうすれば――

「あ、吉井君……」

ようやく瑞希が降りてきた。元気が無さそうで顔色は青ざめた状態から変わっていない。明久はその顔を凝視した。

瑞希の目尻に、涙の跡があったのを見逃さなかった。  
それを見て、明久は一つの作戦を思いついた。

「姫路さん」

「はい……？」

「具合が悪そうだから戦線に加わらないように。試召戦争はまだまだ続くわけだから、体調管理には気をつけてもらえないと」

「……はい」

「じゃ、僕は用があるから先に行くね」

「あ……！」

明久は何か言いたげな瑞希の方を振り向かず、背を向けて走り出した。

チャイムが鳴った。戦争再開の合図である。

☆

「雄二っ！」

「うん？ どうした明久？ 脱走か？ チョキでシバくぞ」

教室に飛び込む明久に雄二は軽口を叩く。彼は現在の戦局をノートに記している。

明久はそんな雄二のジョークをスルーした。

「話があるんだ」

「……とりあえず、聞こうか」

雄二はペンをノートに置いて明久に向き直った。真面目な要件であることを察したようだ。

「根本君の来ている制服が欲しいんだ」

「お前に何があったんだ？」

「ああ、いや、その。えーと」

明らかに誤解を招く発言に気付いた明久だが、雄二が納得したように相槌を打った。

「ふん、まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらい何とかしてやろう」

（このタイミングでそんなことを言うてくる……姫路が機能してない事に関係しているんだろうな）

雄二は面倒なので明久の弁明を遮断した。

あの根本なら必ず何か策を打ってくるとは思っていたが、瑞希を封じられるとは。昨日の教室の件も今日の為というわけだろう。

全く想定していなかったわけではないが、流石に戦況には大きく影響する。こちらの作戦にも大きく影響を受ける。

こういう手を使ったかまでは分からないが、瑞希の弱みを握ったと取って間違いない。

そして明久が欲しいのは根本の制服ではなく、今持っているだろう所持品だろう。

まあいいと雄二は明久に聞いた。

「で、それだけか？」

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外してほしい」

「理由は？」

「理由は言えない」

「どうしても外さないとダメ、なのか？」

「うん。どうしてもできない。頼む、雄二！」

明久が頭下げてまでこんな無理難題を突き付けてくる。それで雄二はさっきの自分の考えが正しい事を確信した。

だが、確かに無理難題だ。

瑞希拔きのFクラスでは勝負にもならない。だが現状、瑞希は機能していない。ならこの申し出は受けようと断ろうと同じなのだ。

――まあ……どちらにしろ、作戦の役者を変えるしかないか……。

「条件がある」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割をお前がやるんだ。どんな手段を使ってもいい。必ず成功させろ」

「勿論やってみせる！ 絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ」

口端を釣り上げる雄二。

「それで、僕は何をしたらい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛けろ。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラスの教室の出入り口は今の状態のままだ」

「……厳しいね。もし、失敗したら？」

「Fクラスの敗北だ。失敗するな。必ず成功させろ」

そう言って雄二は席を立った。

「それじゃ、うまくやれよ」

「え？ どこに行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」



Dクラスの室外機の件でだ。作戦変更を余儀なくされた以上、タイミングがよりシビアになった。

今の戦線も瑞希が参戦していない以上、維持するのも精一杯だろう。長期戦になれば、戦力で劣るこちらが不利になる。

作戦を少し速める必要がある。

「明久」

教室を出る前に、雄二が明久の方を向かずに呼び止めた。

「確かにお前は点数が低いが、秀吉やムツツリーニのように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「……雄二」

「うまくやれ。計画に変更がない。キーマンが姫路からお前になっただけだ」

そう言い残し、雄二は教室を出た。

☆

「さて、どうするか……」

話の内容が大体そうなることは明久も予想していた。

真っ向勝負では話にもならない。できることと言えば奇襲。それも――吉井明久しかできない方法での。

「でも、痛そうだな……」

想像だけで身体に痛みが走る感覚。

『わ、私には、Fクラスの皆を裏切れない……!』

『はあ? あんな最悪なメンバーに何肩入れしてんの?』

『最悪じゃありません! Fクラスの皆は良い人たちばかりです! あなたに何がわかるんですか!?』

『でもバカの集まりだろ? 相手にするのも正直めんどくさい連中じゃないか。学力を見れば一目瞭然、戦争も君日より、

屑の集団だよ』

『そんなことはありません! よく知りもしないのに勝手なことを言わないでください!』

弱みを握られながらも、傷つきながらも、自分達の為に反論してくれた瑞希。

(姫路さんの痛みに比べれば、どうってことはない……! 見てろ……!)

明久は目的の場所に走る。

☆

「頼みたい事があるんだ、キラ」

「どうしたの? 急に」

古典の補充テストを受けるキラの前に、明久が立っている。

今から明久がやろうとしている事は、明らかに校則に触れる物だ。

それを教師の監視下でするのは難しい。

後の事などどうなろうと構わないが、やらなければ意味はない。既に手はないのだ。

それに、昨日聞かされたキラの技術ならそれが可能だ。

明久の言う事を聞き終えたキラは、案の定渋い顔になった。

「出来ないことはないけど……」

「ごめん。でもどうしてもやらなくちゃいけないんだ。頼む！ 協力してくれ！」

「……………」

キラは暫く黙った。そして口を開いた。

「一つ聞いていい？」

「何？」

「姫路さん、の為？」

「なっ」

明久は予想外の言葉に絶句した。するとキラはクスツと笑った。

「やっぱりそうなんだ。昨日代表に聞いたけど、そういう事なんだね」

「いや違うよ！ 単純に戦争に勝つことが目的で」

慌てて弁解する明久。しかしキラはからかうことなく、柔らかに微笑した。

「いいよ。僕も手伝う」

「ありがとう！」

☆

「どうしたんだい雄二。作戦決行は早くなったの？」

「ああ、予定より早くなった。それ以外は変わらない」

「ムツツリーニには伝えたの？」

「ああ」

雄二とスザクが話す。

すでに全軍に作戦内容を話しておいてある。因みに瑞希は後方待機を命じている、と偽情報も流している。

瑞希が参戦できないと分かるとFクラス全体の士気に影響する。その為の処置である。

戦力で劣っている上、圧倒的火力を誇る姫路瑞希を封じられた今、戦争が長引けばこちらが不利になる。

「スザク、カレン、俺のそばを離れるな」

「わかったよ」

「俺を守れ、ってこと？」

「そうだ。一度ある程度突撃した後に後退して敵を引きつける。タイミングが勝敗のカギだ。頼むぞ」

そう言った雄二は、Fクラスが保っていた戦線に自らを投入させた。

☆

「まだ？」

「もうすぐ。……できた」

キラがノートパソコンのキーボードを叩く。その速度は常人の目に留らぬほどだ。

「範囲は1？。召喚獣が出せるのは3〜4秒。チャンスは一回だけ。僕の点数を使わせるから、確実に決めて」

「わかった！」

明久が意気込む。

『お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

『どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

明久は耳をすますと、雄二と根本の言い合いが聞こえてきた。

『はア？ ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『……お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ』

『けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

『負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

『けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

Bクラスが動いたようだ。

『……態勢を立て直す！ いったん下がるぞ！』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

「今だ！ キラ！」

「召喚システム、起動！ 干渉範囲展開！ 早く！ 時間がない！」

『頼んだぞ、明久』

明久の召喚獣が出現する。それと同時に時計の長針が真上を向いた。

「だああーっしやあーっ！」

明久は召喚獣に持てる力全てを出して壁に拳を入れた。キラの点数を使っている為破壊力が全然違う。その代わりいつもとは比べ物にならないほどのフィードバックが身体に圧しかかる。

「ぐうううっ！」

ビキビキッドゴッ

壁にひびが走り、豪快な音を立てて崩れ落ちた。

「ンなっ!？」

崩れた壁の向こうには驚いて顔を引き攣らせている根本恭二の姿。雄二達がBクラス本隊を引き付けておいてくれたおかげで、かなり手薄になっている。明久はフィードバックによる激痛を無理矢理抑えつけて叫んだ。

「くたばれ、根本恭二ィー!!！」

明久は一気に駆け寄った。キラの干渉発生は既に効果が切れているので召喚し直さなければならぬ。

（そうだ、もっとこっちに来い!）

「Bクラス山本が勝負を受けます！」

サモン  
試獣召喚！」

「くっ!近衛部隊か!」（やった!）

残っていた近衛部隊が根本への行く先を阻んだ。

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ お前らの奇襲は失敗だ！」

「そうでもないさ！ ムツツリーニイイイーーーーー！」

ダンッダンッ！

出入り口は人で埋め尽くされ、熱気がこもった教室。空気洗浄の為に開かれていた窓。そこから侵入した二つの人影。屋上からロープで飛び込んできたのは――

「……Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ……！」

「……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む。――――試獣召喚<sup>サモ</sup>」

|       |      |     |      |       |
|-------|------|-----|------|-------|
| 『Fクラス | 土屋康太 | V S | Bクラス | 根本恭二  |
| 保健体育  | 442点 |     |      | 203点』 |

ムツツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃させ、敵を斬り捨てた。

「全く、お前らは……」

崩れた壁を見て額に手を当て呆れているのはムツツリーニと一緒に飛び込んできた鉄人。

「この戦争、Fクラスの勝利！」

こうしてFクラスとBクラスの戦争は終結した。

## 7話〜フタエノキワミアツ！〜（後書き）

やっとBクラス戦終わった……長かったな……

しかしムッツリーニが美味しい所を持っていたはずなのに、何故か明久イケメソ過ぎワロタwな回ですねここ。

悪役としては常夏コンビよりも根本の方がいい味出してたなあ、と思います。てか常夏って只の嫌な先輩だしなあ。

アニメ版の根本っていいですよ。露骨な嫌な奴っぽくて。ああいう奴こそ大切にすべきキャラだと思うのに何で使い捨てにした美少女エ……

でもバカテスのアニメ版で一番好きな悪役はエピオン姫路さんですね。エヴァ回のアレです。

個人的には卑劣極まりない事やる悪役大好きですが、更に圧倒的な力を持っている悪役がいいなあ。

ええ、クルーゼやガウルン大好きです。



**8話く自分に好意を持つ美人な幼馴染など幻想だ。幻想なんだよ！く（前書き）**

バカテスト問題【保険体育】

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は○を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

紅月カレンの答え

『↑焼け焦げた跡で見えない。』

教師のコメント

答案を焼かないでください。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。』

初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達するころ

に初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。

日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

8話〜自分に好意を持つ美人な幼馴染など幻想だ。幻想なんだよ!〜

「さて、それじゃ嬉しはずかし戦後対談といくか。な? 負け組代表」

「……」

床に座り込んでいる根本に雄二が勝ち誇った声をかける。さっきまでの強気が嘘のように大人しい。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

ざわ……ざわ……

周囲の皆が騒ぎ始める。FクラスもBクラスもだ。

「落ち着け皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ、確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

それに納得したように静まり返った。根本が力なく聞く。

「……条件はなんだ」

「条件? それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺……だと……?」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな。そこでだ、



その後、着付けは明久がやることになったが、Bクラス的女子生徒がやってくれるそうで、任せることにした。

明久からすれば、当初の目的が達成したのでどうでもいいことである。根本の制服はゴミ箱に捨てた。

そのまま手紙を持ち主の鞆の中にリリースしたその時、

「吉井君！」

「ふえっ!？」

突然明久の背後から、瑞希の声がした。明久は慌てて振り返る。

「な、何? ど、どうしたの？」

「吉井君……!」

目を潤ませた瑞希は、明久に正面から抱きついてきた。

「ほわあああつと!？」

「あ、ありがとう、ごきます……! わ、私、ずっと、どうしたらいいか、わかんなくて……!」

（うおおおどうしたらいいかわからないのは僕の方だ! まずい! 獣になって欲望のままに動いてしまいそうじゃないか!）

明久は深呼吸して僅かに残った自制心で己を取り戻し、ゆっくりと引き離す。

「と、とにかく落ち着いて。泣かれると僕も困るよ」

「は、はい……」

（おおおおしまったああああ! 引き離してどうする! こんなチャンス二度とないだろうが!）

「いきなりすいません……」

（くそっ！ 言いたい！ もう一度抱きついてって言いたい！）

蹲って悔しがる明久。涙をぬぐった瑞希が明久に向き直る。

「あの……」

「な、何？」

「手紙、ありがとうございました」

瑞希は俯きがちに小さく答えた。

「別に、只の偶然だよ」

「それって、嘘ですよ」

「そんなことは――」

「やっぱり吉井君は優しいです。振り分け試験の時も『具合が悪くて退席するだけでFクラス行きになるのはおかしい』って、私の為にあんなに先生と言い合いをしてくれていたし……それに、この戦争って、私の為にやってくれているんですよ？」

「えー！？ あ、いや！ そんなことは！」

「ふふっ。誤魔化してもダメです。だって私、廊下で吉井君が坂本君に相談しているところ、見ちゃいましたから」

（見られていた……だと……）

「凄く嬉しかったです。吉井君は優しくて、小学生の時から変わってなくて……」

人は変わっていくのねbyララア

明久は何だかムずかゆい感覚に襲われた。

「その手紙、上手くいくといいね」

「あ、はいっ！ 頑張ります！」

彼女の満面の笑みを見て、かすかに心が痛む明久は、悔しい思いを噛み締め、呑み込んだ。

「で、いつ告白するの？」

それでも、やはり気になる明久であった。

「え、ええと……今回の件が全部終わったら……」

「そっか。けど、それなら手紙よりも直接言った方が嬉しいと思う」

明久がそう言うのと、瑞希は突然顔を輝かせた。

「本当ですか？ 今言った事、忘れないでくださいね？」

「え？ う、うん。とにかく、がんばってね」

「はい！ ありがとうございます！」

元気よく返事して、軽やかな足取りで教室を去っていった。

「……さてと、雄二の教科書に卑猥な落書きを落とす作業でも始めようか」

☆

Bクラス戦との決着がついてから二日後――

明久達は補充テストを終え、いよいよAクラス戦に備えての最後のフリーフィングを行っていた。

因みに壁破壊の件は、何故か明久には一切のお呼びが掛からなかった。この件に関して必ず先生達のアクションがあることを

想定していた明久は肩透かしを喰らった。何故かと考えたりもしたが、目先の問題の方が大事なので何もないならそれで良し、とぶっちゃけ言えば考えるのが面倒だったのでスルーすることにした。

「まずはこの場を借りて皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったの事だ。感謝している」

壇上の雄二がらしくなく素直に礼をした。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。雄二らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だがこれは、偽らざる俺の気持ちだ」

——そういやここまで来れたこと自体が奇跡みたいなものだしなあ。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ！」

『おおおおお!!!!』

最後の勝負の前に、士気が最高までに上がっていく。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

ザワ……ザワ……

『どういう事だ?』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ?』

『おい、それで本当に勝てるのか?』



「皆落ち着いてくれ。それを今から説明する。――やるのは当然、俺と翔子だ」

まあ、そこまでは当然の選択かもしれないが、戦力差は絶望的だ別に代表に限定しなくてもいいのだ。

とは言っても相手は確実に代表が出るだろうが。

「まあ、皆の知っている通り翔子は強い。まともにやり合えば勝ち目はないかもしれない。だが、それは今までも変わらなかった。

Dクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにやり合えば勝ち目はなかったはずだ。なのに勝ち進んでこれた。

今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない。

俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今こそ皆に見せてやる」

『オオオオオー！ー！ー！ー！ー！ツ！！！！』

皆の意思が一つになっていく。具体的な一騎打ちの方法は原作見てね。説明すんのm r y

「あの、坂本君」

「ん、なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良かったですか？」

—なん……だと……？

クラス全員（の男子）が前傾姿勢になった。とてもシュール。

「ああ。あいつとは幼馴染だ」

「総員、狙ええっ!!」

「なっ!?! 　なぜ明久の号令で皆が上履きを構える!?!」

「黙れ男の敵! 　Aクラスの前にまずキサマを殺す!」

「俺が一体何をした!?! 　ついでに言うならスザクもAクラス代表と幼馴染だぞ!」

「え? 　僕?」

雄二が苦し紛れにそう言った。明久達は血相を変えてスザクに詰め寄った。

「何!?! 　本当なのかスザク!」

「そうだね。僕とルルーシュは幼馴染だよ」

Aクラス代表ルルーシュ  
スザクが何事もなくそう言った。血相を変えて振り返った明久達はその言葉で一斉に冷静になった。

「野郎の事などどうでもいい。それより、遺言はそれだけか?…待  
つんだ須川君。」

靴下はまだ早い。それは抑えつけた後で口に抑え込むものだ。ま  
ずは奴を床に叩き落としてからだ」

「了解です隊長」

素晴らしい統率力ですね。

「あの、吉井君」

「ん? なに、姫路さん?」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか?」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……」

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？」

それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしているの！？」

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の集。」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。冷静なのは良いが、只の常識人は今後駆逐されるだけだぞ？

最も外見では十二分にネタになる子だけどね（良い意味で）。

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？」

男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

百合だとっ！？（ガタッ）

「むしろ、興味があるとすれば……」

「……そうだね」

男子の視線が一人の女子に集中する。

「な、なんですか？　もしかして私、何かしましたか？」

慌てる瑞希。ライトでノーマルな彼女にはわからんことなのだよ。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

幼なじみということに引っかけかりを覚える明久達だが、仕方ないのでそれを放置したFクラス面々。

「あいつは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は」

『システムデスクだ!!』

Fクラスの全員が雄叫びを上げた。

ガラッ

突然扉が開いた。その先にいたのは、顔を青ざめたキラの姿だった。

「あ、キラ」

「どこ行ってたんだよ。今からAクラスとの戦いだぞ」

「ていうか、今まで一度も指摘しなかったわね……」

『いやだって、野郎なんて知った事じゃないし』

そんな声を無視して、キラはフラフラと教室に入った。その余りの尋常じゃない様子に明久は心配の声をかけた。

「で、何があったんだい？ どう見てもただごとじゃないよね」

キラは黙って、一枚の紙切れを差し出した。

「何これ」

「……えっと、読めばわかる。特に明久君は」

わけもわからず紙切れに目を通した明久は、次の瞬間、顔を思いっきり引き攣らせた。

【以下の者を、文月学園指定《観察処分者》として認定する――】

——キラ・ヤマト】

「……何があったの？」

「この前の戦争で、壁を壊しただろう？  
その時にお呼びがかかって——」

8話く自分に好意を持つ美人な幼馴染など幻想だ。幻想なんだよ！く（後書き）

未だに雄二が霧島さんを避けている理由が分からん。全く贅沢な奴だ。私にy（ry

後で気づいたけど、文章が抜け落ちていた。ミスと言わざるを得ない。

## 9話 この後秀吉と優子は絡み合いましたとさ

Aクラスへの宣戦布告。明久、雄二、秀吉、ムッツリーニ、スザクと主要メンバーで行くことになった。

「一騎打ち、だと？」

「ああ、Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

交渉相手はAクラス代表のルルーシュだ。

「代表とは俺の事か？ それとも霧島の方か？」

「後者だ」

「そうか……わかった。ならば申し出を受けようか」

あっさりと宣戦布告を受け入れたルルーシュ。

「但し、条件がある。そちらから七人出せ。一騎打ちを七回に分け、四回勝った方が勝ちだ」

「姫路の事を警戒しているのか？」

「いや、ちょっとした事情があつてな……。それで、受けるのか？ なら撤回して通常の試召戦争にするが？」

ルルーシュは何故か困り顔でそう言った。何か事情があるらしい。

「わかった。その条件、呑んでもいい」

「助かる。最初の一騎打ち以外はそちらで科目を決めていいぞ」

「……いいのか？」

雄二が思いもよらないような表情になった。Fクラスに非常に有利な条件である。それを相手から出すなんて。

「ああ、その代わり——霧島」

「……うん」

翔子が前に出た。

「……その代わり、負けた方が一つ言う事を聞く」

翔子は瑞希を値踏みするように見ながら、そう言った。

「……………（カシャカシャ）」

（ムツツリーニ、撮影はまだ早いよ!? 負ける気満々じゃないか

！ 焼き増しして僕の分確保してね!）

ムツツリーニがアップを始めました。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！ 何を勝手に！ まだ姫路さんが了承していないじゃないか！」

「え？ なんで私が了承しないといけないんですか？」

（気付いていない!? くそ、姫路さんの貞操の危機なのに……なぜ僕は興奮するんだ!?!）

「心配するな。姫路には絶対に迷惑はかけない」

自信満々に言う雄二。そんな彼らを見たルルーシュは立ち上がった。

「では、勝負は十二時でいいな」

「ああ、いいぞ」



それを聞くと、ルルーシュが教室から出て行った。  
こうして、あっという間にAクラス戦の段取りが決まったのである。

☆

ルルーシュが出た所に、金髪の美女が立っていた。

「な〜んか、面白そうなことになってるじゃない」

「……もう来てたんですか、会長」

「久しぶりなのに、つれないわね〜ルルーシュ。そこは空気読んで  
“久々に会えて光栄です” くらい言えないの？」

「……誰ですかそれ」

ルルーシュがうんざりしたように頭をかく。

その場ににいるのはミレイ・アッシュフォード。アッシュフォード学園理事長ルーベンの孫娘である。

アッシュフォード財閥はブリタニア人が多く在籍しているが、最近文月学園に流れ気味な傾向にある。

つまり文月学園に生徒を取られている他校、というわけだが、ミレイはそんなことには全く頓着していない。

「今日召喚獣っていうのを見せてくれるって約束でしょ？ わざわざ学校抜けだしてきたんだから♪ 満足させてよ？」

妖艶に微笑むミレイを見て、溜息をついたルルーシュ。

「会長がどう思っているかは知らないが、あなたの肩書はここでは色々迷惑なんです。それを自覚してほしいものですね。

そもそも学校の方は？ 会長職についているんでしょう？」

「ああ、そっちの方は大丈夫よ。リヴァルに任せてきたから」

哀れリヴァル。

「それにシャーリー達も来たがつてみたいだし、いいでしょ？」

「俺が決める事じゃないんですが……勝手にしてください」

学園長に頼みに行け、と言いつうになつたところで留まつた。それだつこの試召戦争が原因で面倒な展開が起きそうだからだ。面倒なことが増えたと、ルルーシュは頭を押さえて俯いた。

9話この後秀吉と優子は絡み合いましたとさ（後書き）

更新停滞していてすみません。リア充してたと言わざるを得ない。  
今回は短いけど勘弁してね

皆さんお久し↑d悪化風に

問題（生物） 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？たんぱく質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、

更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

枢木スザクの答え

『？毎日の鍛錬 ？プロテイン ？歯固めになる硬いもの ？精神

力 ? 十分な睡眠』

教師のコメント

栄養素で答えてください。

平沢憂の答え

『お姉ちゃん』

教師のコメント

とりあえず数があってない、とだけ言わせてもらいます。

## 10話　一ヶ月休んでた戦いが、遂に始まる！「酷過ぎワロタwww」

「では、両名ともに準備はよろしいでしょうか？」

「ああ」

「……問題ない」

立会人は高橋女史。知的な眼鏡とタイトスカートから伸びる脚線美がとても美しい、落ち着いていて理想像の「大人の女性」だ。

「女教師」って表現がエロいと言われているが僕は違うと思う。寧ろ一步遠い存在として扱う代物の様な存在なのだ。

君達もそんな感じに思ったことがあるだろう。何？ないだど？それは君が本物の美人な「女教師」に出会ったことがないからだよ。

悲しいね。実に残念なことだ。そんな己の日頃の行いを悔いるといい。おっと、話が逸れたね。

普段は寝てしまう退屈な授業も、その先生の時だけは何故だか目が覚め、筆が自然と動き出し、成績は良好となる。

実に素晴らしい事じゃないか。存在だけで生徒に良い影響が出るなんて素晴らしい限りだ。

因みにその教師が触ったテストの答案で〇〇ニーしていた知人もいたが素直に引いたなあれには。おっと又も話がずれたね。

そうして堂々とエ〇本も買えない未成年にとって憧れの存在となった容姿も能力も完璧な「女教師」がたまに見せる弱点。

ギャップ萌えという物を最初に自覚できたのはその時だと思うの。

……わからんだと？ 君の人生は非常につまらないな。

そして密かな想いを持っていて、いつか既に概婚者だと知った時の絶望感は半端じゃなかったな。自殺を考えたほどだった。

こうして一つの小さな初恋が終わったのだった。

「それでは、一人目は前に出てください」

「じゃあ、あたしから行くよ」

高橋女史に言われ、木下優子が前に出た。

「じゃあ、最初は私から出ようか」

カレンが進み出た。野郎共が声援を送る。

「教科は何にしますか？」

「確か最初だけこっちに選択権あったわね……じゃあ世界史で」

「世界史……ね」

「世界史、ですね。わかりました。では両者召喚を行ってください」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚！！」

掛け声とともに二人の間に魔法陣が現れて、召喚獣が出現した。優子の装備は西洋風の鎧に槍に盾、カレンは右手に何か装着している。

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 紅月カレン  
世界史 347点 109点』

Fクラスにしてはかなりの高得点ではあるが、相手がAクラスだと想像以上に点差がある。

「トリプルスコア、か……厳しいわね」

「結構良い点とるようだけど……あなたにしては低いわね、シュタットフェルトさん。少し学校を休み過ぎたんじゃない？」

「今の私は、紅月カレンよ」

「あら、それは失礼。でも何で急に苗字変えたの？」

「あなたには関係ない。そんなことより早く始めようじゃない」

「まあ、確かにそうね。じゃあ……遠慮なく！」

優子の召喚獣がカレンの召喚獣に殺到した。物凄い勢いだ。300点を超えているだけあって伊達じゃない。

凄まじい速度で槍を突き刺す優子を、カレンは半身でかわして思いつき蹴り飛ばした。

「な……!？」

「やっぱりパワーが足りないわね……思い通りに動いてくれない」

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 紅月カレン  
世界史 321点 109点』

『オオオオオオオオオオ!!』

僅かに点数修正が入り、外野が盛り上がった。

槍を勢いよく振り回すが、カレンの召喚獣にはかすりもしない。今度はカウンターをかけて肘打ちをした。

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 紅月カレン  
世界史 315点 109点』

点数では明らかに負けているのに、格上の相手を翻弄しているカレンに外野が更に沸く。

「どういう事!？ 点数ではこっちが圧倒的に勝っているのに！」

優子は唇を噛む。対するカレンは余り余裕のない様子である。

何のことはない、点数差で勝ってはいるが、元々生身の身体能力で劣っている故の結果だ。



召喚システムにまだ慣れていない両者が絶対的に違う物が、点数以外で差が出たのだ。点数差をカバーしている。

これが点数至上主義の現代の試験の常識を打ち破る試召システムの真骨頂である。

しかし優子から見れば腹ただしい状況であるが、カレンからすればかなりギリギリの状態と言える。

パワーもスピードも完全に後れをとっているので、一撃でも喰らえばほぼ勝負が決まる。

「いい加減に堕ちなさいよ!」

「冗談じゃない!」

槍を振り回しながら近づいても、悉くかわしていくカレン。

少しずつ点数を減らされていく優子は、段々冷静になっていった。

(落ち着くのは優子……相手が格下と思わない方がいいわ。多分、いえ、間違いなく点数が同じなら勝てる相手じゃない。

幸い、こっちの召喚獣の方がスペックは遥かに上。小手先の勝負に付き合っていたのではジリ貧になる。……なら!)

優子は槍を背中にしてしまう。そして一気にカレンの方に突進した。

「な!?!」

突然の行動に驚くカレンは、突進する優子をいなそうとかわそうとした。

横に動くカレンの身体に、優子の指先がかすった。

(当たった!)

「! しまった!」

かすただけなのにも関わらず、カレンの身体が大きく揺れた。点数差も相まって、カス当たりでも効果は大きい。

すぐさま受け身を取ろうとしたが、その隙を優子は見逃さずさっと飛び掛かった。

「もらった！」

「ちいいっ！」

カレンを勢いそのままに押し倒した。手で押さえながらもう片方の手で背中の槍を素早く抜いた。

「これでえっ！」

「輻射、障壁！ 展開っ！！！」

カレンの右手から赤い波動が迸り、優子の肩を掴む。優子も槍をカレンに向けて振り下ろした。

光が走り、爆発する。煙が晴れ、立っていたのは——優子の召喚獣だった。

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 紅月カレン

世界史 14点

0点』

「勝負、Aクラス。ではAクラスがまず一勝、と」

まずAクラスが白星をつけた。

☆

（なるほどな、召喚獣の能力は本人の能力に比例するという事か）

ルルーシュは離れたところで傍観していた。さっきの戦闘を見て、色々考案した事があった。

点数差もだが、召喚した本人の力量も大きく左右されること、操縦にはある程度の慣れが必要な事、点数差に過信できない事――

当たらなければ、どんな強力な攻撃も意味をなさない。（某赤い人の“当たらなければどうという事はない”は名言）

だが、逆に考えれば、当たり前さえすればどうとでもなるのだ。優子はそれを思いついたのだろう

さっきの優子の戦法は、点数差に物を言わせてのゴリ押しだ。あれだけ点数に差があるとちょっとした攻撃でも結果が出る。

あの点数なら指先が少し当たるだけで動きを止められる程怯ませることが出来る。後はそこを突く。

そしてカレンが最後に見せた攻撃は、恐らく悪足掻きではなく、相打ち狙いだったのではないか。

（やはり……この召喚システムは軍事技術の流用で完成させた技術……なら）

「すごいわね〜ルルーシュ〜。試験召喚システムって。うちも実装しないかしら。面白そう」

ルルーシュの思考をかき消したのは、ミレイ・アッシュフォードとシャーリー・フェネットである。

彼女達の制服が文月学園の物ではない為、周りからかなり浮いている。

ルルーシュの非常に近い距離にいる為、シャーリーとミレイに怨嗟の視線を送る周りの女子生徒もいる。

「会長、ここに堂々と入ってきて何も言われなかったんですか？」  
「ちゃあんとここの学園長に話を通したわよ？　いくらなんでもそ

こまで非常識じゃないわ」

「ルルずるーい！ あんな可愛いので遊べるなんて！」

「いや、これも立派な授業だからな。遊びでやっているわけじゃないんだよ」

うんざりしたようにルルーシュは言った。

本来なら他校の人間が授業中にここにいるだけでも結構不味い事であるんだが、アッシュフォード学園の人間なら尚更だ。

それにミレイの肩書は色々この学園にとって嬉しくないものである、はずだ。

一体どんな手段を使ったのかルルーシュはすぐに思いつかなかった。高橋女史が言った。

「次の人は準備を始めてください」

ミレイは肘でルルーシュを小突いた。

「そろそろ見せてよ、ルルーシュの召喚獣」

「え？」

「そうよルルー。私も早くルルの召喚獣が見たいし、それに戦っているところも見てみたい」

「……まあ、どちらにしろでなくてはいけないわけだし、早いか遅いかの違いだからな。出るか」

ルルーシュは進んでいった。

☆

雄二はルルーシュが出てきたのを確認して、明久を呼んだ。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？ 僕！？」

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことがないが。なんかあんのか？』

『いつものジョークじゃね？』

Fクラスが妙な空気に支配された。

「吉井明久か。お前、まさか……」

ルルーシュが何かに気付いて戦っている。

（さすが成績トップ。目利きが良いな）「あれ、気付いた？ ご名

答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

「それでは、お前は……！」（いや、お前の事など知った事ではないが）

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠して来たけれど、実は僕――」

腕まくりをして、軽く準備体操をし、身体がほぐれた明久は、こう宣言した。

「――左利きなんだ」

「そうなのか。俺は右利きだ」

『Aクラス ルルーシュ・ランペルージ VS Fクラス 吉井明久』

点』

「すげえな、点数が十倍差なんて滅多に見れるもんじゃないぞ」

誰かがそう言った。

「僕の本気の左手の實力、思い知れ〜！」

明久の召喚獣が走り出し、木刀を振りかぶる。ルルーシュの召喚獣は微動だにしない。

そして振り下ろされた木刀は、パキンと間抜けな音を立ててへし折れた。絶対守護領域に簡単に迎撃されてしまったのだ。

「……へ？」

状況もわからずへし折れた木刀を呆然と見る明久に、ルルーシュはワイヤーで明久を拘束した。

抵抗する暇も与えず、手から出た赤い光弾が明久に命中した。明久の召喚獣はあっけなく倒れた。

☆

「そ、そんな馬鹿な！本気の左手で負けるなんて！」

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

「よし。勝負はここからだ」

「ちよっと待った雄二！アンタ僕を全然信頼してなかったでしよう！」

「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

口ではそう言ったが、雄二としてはこの結果に終わって十分に満足だった。

これからの戦略で必要な瑞希、ムッツリーニ、スザクも、ルルーシユ相手にはかなり分が悪いだろう。

正直に言くと、翔子はともかく、ルルーシユを相手にして勝てるわけはない。つまりルルーシユ戦は確実に黒星をもらう事になる。

Fクラスの人間は上に挙げた奴以外ではAクラスの誰とやっても負けは確実だろう。そこで明久の出番である。

それに明久は戦略面では有能だが、今回の件では完全にお荷物である。

だったらその明久でルルーシユを消費させる。簡単に言えば、明久には生贄になってもらった。

ただこれは明らかに明久を出す必要性もなかったが、雄二にとって動かしやすい駒であるだけの理由である。

因みに雄二も今回のAクラス戦はかなりの博打要素を意識しているつもりだった。戦力で劣る以上、賭けは必要だ。

勿論今までもそうだったが、今回は本当に厳しい。その要因であるルルーシユをどうにかダメージを少なくして排除できた。

少しは難易度が下がったと思っていた雄二だった。そう———本当の意味で、勝負はここからだ。

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

静かにムッツリーニが立ち上がった。向こうも一人の女子生徒が立ち上がった。

「じゃ、私が行こうか」

秋山漣である。

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

ムツツリーニは迷うことなく己の最大の武器を選んだ。

「いけーっムツツリーニ！ 僕の仇を取ってくれー！」

明久の声援。ムツツリーニは表情を動かす事がない。

「…………え？ む、ムツツリーニって、もしかして……………！？」

漣は明久の声を聞いて絶句し、顔を青ざめさせた。

皆忘れているかもしれないが、“ムツツリーニ”という呼び名は女子生徒には軽蔑と恐怖の念をもって広がっている。

前々から思ってたんだけど、この学校ムツツリーニに対して優し過ぎじゃね？ と思ってたんだが余り存在感ない感じなのね。

ムツツリーニは何かに気付いたように、周りに聞こえない程度で一言ボソツと呟いた。

「……………しましま」

「ヒィィッ！」

ムツツリーニのその一言に、漣が耳を塞いで縮こまった。高橋女史は言った。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「あ、は、はい。さ、試獣<sup>サモン</sup>召喚」



「……………試<sup>サモン</sup>獣召喚」

漣は氣を取り直して召喚を始めた。まだ微妙に震えている。  
漣の召喚獣は西洋の兵隊のように剣を装備している。ムッツリーニは小太刀の二刀流で忍者を模したコスチュームだ。

『Aクラス 秋山 漣 VS Fクラス 土屋康太  
保健体育 266点 572点』

「う、嘘！ こんな点数……！」  
「……………加速」

ムッツリーニの召喚獣の腕輪が輝き、動いた。漣の召喚獣はその速さを捕えられずに身構える。  
漣が握っていた剣が弾き飛ばされる。ムッツリーニの動きは少しも変わることがない。

「くっ……！」  
「……………トドメ」

そのままのスピードでつつ込み、相手の心臓を小太刀で一突きにした。  
た。

ムッツリーニの召喚獣が出したスピードは留まる事を知らず、突風となって本体の漣に襲いかかった。

「キャッ！」

神風がブワッと吹き、彼女のスカートを持っていた。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお』

おおおおお!!!!!!」

「い、いやあああああああつあああああ!!!!!!」

大勢の男子生徒が雄叫びをあげ、ムツツリーニは一瞬でカメラを出してシャッターを切りながら鼻血を出して昏倒し、  
明久は何故か美波にソバットを喰らって頭を押さえて蹲っていた。  
そして滯はスカートを抑えて泣きながら逃げて行った。眼鏡の子と眉の太い子に慰められているようです。

「……とにかく、次の勝負の準備をしてください」

一方で冷静に処理を進める高橋女史。

「次は僕が出ます」

進み出たのはスザクだった。最も、倒れたムツツリーニを片づけているだけだが。

「あ、じゃあ次は私が出ます!」

Aクラスから進み出たのは滯を慰めていた琴吹紬である。愛称はムギである。

「教科は何にしますか?」

「では、古典をお願いします」

スザクは自分の得意武器を即座に選択した。

「「試獣<sup>サモン</sup>召喚!」」

二人は同時に召喚獣を呼び出した。

スザクの召喚獣は白い衣装に一丁の青い拳銃と二本の剣を携えている。頭には兜の様なものを被っている。

ムギの召喚獣の方は一振りのサーベル装備である。実にシンプルな装備である。

『Aクラス 琴吹 紬 VS Fクラス 枢木スザク  
古典 405点 321点』

点数が表示される。点数は勝ってはいないがそれなりに追いつくことが出来ているようだ。

「やっぱり勝てるほど甘くないか……でも、これなら！」

「滯ちゃんの仇、取らせてもらおうわ！」

両者の召喚獣が剣を抜いた。構えて、殆ど同時に地を蹴った。

ガキンッと硬質な音を立てて鏢迫り合いをする両者、じりじりと前進したり後退したりの前進しだ。

スザクが力いっぱいムギを振り払うように押し返す。ムギは流れに逆らわずに敢えて後ろに下がる。

ムギの体制が崩れた所にスザクが拳銃を向ける。

「これでっ！」

「まだっ！」

それと同時にムギはサーベルをスザクに投げ付けた。

「くっ！」

咄嗟にスザクがガードする。拳銃に当たり、スザクはそれを捨てた。

素晴らしい反射神経だ。

無理な体勢でサーベルを投げ付けた為、そのまま倒れたムギ。その隙を逃さず、スザクが殺到した。

ムギが大勢を立て直した所にスザクが跳躍した。その勢いで回し蹴りを放つ。

「はあっ！」

「ぐうっ！」

両腕でガードしたがスザクの蹴りの勢いが予想外に強く、身体が揺れる。後ろに飛びすがって勢いを殺そうとしたが殺しきれず、一瞬怯む。受け身となり武器も全てなくして、戦況はムギに不利だ。スザクは抜刀し、ムギに一気に攻める。

「これで終わらせる！」

「いいえ、まだよ！」

その時、ムギの腕輪が光り輝いた。すると召喚獣が光りに包まれた。

「な、なんだ！？」

「ハアアアアアアアアア！」

否、光に包まれたのではなく、自ら光り輝いていたのだ。全身を金色に染めながら。

「あれが腕輪の能力か！」

「ここからが本番よ！」

そうムギが言った瞬間、ムギの召喚獣は一気に走り出した。さっきとは比べ物にならないほどのスピードだ。

スザクが咄嗟に構えると同時に、ムギはスザクの武器を破壊した。根本からへし折ったのだ。

「（速い！）でも、格闘戦なら！」

スザクはすぐに折れた剣を捨てて、身構えた。ムギもしなやかなフットワークでスザクに距離を詰める。

「左！」

「甘いわ！」

スザクの左側からムギが拳を突き立てる。スザクはそれと呼んできたかのようにステップしてかわし、蹴りを見舞った。

しかしスザクの蹴りは空をきり、ムギを捕えられなかった。

スザクが状況確認する間もなく、ムギの拳がスザクの正面から突き立てた。連続で拳を乱舞させていくムギ。

乱打で怯んだスザクを相手にムギがスザクを凄いスピードで駆け抜けた。

「ばあゝくはっ！！」

ムギの召喚獣がポーズを決めた。同時にスザクの召喚獣が爆散した。

「スーパー説明タイム・式」

諸君！ 説明しよう！

見てもらった人にはわかるだろうが、ムギの腕輪の能力は“明鏡止水”である！  
めいぎやうし

真の明鏡止水の境地に達することで発現し、機体が黄金色に輝く、との事だが、簡単に言えばパワーアップである！

スザクを倒した技は東方不敗マスター・アジアの技の一つ“酔舞”  
すいぶ

再現江湖デッドリーウェイブ”だ！

やべえ師匠かつこよすぎだろ常識的に考えて……

くスーパー説明タイム・式・終了く

要約…金ぴかマスターから逃げられねえ……誰か助けて

「あれ……僕召喚獣の扱い慣れているから有利だと思ってたんだけど……全然勝てる気がしない……」

「明久……その気持ち……分かるぞ」

そんな会話があったとかなかったとか。

☆

「ごめん……勝てなかった……」

「いや、お前はよくやった。休んでてくれ」

「そうだよ。凄かったよ」

気が沈んでいるスザクに明久と雄二が励ましの声を送る。が、内心では雄二は焦っていた。

（不味いな）

ここでスザクが勝ってくれば一気にこちらが有利になるはずだったが、甘かった。Aクラスの力を舐め過ぎた。

これで負けは許されなくなった。そして勝利が三つ必要になった。雄二と瑞希の分はともかく、あと一つがキツイ。どうしても思いつかない。

（どうする……？）

「これで三対一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

雄二の思考を置いて、戦局は流れる。手を上げたのは瑞希だ。

「それなら僕が相手をしよう。この戦いもここで終わりにしよう」

あちらからは久保利光が出てきた。

「やはり来たか。ここが一番の心配どころだったはずなんだが……」

雄二が唸る。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「ちょっと待った！ 選択権はこっちに」

「構いません」

クレームをつけようとする明久を瑞希が止めた。

「それでは……」

高橋女史がいつもの通り操作を行い、両者の召喚獣が現れた。一瞬で決着なんてつけさせねえぞ！

『Aクラス 久保利光 VS Fクラス 姫路瑞希  
総合科目 3997点 VS 4409点』

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

なんと驚きの400点オーバー。

「ぐっ……！ 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

「なるほど……。しかし、点数が戦力の決定的差ではないという事を、教えてやる！」

「望むところです！」

巨大な洋刀を軽々と持ち上げる瑞希召喚獣と巨大な鎌をくるくる回す利光の召喚獣。

先に動いたのは瑞希の方だった。地を踏み割るかのように力強く床を蹴って跳躍した。勢いのままに洋刀を振り下ろした。

利光は咄嗟に回避した。そして大鎌を横に振った。瑞希は盾で余裕を持って受け流す。

更に連撃を入れる様に利光は踏み込み、振り被った。それに合わせて、瑞希も洋刀を振りかぶった。

ガキーンッと金属的な音がして、鏑迫り合いを起こす両者。

「し、しまった！」

「これで最後です！」

利光は焦りを見せ、瑞希は勝利を確信した笑みを浮かべた。

元々点数で負けているのに、小細工抜きの単純な力比べをしてはその差がもろに出てしまう。

ジリジリと腰砕けになっていく利光の召喚獣。鎌を持つ腕が痙攣し



始めている。

（くっ……！ 吉井君……！ 僕に力を！）

（吉井君、見ててください！ これが今の私の全力です！）

ヨシイクンモテスギ（棒）

やがてパワー負けしてしまい、利光の召喚獣が力尽きて斬られた。

☆

「次の人出てください」

「はい」

挙手したのはフェイト・T・ハラオウンだ。Cクラス殲滅戦で猛威を奮った人物だ。

（どうする？）

雄二は悩む。

今こちらに残っている手駒で彼女に敵う人間はいない。瑞希、ムツツリーニは使ってしまった。

それにフェイトは学力もさることながら、運動神経も相当のもの記憶している。死角なしの優等生タイプだ。

——どうせ勝てないなら、賭けてみるか？

雄二は一人に視線を向けた。

「キラ！」

「え、何？」

「出てくれ、頼む」

「わかった。いいよ」

キラは快く受け入れた。美波が後ろから雄二の肩をつついた。

「ちょっと坂本、いくら何でもこの局面で転校生にいきなりでろなんて、何考えてんのよ？ 相手が悪過ぎよ」

「すまんが、この勝負ほぼ詰んでるんだ。無謀な賭けだとは思うが……」

キラが前に出る。それをみて高橋女史は操作する手を止めた。

「教科は何にしますか？」

「では、数学で」

キラが数学を選ぶ。それを聞いて周りの一同は一斉に沸く。

『ハラオウン相手に理系科目で勝負か？』

『理系科目なら霧島以上にはある相手だぞ？ 正気か？』

『つか、あいつ誰だ？ 見ない顔だが』

野次を飛ばす観客だが、その中でアスランだけは冷静だった。アスランはフェイトに声をかけた。

「ハラオウン！ 油断するな！ あいつは強いぞ！」

「手を抜くつもりはないけど、負けるつもりもないよ」

フェイトは振り向かずに前のキラだけを見た。集中しているようだ。また定番の召喚に入った。

『Aクラス フェイト・T・ハラオウン VS Fクラス キラ・ヤマト』

数学 655点 80

1点』

点数が出た。それを見てアスランを除くそこにいる全員が驚愕の表情になった。

『なんだあいつ！ 一体何者なんだ！？』

『Fクラスの総合点数の間違いだろ！？ あんなの取れるわけない！』

『なんでFクラスにいるんだ！？』

そんな彼らを見向きもせず、フェイトはキラを見る。表情にどこか歓喜の念が見える。キラはフェイトを無表情に見ている。

フェイトの召喚獣は黒い装束とマントに一振りの金色の大剣、キラの召喚獣は光のサーベル二本、背中には青い翼が生えている。

「あれ？ 前見た時はあんなのなかった気がする」

明久がそう言った瞬間、二人の召喚獣が飛翔した。召喚獣戦において、空中戦はこれが史上初だったりする。

フェイトの方は剣を大きく振りかぶり、キラは右のサーベルを使って受け止めた。バチバチと火花が散る。

鏑迫り合いを暫く繰り返しながら、両者が飛びすぎるように離れ、射撃戦を展開させる。

フェイトは金色の刃を次々と撃ち、キラは取り出したライフルで牽制射撃を行う。凄まじい弾幕が戦場を支配する。

キラは正確に回避し、フェイトはスピードに物を言わせ照準を取ら

せないようにしている

「ここで一気に！」

フェイトの腕輪が光る。するとフェイトの召喚獣の身体が光りに包まれた。

「あれは……？」

キラは唸る。

フェイトの召喚獣はさっきより露出が増えていて、剣がさっきよりも細く――日本刀くらいに――二本になっていた。周りが確認できたのはそこまでだった。

「ソニック・ムーヴ！」

刹那、フェイトの召喚獣の姿が消えた。否、消えたのではなく、見えなくなった。

キラが下がろうとした時、手に持っていたライフルが半ばから断ち切られた。キラは即座にライフルを捨てた。

キラはサーベルを取り出そうとしたが、断念した。とても武器を選んでいるような余裕がない。

『なんだあの速さ！？　ムツツリーニの加速よりも速さが上じゃないのか！？』

『これがハラオウンの実力なのか！？　なんて奴だ！』

『フェイトさん結婚して下さい！』

なんか最後にあったがスルーな。

フェイトのスピードは一般人には殆ど目にも映らないほどだった。そう、“一般人”には。

「はあああっ！」

「遅い！」

超高速で側面から斬りかかったフェイトが剣を振り下ろすよりも先に、キラが拳を放った。

腹部に拳を喰らったフェイトは表情を顰めながら、一旦下がる。

「そんな……！ 今を見切るなんて！」

フェイトは驚きの声を上げた。キラはそんな声を無視して今の召喚獣の手応えを噛み締めた。

（やっぱりだ……。観察処分者になって肉体に感覚がフィードバックするようになってから、身体の馴染み易さが全然違う。

まさかここまでの技術が完成してたなんて……。確かに技術を欲しがる企業が現れるわけだ。肉体の延長線みたいだ。

でも、まだ僕の反応に追いついてこない。もっと速く反応してほしいなあ）

腕を振り上げる。拳を開いたり閉じたりする。背中の翼を大きく展開する。一通り動作を終えたキラはサーベルを抜こうとした。

「させない！」

「！ チッ！」

しかし、フェイトが急接近してそれを封じる。キラは仕方なしに後ろに下がる。キラは思わず舌打ちする。

そのままフェイトが一方的に攻めようとする。対するキラは腰を落とすかのようにつつと予備動作なく動いた。すると、ガキンツと音を立ててフェイトの剣が片方吹っ飛んでいった。

「な……！」

キラの方を見ると、いつの間にかサーベルを抜いていた。誰もキラの抜刀を見切った者はその場にはいなかった。

フェイトは残った剣でキラに斬りかかる。キラは前に滑るように動き、フェイトの一太刀をギリギリかわした。

「！」

フェイトの顔が強張る。

キラはもう片方のサーベルも抜き、踊るかのように身体を乱舞させたかと思うと無数の斬撃が襲い、フェイトを一気に斬り刻んだ。

その様子を目視で確認できたものはそこにはいなかった。フェイトも同様に、だ。

フェイトの召喚獣は多くの切り傷を受けて墜落した。キラの召喚獣は何事もなかったかのように着地した。

そうして雌雄が決した。

☆

さっきの戦闘での熱狂が観客達を包む中、雄二は胸を撫で下ろした。完全に予想外だったが、これで3対3になった。残るは代表の雄二だけだ。

「最後の1人どうぞ。」

「……はい」

「さて……俺の出番だな」

ようやく最後の代表戦、そして最大の難関である霧島翔子が出てきた。雄二も腰を上げた。

「教科はどうしますか？」

高橋女史がそう言った。雄二は自信に溢れる声でこう宣言した。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限ありだ！」

ザワ……ザワ……

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

おおおおざわついでるじゃないの。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待っていてください」

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ。任された」

「……………（ビツ）」

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」  
「はいっ」

皆から応援の声をかけられ、笑みを浮かべる雄二。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

「……はい」

「じゃ、行ってくるか」

「頑張ってくださいね、坂本くん」

「ああ」

雄二が皆に見送られながら視聴覚室に向かった。

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

高橋女史が機械を操作し、壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出される。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です』

画面の向こうでは、日本史担当の飯田先生が二人の机に問題用紙を裏返して置く。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『わかっているさ』

『では、始めてください』

二人は答案を表にして解き始めた。



「吉井君、いよいよですね……！」

「そうだね。いよいよだね」

「これで、あの問題がなかったら坂本君は……」

「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね。でも」

「はい。もし出ていたら」

「うん」

ディスプレイに次々と問題が映し出され、そして

（ ） 年 大化の改新

「あ……！」

出ていました。今回の勝利の鍵が。

「よ、吉井君っ」

「うん」

「これで、私たちっ……！」

「うん！ これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

Fクラスの皆の言葉が重なる。

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うおおおおっ！』

教室を揺るがすくらいの歓喜の声。そしてディスプレイに映る、両者の点数。その結果は――――

10話〜一ヶ月休んでた戦いが、遂に始まる! 「酷過ぎワロタWWW」(後書

毎週月曜日更新とかいっときながら一か月停滞とか……死んだ方がいいな。

皆さんお久し。御餅です。一巻で一番書きたかった場面が書いて嬉しく思います。

嬉しさの余りちょっとだけ書いた時の気持ちなどを書きます。

・高橋女史美人過ぎワロタW

最初に書いたのは実体験です。いやマジで。初恋が女性教師だったのだよ。中学生の頃で、色々おバカな時期でした。

・一戦目 弾けろ!ブリタニア! (相手が日本人なのは内緒な

正直に言うとう優子よりアスラン出すべきだったと後悔したけど、そしたらカレンが一方的にやられて終わるよな……

因みに最近は一・J練習してます。トウ、ヘアー!

・二戦目 ルルーシュ無双

原作見てる人からすると有り得ないほどルルーシュ強いですね。特に言う事ないわ。

・三戦目 工藤さんエ……

澪ちゃんにはパンツ要因になってももらいました。君が悪いのだよ、MMQは犯罪だ。

すみません澪活躍させたただけなんだ。こんな扱いだけどね。

・四戦目 逃げるんだア……勝てるわけがない……

ムギちゃんマジ天使。スザクをやられ役にしてしまってますいけません。明鏡止水が一番似合いそうな子がムギだったんで。

因みに戦闘の内容はまんま覚醒マスターとの対峙です。冗談抜きでわき目も振らずに一目散に逃げるしかねーぞあれ。迎撃も無理だから間違っても格闘戦に付き合わないようにしようね。

#### ・五戦目 ここだけ原作に忠実

原作でここを一瞬で終わらせたのは許せなかったので描写してみた。しかし久保君はいいキャラですね。根本と違って一巻で使い捨てにできなかったのも納得です。

なんかゲイ要素で知られる彼ですが、結構レベル高い男ですよ。

#### ・六戦目 なんでフリーダム出さないんだよ開発……

ここ書いて、やっぱりキラは戦闘やらせた方が輝くキャラだな、と痛感しました。ここが書いて一番楽しかった。

なのはをそうかと思っただけで接近戦大好きな作者なのでフェイトにしました。個人的にはなのはの方が好きだけだね。

あと拳よりキラキック使うべきだったかもしれん。キラと言えば足癖の悪さだね！

#### ・七戦目 最終決戦

戦闘ないんでテンプレ通りやっただけです。

#### 次回予告

最上級クラスに勝利一歩手前まで追いつめた最下級のFクラス。そして全ての想いと命運、そして誇りをかけて代表、雄二が最後の戦いに挑む。

彼らの未来に待ち受けるのはシステムデスクか、それとも――――

次回『Aクラス大勝利！ 希望の明日ヘレディー・ゴー！！』

君は、時の涙を見る。



**11話くAクラス大勝利！ 希望の明日へレディー・ゴー！く（前書き）**

今回はちよつと早めに上げます。

バカテスト

**【第十問】**

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『西暦（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

## 11話 Aクラス大勝利！ 希望の明日へレディー・ゴー！！

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

キタアアアア！ ダブルスコアッ！ これを待っていた！！ 表  
示されると同時にイッ！ すかさず叩きこむ！！

「Aクラスの勝利です」

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！ 歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

激昂する明久を瑞希が後ろから抱きついて止めた。替ってくれ、と  
血涙を流すFクラス諸君。

「だいたい、53点ってなんだよ！ 0点なら名前の書き忘れとか  
も考えられるのに、この点数だと——」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！ アンタだったら30点も取れないでし  
ようが！」

「それについては否定はしない！」

「だったら坂本君を責めちゃダメです！」

「くっ！ なぜ止めるんだ皆！ この馬鹿には喉笛を引き裂くとい

う体罰が必要なのに！」

「それ体罰じゃなくて処刑ですよね!？」

「フンっ！」

「あべしっ」

スザクのフックで明久は沈黙した。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

すまんが作者も（問題、教科によるが）満点をとれる自信ないわ。小学生の問題と言って甘く見るものではないぞ。

何故なら学校とは100点とることより70点取ることを教えるからだ。満点はそんなに安くはないという事だ。覚えておいてね。つまり、学業は舐めてかかるな、という教訓だよ。

「……ところで約束」

翔子は本題を持ちだした。

「……………！」カシャカシャカシャ

ムツツリーニ△

「わかっている。なんでも言え」

「……それじゃ————雄二、私と付き合って」

驚きで教室に沈黙が訪れる。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」グイッ

「ぐあっ！放せ！やっぱりこの約束はなかったことに——」

翔子は雄二の首根っこを掴んで教室を出て行った。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

呆然としていたFクラスに野太い声が掛かる。

声のしたほうを見ると、そこには生活指導の西村先生（鉄人）が立っていた。

「あれ？西村先生。僕らになんか用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補修についての説明をしようと思っ  
てな」

（……我が？）

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に  
担任が変わるそう。これから一年死に物狂いで勉強できるぞ」

『『なにいつ！』』』

クラスの男子全員が悲鳴をあげる。

「いいか。確にお前らはよくやった。Fクラスがここまで来ると  
は正直思わなかった。でもな、



いくら『学力が全てではない』といっても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。

全てではないからと言って、ないがしろにしているものじゃない。それと、吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》と《A級戦犯》だからな」

「そうは行きませんよ！　なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活をすごして見せます！」

「……お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

溜息交じりに呆れているようだ。まあそうっすね。

「とりあえず明日からは授業とは別に補修の時間を二時間設けてやろう」

しかし明久はやる気が出しているようだ。三ヵ月後にまた試召戦争を起こして、この教師から逃れる為だろうが。そんな明久に美波が近寄ってきた。

「さあゝて、アキ。補修は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープを食べに行きましょうか？」

「え？　美波、それは週末の話じゃ……」

「だ、ダメです！　吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？　姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

「よかったじゃないか明久。両手に花だぞ？」

「それよりも僕の食費が！！　西村先生！　明日からと言わず、補修は今日からやりましょう！　思い立ったが仏滅です！」

「『吉日』で、バカ」

「そんなことはどうでもいいですから！」

「うーん。お前にやる気が出たのは嬉しいが――」

言葉を区切って明久と島田と姫路を見る西村先生。そしてニヤニヤと嫌な笑顔でご無体なお言葉を明久に送る

「無理することはない。今日は存分に遊ぶといい」

「おのれ鉄人！ 僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！

こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットをもって貴様を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

「アキ！ こんな時だけやる気を見せて逃げようたって、そうはいかないんだからね！」

「ち、違うよ！ 本当にやる気が出ているんだってば！」

「吉井君！ その前に私と映画に行くんですっ！」

「姫路さん、それは雄二とじゃなくて僕となの！？」

「?? 坂本君？ なんのことですか？ 私は吉井君のことがずっと——」

「アキ！ いいから来なさい！」

「あがあっ！ 美波、首は致命傷になるから優しく——」

「ほら、早くクレープ食べに行くわよ！」

「わ、私と映画にいくんですよね！」

「いやああっ！ 生活費が！ 僕の栄養があっ！」

そうして明久の長い一日はまだまだ続くのであった。

**11話〱Aクラス大勝利！ 希望の明日へレディー・ゴー！！〱（後書き）**

やっと一巻分終わった。今回は特に捻りもなかったし書くのもそんなにからなかったなので、

休んでた分として早めに投下させてもらいました。次のは二日後の月曜日に

次回からはリクエストキャラ追加で行きますのでよろしく

**番外編く遊びでやってるんじゃないだよ!↑超遊びですが何か?↓(前書き)**

とりあえず今回は番外編＋リクエストの中から何人か出してみよう  
と思います。

時間軸がバラバラなのは気にしないでください。

番外編く遊びでやってるんじゃないんだよ！↑超遊びですが何か？く

Bクラス戦後の事である

学園長室――

「で、アンタかい。今回の器物破損の件の首謀者は」

「はい」

鼻を鳴らして不快そうな学園長相手に、キラは毅然とした態度で返事した。

ここにはキラと学園長・藤堂しかいない。

「自分が吉井君を先導してやらせました。責任は僕にあります」

「そうだね。言うまでもなくあんたの責任だよ。“点数操作した上で、召喚フィールドを自力で発生させて”ね」

キラは反論しない。ますます不愉快そうな表情になる学園長。

「悪いけど器物破損とかどうでもいい。そんなガキどもの悪戯如きのことで私が一々腰を上げるわけないだろうが。」

忙しいんだよこっちは。そんなことよりも、世界初の技術を取り入れた試験校の技術を無断で使われた事が大事なんだよ。

まさかこの馬の骨とも分からないような小僧に簡単に干渉されるなんて、夢にも思わなかったね。私の面目は丸潰れだよ」

「……そうですか」

「何か言いたい事があるようだね」

「いえ、早く処分を聞きたいので」

話が早い、と学園長は手を組み直した。

「分かっていると思うけど、このままあんたを好きにさせておくと思っただら大間違いだよ。“キラ・ヤマト”」

キラは眉を潜める。

「モルゲンレーテで話は聞いたことがある。モビルスーツの開発に詳しい人間なら知っているし、私も耳に入れた事がある。

ナチュラル用のOSを改良したそうじゃないか。それにモビルスーツ戦の教本が作れるほどの戦闘データも持っている。

それに軍事畑の人間なら伝説として通っているそうじゃないか。実在するかしないか定かではないとか。

そんな人間が、偽名も使わずに堂々とうちに来るとはね。誰だつて驚くに決まっているさ。

しかもそんな肩書抜きでも、あんたはこのマザーコンピュータに簡単にハッキングできる腕がある。大したもんだ」

どこの馬の骨とも分からないような小僧、と言っていた割には下調べができているらしい。

学園長は腕を組み直す。

「さて本題だ。お前はこの学校に何しに来た？」

「平和に暮らしたかっただけです」

「惚けるんじゃないよ。この学校の技術はモビルスーツのシュミレーターシステムの派生版だという事はわかってるだろ。

その気になれば、簡単に軍事利用もできるだろうし、やり方によっては大量殺人の兵器にもなる。

開発者でもあり最高責任者でもある私はそんなことを許容できるわけないんだよ。仮にあんたに言う通りでもね」

これまで映像（というか、実態のない物）を実体化できる技術を完成させたのは世界中でこの藤堂のみだ。“あれ”を除いて――この試召システムも見た目のカモフラージュで、どんどん技術発展をしている。

明久の召喚獣がいい例だ。恐らくまだ改良する余地があるだろう。

「僕がそういう事をする？」

「するしないの問題じゃない、出来るんだからな。慎重にもなる。仮にあんたにその意思がなくとも、流出の可能性が今できた。

現にこの学校に圧力をかけているフジヤマ社なんかはうちの技術と利益を嬉々として欲しがるだろうし。

そうでなくとも、この学校に良くない感情を持つ連中は大勢いる。面倒極まりないけど仕方ない。

そしてあんたがそういう連中に売らないか心配なのさ」

前大戦が終わり連合が消滅したあと、この不景気をどう立ちまわるかで今後の立ち位置が決まるといつてもいい。

軍需産業に頼り過ぎていた多くの会社が一気にやせ細る中、フジヤマ社等も例外ではない。

そこで最新技術を名高いこの文月学園に目をつけたのだ。世界に注目されているだけあって、多くの強力なスポンサーがいる。

ブランド、ブリタニア、オーブ等からも出資してもらっていて、そして教育機関からは生徒が取られる為敵視されている。

敵が多い、という事だ。孤立無援ではないが。

「売りません」

「言葉だけで信用できると思ってんのか？ 甘いぞクソガキ」

「……そうですね」

「あんたの処分はもう決まっている。『観察処分者』だ。言っとくが今回は劣等生や“馬鹿”としてつける称号じゃないぞ。

“危険人物”だ。ただ罰で雑用をやらせているんじゃない。監視する為だ。目の届くところではなく、“完全に”な。後もう一つ――」

学園長が一枚の写真を取り出した。

「……！」

それに目を通したキラは凍りついた。

「私はこれがなんなのかは知らないがね、アンタに見せれば分かって言われたけど、どうだい？」

「これ……は、誰から提供してもらったんですか……！？」

キラは声の震えを隠せずに言った。学園長はその様子を興味深く観察する。

「知らない男だよ。容貌は黒髪にサングラスで185は超える長身だった。少なくとも私の知り合いには見覚えがなかったし、実際に会ったのは昨日だ。詳しく聞かれても答えられないよ。残念だったねえ。そうそう、その写真渡してこう言ったよ、

『これを見せておけばキラ・ヤマトは大人しくなる』ってね。まさか本当になるとは思わなかったけどね」

顔だけで笑って見せたが、視線は少しもキラから離さない。

――間違いない、メンデル関係者だ。それに僕のことを知っている。それはつまり“僕の正体”についても、だ。

僕の事を知ってる範囲ではそんな人は知らない。だけど……なんだでここまで……！！



キラの心中を察してか否か、学園長は話を続ける。

「……どうやら日の光にあてられたら困る代物らしいねえ。まあそんなことはどうでもいいさ。

アンタは明日からは“観察処分者”だ。異論はなし。これは決定だ。そして、よからぬことを考えた場合、つまりこの学校に

不利益を被りかねない行動に出た時、この写真が世間にでまわる。分かったら出て失せな」

キラはそれを聞いて何も言わず退室した。汗で制服が背中にびっしりと貼りつくまで濡れていることによりやく気付いた。

——さっきの写真が晒されたら、僕は間違いなくブルーコスモスの最優先ターゲットになる。今まで通りの生活ができなくなる。

それに確実に母さん達まで被害が及ぶ。でも、メンデルのデータは既に廃棄されてあったはず……。一体誰が……！？

しかし今考えても切りがない。今はAクラス戦を控えているFクラスに戻る事が先決だ。

☆

こんにちは、中野梓です。今年この学校に入学してきた新一年生です。

ここ文月学園では、試験召喚システムという技術を投入した実験校なのです。

まあ私も興味があったし、安くて近いからこの学校を選んだわけです。

そして今、私は軽音部に所属しています。

新人生歓迎会でのここの軽音部の演奏に感動して、真っ先に入部してしまいました。

そこには、理想的な先輩像を持つ人たちではなく、寧ろ期待外れな人達ばかりでしたが……。

いつもダラダラしてて、部室を私物化してお茶してるし、練習は不真面目だし、あずにゃんなるあだ名をつけられたし……

「やあ梓」

「あ、滯先輩」

この人は秋山滯先輩。この部の中ではかなりまともな先輩。尊敬してます。

「どう？ もう軽音部には慣れた？」

「えっと……まだこののんびりした空気がちょっと……」

「あー……」

私の素直な感想に滯先輩は苦笑してる。

「大丈夫！　すぐ慣れるよ！」

口元にケーキのクリームを付けた唯先輩が私の肩を掴んでそう言った。

（あんまり慣れたくないなあ……）

滯先輩が唯先輩の顔をハンカチで拭くのを見ながらそう思った。

「大丈夫よ梓ちゃん。すぐ慣れるから。あ、お茶用意したわよ。ケーキどう？」

ムギ先輩は私にケーキを勧める。甘い香りと紅茶のいい香りがミックスして、口の中で増える唾を呑みこむ。

「で、ではお願いします」

「喜んで♪」

嬉しそうにパタパタと足音を立ててカップを持ってくるムギ先輩。

（でも、こんなにダラダラしてて、唯先輩なんて音楽用語をまるで知らないのに、何で四人揃うとあんなに良い演奏になるんだろ。

……あれ、四人？）

「滯先輩、そう言えば律先輩は来てないんですか？」

「あれ？　そういえば遅いな。何やってるんだ？」

滯先輩も知らないみたいだ。すると突然扉が開いた。

「おーい、梓いるかー？」

律先輩だ。何やら私に用があるみたいだ。

「はい、いますよ」

「お客さんがきてんぞー」

「梓ちゃん」

律先輩の脇から出てきたのは長髪の女の子だ。私はその子を知っている。同じクラスだし知った仲だからだ。

「どうしたの？　ギンガ」

「教室に落としてたから持ってきたの。はいこれ」

そう言って渡されたのはペンケースだった。確かに私のだった。律先輩が興味深そうにギンガに聞いてみた。

「ほうほう、ところで君の名前はなんだい？　今入っている部活はある？」

「はい、私はギンガ・ナカジマと言います」

「え？　中島銀河、って呼び方じゃなくて？」

「まあ、いつの家系の問題で……。部活は今部員募集中です」

「そうなの。……へ？　部員募集？」

「はい。シューティングアーツ部を設立しまして」

え？　何それ？　初めて聞いたんだけど。

唯先輩がよく分かってないようなので質問した。まあ私も知らないんだけど。

「しゅーていんぐあーつつてなに？　美味しいの？」

「まあ、格闘技の一つですかね。早く人数集めないと部として成立しませんから、これで失礼します」

「おう、頑張れよ。四人集まる事を祈ってるぞ。あ、あと軽音部に入りたいときはいつでもここに来いよ。歓迎するから」

「ああ、今年からは五人以上じゃないと部として成立しないそうですよ？　では失礼します」

ギンガは部室を去っていった。律先輩がジッと私を見た。

「な、何ですか？」

「梓が入ってくれてよかったー！！」

「にゃ！」

律先輩がいきなり抱擁してきた。驚いたけど律先輩の言葉が少し嬉しかったのは内緒。

☆

朝のHRが終わり、一時間目が始まろうとするその時、静かな一日が終わりを告げた。

『ころ せ え え え え え え え え え ！ ！  
！ ！』

Fクラスの怒号が響き渡る。一人の生徒が走り去るとそれを追うようにドドドドドドドと大きな音をたてて走り回る。  
足音からして相当の数だ。

『いたぞ！ 吉井だ！ 空き教室に向かったぞ！』

『おk！ B部隊は正面から、C部隊は逆側から回って挟み撃ちにするんだ！』

『応っ！』

妙なやり取りをしながら走る男子生徒。

「貴方達！ 廊下で走るのはやめなさい！」

よく通る声が廊下に響く。目を血走らせながら疾走する男子生徒達がピタッと止まった。

彼らを呼び止めたのは一人の女子生徒だった。

『おい、呼ばれたぞ』

『お前だろ、お前がうるさくするから注意されてんだろ』

『いやお前だろ。いつもいつもうるさくしやがって。周りの迷惑も考えてみる』

『ああそうか、多分俺だ。この子に告白されるんだ』

『『この野郎！ 殺してやる！！』』

『貴方達全員に言ってるのよ！』

『『そんな馬鹿な！！！！』』

冗談抜きで意外そうな顔をしている男子生徒達に呆れたように溜息をついた。

「あなた達はFクラスの生徒ね！ 進級早々戦争を起こして、終わった後でもこんなにうるさくするなんて！

他の人の事を考えてみたらどうなの！？ 皆これから授業だから迷惑なのよ！ 少しは周りの事を考えなさい！

……って、なんで貴方達は正座してるのかしら？」

その女子生徒はいつの間にか説教食らっている男子生徒達が正座をしているのに気が付いた。なんかシュールな光景である。

『『すみませんでした』』

「え？ そ、そう？ わ、分かればいいのよ。次からは気をつけなさい。学校の風紀にも関わるんだから」

突然声を揃えて謝るのを見て女子生徒は一瞬面を喰らったが、すぐに気を取り直した。

そのまま男子生徒達は立ち上がってその場を去っていった。

『やべえ……高校生になってから初めて女子から話しかけられたぜ……！！』

『もしかして、俺にも春が来たのか……!?!?』

『というか、さっきの子結構可愛くなかったか!?!?』

うん、只注意されていただけというのは彼らの頭から弾きだされているようですね。

男子生徒達がピンク色の妄想に入りかけたその時、

『ほう……。吉井抹殺という任務中に他のクラスの女子にナンパとは……恐れ入る』

『はは、ナンパだなんて。寧ろあっちから話しかけてきたぜ? ……  
…って、え?』

途端にむさ苦しくなったので周りを見渡すと、Fクラスの男子に囲われていた。

『同士諸君。我々は裏切り者への制裁が必要だと思うのだ。異論はあるか?』

『『『『異議なし』』』』

『よろしい』

『ちょ、ちょっと待てよ! まず吉井の抹殺が先だろ? ……  
ところで油売っている暇あんのかよ!』

『『そ、そうだそうだ!』』

一人が弁明（話を逸らすとも言おう）し、他の二人も同調する。それに対して、先頭の男が理解あるように頷く。

『分かっている。我々はクソ羨ましい吉井を抹殺するという非常に重大な使命があるのは重々承知している。しかし———』

『『し、しかし?』』』

肩がフルフルと震えている。そして感情を爆発させるように拳を振り上げた。

『その前に、その任務中に女の子と話をしていたお前らをボコさずにはいられないんだよおおおおお!!!』

『『『『コロセエエエエエエエ!!!』』』』』  
『『ギャアアアアアア!!!』』』

悲鳴や怒号が響き渡った。さっきの男子生徒は引きづられていった。

「本っ当に、風紀がなってないクラスね……」

さっきの女子生徒はそれを見て、溜息をついた。

その女子生徒の名前は古手川 唯。Bクラスの生徒だ。唯が再度注意をしようとしたが、後ろからの声に立ち止った。

「古手川さん、もうすぐ授業だよ?」

「あ、うん。ありがとう西連寺さん」

唯を呼んだのは西連寺 春菜。唯と同じくBクラス所属だ。

☆

「はい。計四人とのことです」

「で? この時期に転校だなんてどういう事だい?」

高橋女史の報告を聞いて学園長が面倒くさそうに首を回す。高橋女史は気にせず続けた。

「その内の二人はグリーン・オアシスからくるそうで。宇宙コロニ



ーからなので日数がかかるということです。

後の二人は、本人達との連絡が取れたのが今日だったので、ということです」

「宇宙から来るのか……面倒なことにならないければいいが。で、肝心のそいつらは？」

「それがですね、今日は学園長が遅く来られたので、変わって教頭先生が挨拶をしたのですが――」

高橋女史は溜息をついた。

☆

ある時間の教頭室？――

「二人とも聞いているよ。ようこそ我が学園へ。この文月学園は君達を歓迎するよ」

「「ありがとうございます」」

会釈をする二人の生徒。片方は新品の制服が輝いている。もう片方は何故か私服のままだ。

「この学園の事は知っているね？ 一応パンフレット通りのことだが」

「はい。ここに来る前に全部読んでおきました」

「それは良かった。具体的な説明は後日順を追って説明しよう。しかし驚いたね――」

教頭は片方のプロフィール用紙を見て、ほくそ笑んだ。

「女子生徒が二人来るかと思ったよ。手違いで写真が無くなってし

まってね、顔が分からなかったんだ。

それで名前だけしか聞いてなくて、女性物の制服を間違えて発注してしまったよ」

私服の男子生徒の方は額に欠陥を浮かべた。そして教頭の方に歩み寄った。

「まあ新しい制服も明日には――どうしたのかね？」

男子生徒が近づいてきたことによりやく気付いた教頭相手に、男子生徒は踏み込んだ。

「カミィユが男の名前で、何で悪いんだ！ 俺は男だよ！」

勢いのままにカミィユと名乗った男子生徒は拳を思いっきり突き出した。教頭はのけぞって倒れた。

☆

ある時間の教頭室？――

「二人とも聞いているよ。ようこそ我が学園へ。この文月学園は君達を歓迎するよ」

「ありがとうございます」

「感謝します」

会釈する二人。今度は両方新品の制服を着ている。何故か教頭は顔に包帯を巻いている。

「この学園の事は知っているね？ 一応パンフレット通りのことだ

が」

「はい。ここに来る前に全部読んでおきました」

「それは良かった。具体的な説明は後日順を追って説明しよう。しかし驚いたね――」

教頭は片方のプロフィール用紙を見て、ほくそ笑んだ。男子生徒の方は目を細める。

「君はあの千鳥外交官の娘かな？ 名前を見てピンと来たが、どこか――」

「動くな」

手を捻られ、床に伏せられた。起き上がろうとしたが腕を抑えられていて動けない。

「な、なにをするのかね!？」

「動くなと言っている」

ゴリツといやな金属の感触が側頭部につく。

「どういうつもりで彼女に近寄った？ 何の意図がある？ ここで吐かなければお前の親類縁者が只ではすまないぞ――」

「只では済まないのは、アンタよっ!!」

パシィィンツと軽快な音が響き渡って、男子生徒は千鳥と呼ばれた女子生徒のハリセンで吹き飛ばされた。

☆

学園長は資料をくまなく見る。

「グリーン・オアシスからカミュー・ビダンとファ・ユイリィ。そして陣代高校から相良宗介と千鳥かなめ……ね。

この四人でいいのかい？」

「ええ」

「で、いきなり教頭に暴行を働いた、ってことかい」

「……そうです。処分はどうしますか？」

高橋女史は困ったように溜息をつく。学園長も頭をかいいた。

「とりあえずこの時期に来られても振り分け試験は受けさせられないね。ヤマトの小僧と同じく全員Fクラス行きだ。

あと、暴行を振るったのはどれかい？」

「男子二人です。女子の方が謝りに来ましたが」

「ハン、転校早々、教師に喧嘩売るなんて舐められたもんだ。なら、こっちもそれなりの態度を取らせてもらうだけだ」

学園長がPCを開き、キーボードを叩いて何かを打ち込んだ。

【以下の物を、文月学園指定《観察処分者》として認定する――

――カミュー・ビダン、相良宗介】

番外編く遊びでやってるんじゃないんだよ！↑超遊びですが何か？↓（後書き）

というわけでキラの観察処分者の話とリクエストキャラ加入話でした。リクエストしてくれた方々、本当にありがとうございます。後日改めてキャラ紹介を纏めてみようと思います。

・キラの観察処分者認定

軍隊なら監禁物ですね。しかし明久の存在を完全に食ってしまった気がしてならん^^；

・梓登場、ギンガ登場

中野 梓は予告通りです。梓ちゃんは素直でいい子ですね。弄られキャラとしての扱いを受けていますが、それが小さくて可愛い彼女の魅力を一層引き立てます。

彼女のおかげで後輩キャラが出しやすくなってたまらん。梓ちゃんは本当にいい子だ。勿論純も出ますよ。

ギンガはハッスル000氏からのリクエストキャラです。正直年齢が曖昧だけど、なのはさんたちと一歳違いで合ってるかな？

原作ではあまり出番がなかったキャラなのでいじり甲斐のあるキャラですね。スバルが出しにくいのが難点ですけど。

ぶっちゃけ言うとなのはさん達よりスバル達のほうが遥かに動かしやすいです。こっちをメインにするべきだったか……？

つーかなのはさん達って精神年齢高過ぎてなんかやり辛いんだよねえ。

出来る限り後輩キャラも試召戦争に駆り出したいけどどうしたらいいんだろう？

関係ないけどリリカルなのはのキャラで一番好きなのはエリオです。ショタな彼もいいが成長した彼もかつこいいよ。

普通なら主人公でもおかしくないキャラだけど、魔法少女物ではな

あ……。

・T O L o v eるキャラ登場

アルベルナ氏からのリクエストキャラとして古手川 唯と西連寺 春菜です。リトや宇宙人はでねえぞ！ 期待すんなよ！

個人的にはT O L o v eるで一番好きなのは春菜ちゃんだったり。唯ちゃんはツンツンしてる方が可愛いと思うのだ。

しかし春菜ちゃんはダークネスではララと一緒にメインヒロインから失脚してるけどね。唯には出番あるのに、これが人気の差か……。だけど、春菜ちゃんだけだとキャラが薄いので後で必ずお静ちゃんも出します。ぶっちゃけリトとかいなくても

マロンとお静ちゃんがいれば彼女は引き立てられると思うのだ。唯は一人でも充分キャラ立ってるけどね（テンプレくさいが）。

学力的にはBクラスで。Cでもよかったけど唯（けいおんの方）や律と差別化したかったのだ。

関係ないけどさいれんじって打つ時“にしれんてら”でやっています。

・機動戦士Zガンダムキャラ登場

ヒヤハー！！これ wait していたアアアアア！正直この小説を書くとき最初に出すかどうか迷ったキャラでした↑シーブック、カミーユ等

でもキラがいるから充分かなあ、と思ってたけどk o u氏からリクエストがきたから出すしかないじゃないかと。

因みにアムロは無理です。シャアもだけど戦っている姿が一番カッコいいから。学生より戦士であってほしい、と。逆シャアの老成したアムロが一番好きです。

正直シーブックかカミーユか迷ったけど、個性の件でカミーユにした。いや、シーブックも個性豊かな良いキャラですよ？

ただ、キンケドゥのかっこよさで……奇跡を見せてやろうじゃないか！！ かっこよすぎ濡れた。今では私的にシーブック<キンケド

ウです。

何？ シーブックはリクにいない？ 好きなんだよ言わせんな恥ずかしい

あと同じくリクエストにはなかったけどファも出しました。彼女がいないと誰がカミーユのストッパー役をやるんだよ。

関係ないけどZで一番好きなキャラはやザン・ゲールです。大尉のあの強さはマジ堪らん！ 悪の教師の見本だよ！

でも出せない……ジャンルが違いすぎる……ハンブラビ最高……  
ー！！ 勿論ギャプランも好きだよ！

・フルメタル・パニックキャラ登場

またもkou氏からのリクエスト。本当にこのシリーズのキャラは学園物だと汎用性が高い。さすが。特に言う事もないかな？

宗介はラノベの主人公の中ではかなり珍しく個性溢れるキャラでいいですね。かつこよさもあって良い主人公ですね。

ウィスパードとニュータイプのコラボとかやってみたいです。

関係ないけど一番好きなのはガウルンです。彼の為だけにTSRのDVDを最終巻だけ買ったわ。あとコダールシリーズのデザイン手がけた人はマジで神。

プラモは無理だな……早くロボ魂でコダールi（アニメ版）発売しろー！ 間に合わなくなっても知らんぞー！

それではまた。三年どうしよう……

## 新約・キャラ紹介（前書き）

・ハマーン戦から抜粋

カ「お前は、戦いを生み出す源だ！ 生かしてはおけない！」

←

カ「やめろ！ 僕たちは、分かり合えるかもしれないだろ！？」

←

カ「わかった……！ お前は生きてはいけない人間なんだ……！」

カミュー最高です。



## 新約・キャラ紹介

・Fクラス

キラ・ヤマト（機動戦士ガンダムSEEDシリーズ） 16歳  
機動戦士ガンダムSEEDの主人公。最高のコーディネイターの唯一の成功体。

前大戦でフリーダムガンダムに乗って戦争終結に尽力した伝説のパイロット。

戦争が終わった後、心を癒そうと平和な生活に戻ろうとした彼に対して、エリカ・シモンズの紹介により文月学園にきた。

元々工業カレッジの生徒だった上に最前線で最新鋭機を乗り回していた上に整備などもしていたので、

理系分野は教師よりも遥かに高い点数を誇る。代わりに国語系（特に古文）と日本史の点数は微妙。

身体能力は非常に高く、今作では戦闘能力は最も高い。

日本に来るのが振り分け試験よりも遅かった為、点数なしでFクラス行きが決定した。Fクラスの中核戦力。

表向きにはBクラス戦で問題行動を起こしたとして観察処分者に認定されている。

SEEDと言う特殊能力を持っている。

枢木スザク（コードギアス 反逆のルルーシュシリーズ） 16歳  
内閣総理大臣・枢木ゲンブの嫡子。温厚で生真面目な性格であるが、“生きる”ギアスで暴走することがある。

ルルーシュとナナリーとは小さい頃からの幼馴染で、彼らを大事にしている。

高い身体能力を誇り、運動神経も抜群。しかし学業はそれほど高くない。

それどころか国語、日本史、保健体育以外は明久以下と言う悲惨な成績を持つ。

実はブリタニアのユーフェミア皇女と一定以上の関係を持っているが、F F F団にはばれないように隠している。

紅月カレン（コードギアス 反逆のルルーシュシリーズ） 16歳  
Fクラスの数少ない女子生徒。瑞希と並んで美波の天敵（主に身体の一部のせい）。兄ナオトと二人暮らし。

元々ブリタニアの留学生だった為カレン・シュタットフェルトを名乗っていたが、二年になってこちらに変えた。理由は後述。

彼女も高い身体能力を持ち、スザクにも引けを取らない。学業の方も低くはない。

しかし一年の頃ある理由で欠席気味で、留年は免れたものの授業に出なかった事が災いし、振り分け試験の結果は散々なもの。

一年の頃と二年の頃とでは彼女のギャップが大きく違う為、戸惑う者も多い。

原作と違ってルルーシュがゼロをやらない為、彼とのフラグが立たない。どうすればいいか検証中。

見ている皆さん、教えてください（別の奴のとフラグでもいいんで）。因みに作者の中では一番活躍させ易い女性キャラかもしれん。恋愛は知らね。

相良宗介（フルメタル・パニックシリーズ） 18歳

フルメタル・パニックの主人公。今作では『ずっとスタンド・バイ・ミー』の後からの登場である。故に他より年上でもある。

陣代高校を休学していたことになっている。元々偽学生だったが、そこは陣代高校が配慮してくれたらしい。

武器を捨てる宣言はしたが、情勢が情勢なのでまだ完全に『普通の男』に戻っていない。ミスリルに所属、というわけではない。

というか彼が普通の人間になったら色々困るんだが……戦う彼が一

番かっこいいのに。

戦争ボケは相変わらず。戦闘技術は非常に高い水準を誇る。肉体には過去の負傷で欠陥があり、食事に制約があるらしい。

学業は相変わらず日本史、国語が絶望的。英語以外はそれなりに行けるレベル。

転校早々問題行動を起こしたため、観察処分者に認定されている。

キラの前大戦の素性を知ってたりする（出生関連の正体は知らない）。因みに童貞ではない可能性が高い。

千鳥かなめ（フルメタル・パニックシリーズ） 18歳

Fクラスの数少ない女子。相変わらぬ突っ込みが炸裂する。世界で唯一の“ウイスパリング”。

かつての戦いで内に宿る『ソフィア』が引っ込み、交信できなくなっている。それ以来彼女とは全く“共振”出来ていないらしい。

今はウイスパードの力が発揮できない。（下手に呼びだすと廃人になる上、彼女に何の得もないからやらないが）

学力は普通に優秀な部類だが、ウイスパードの力が無くなり、情報も制限されている為、特別すごいわけではない。

ウイスパードの能力に覚醒する前の彼女だと思えばわかりやすいと思う。本人も「気味が悪い」と敬遠していたので問題ない。

因みに本人は「なんか二留してるみたいで微妙」と思っている。ヒロインというより最早女主人公と呼べそうな行動力と度胸を持っていますね彼女は。

カミーユ・ビダン（機動戦士Zガンダム） 17歳

機動戦士Zガンダムの主人公。最高のニュータイプ。宇宙コロニー・サイド7（グリーン・ノア）からやってきた。

両親の転勤ということで地球の日本に降りてきた。実は出生地が東京近郊だったりするのは裏設定。

原作と違い両親は死んでいないが、どちらも仕事優先で家庭の事

を顧みないので強い不満を持っている。

「カミーユ」という名前が女性的なので、空手部に所属したりするなど「男性的」な趣味に傾倒している。

劣等感と家庭環境も併せて、非常に繊細で感情の起伏が激しい性格に育つ。一方で生活能力に乏しく、

幼馴染みの少女ファ・ユイリィに依存する所が大きい。彼女と一緒に来てもらったのもその節が強いかもしれない。

原作ではZガンダムを設計していたから頭はいいかと思うだろうが実はそう言う事はなく、実は全体から見ても平均以下。

国語に限れば美波に毛が生えたレベル。見た目と違いそんなに模範的な生徒でもない。

宗介同様転校早々問題行動を起こし、観察処分者に認定されている。実は前大戦中に精神疾患で病院に運ばれた事がある。これはヤキン・ドゥーエ戦役によって大勢の命が散っていき、

彼がそれを敏感に感じ過ぎてしまった為と思われる。もし彼が戦場にいれば精神崩壊は間違いなかっただろう。

ファ・ユイリィ (機動戦士Zガンダム) 17歳

Fクラスの数少ない女子。カミーユと共にサイド7からやってきた。こちらはカミーユとは違って模範的な生徒。小さな子供の世話が得意だったりする。

学力は全体の中の上くらい。しかしカミーユと同じで国語が不得意。外国語は英語よりも中国語の方が得意だったりする。

原作ではカミーユに近づく女性に対しては嫉妬心を露わにする場面が多々あり、バカテスにとって美味しい設定でもある為、

気丈な振る舞いもできて献身的だった原作に比べて暴力的な(カミーユにだけ)面も追加されてある。

あと新約Zでの彼女は間違いなく勝ち組。ジャッジメントですの！しかし本編ではヒロインのはずなのに彼女の影は薄いな……周りが濃過ぎるだけかもしれないが。

・Aクラス

ルルーシュ・ランペルージ（コードギアス 反逆のルルーシュシリーズ）

コードギアスシリーズの主人公。シスコン。ナナリーとロロと三人暮らし。

彼の正体は元ブリタニア皇子で、今はその名を捨てている。ナナリーと共に人質として日本に送られた。

……しかしヤキン・ドゥーエ戦役によりその存在も忘れられ、更に人質として彼らを送った皇帝シャルルが失踪したので、本国からは完全に忘れられてしまった。彼らの素性を知っているのはスザクとミレイのみである。

学業はトップレベルで、本校では霧島翔子と同じく一位。代表は初の男女一人ずつと言う事になっている。

運動能力は並で、体力は無い方。長身美形で、非常にもてる。一日に三十人の女性とデートしたという伝説があったりする。ギアスと言う力を持っている。

アスラン・ザラ（機動戦士ガンダムSEEDシリーズ）

キラの幼馴染。一人暮らし。ほぼキラに付き添う形でこの学校に来た。典型的な優等生タイプ。

前大戦での関係上、名前はアレックス・ディノと名乗っているが、キラは普通にアスランと呼ぶ。

元ザフトのトップエリートだけあって身体能力は高い。学業も万遍なく高い。二年では五本指に入るほど。

彼も非常にもてる。ルルーシュと肩を並べるほど。この二人はFF F団では危険視されている。

今作では少し影が薄いかもしれない。彼もSEEDを持っている。

高町なのは（魔法少女リリカルなのはシリーズ）  
リリカルなのはシリーズの主人公。自宅から電車で通っている。サイドテールの少女。

Sランク魔導士で、いつも相棒レイジングハートと一緒に。原作と違い、高校生である。中卒ではない。

しかしすでに時空管理局から強く勧誘されている。

学力はAクラス相応に高い。運動能力も鍛えている為低くはない。足は意外と遅い。

過去に生死の境目を迷うほどの大怪我を負っている。少し原作とは違うシチュエーションである。詳しくは後ほど。

フェイト・T・ハラオウン（魔法少女リリカルなのはシリーズ）  
なのはの幼馴染。彼女とは九歳からの付き合い。美しい金色の長髪を持つ美少女。

彼女もSランク魔導士であり、相棒バルディッシュと共に行動している。彼女も時空（ry

学力はAクラス相応、特に英語は非常に高い。身体能力は非常に高い。

優れた容姿と優しい性格の為、告白が毎日のように来る。

八神はやて（魔法少女リリカルなのはシリーズ）

なのは、フェイトの幼馴染。同じく九歳からの付き合い。ヴォルケンリッター三人と一匹と暮らしている。

彼女はSランク魔導士で（ry

Aクラスにいたので学力も高い。今では普通に立てる。

アリサ・バニングス（魔法少女リリカルなのはシリーズ）

同じくなのは達との幼馴染でなのは達とは九歳からの付き合い。大の犬好きで自宅では10匹もの犬を飼っている。

日本で起業したアメリカ人実業家の両親を持つお嬢様でかなり気が

強い。友達思いだが素直になれない性分である。

成績が非常に優秀。実は親の企業が文月学園のスポンサーをやったりする。両親は旧アメリカ、現神聖ブリタニア帝国にいる。

通学手段が送り迎えだったりする。バニングス家の執事兼専属運転手の鯨島が、アリサの登下校の送り迎えを行う。

月村　すずか　（魔法少女リリカルなのはシリーズ）

同じくなのは達との幼馴染でなのは達とは九歳からの付き合い。アリサとは正反対に大の猫好きで猫を何匹も飼っている。

資産家の娘で大きな屋敷に姉やメイド達と共に暮らしている。大人しく引っ込み思案な性格だが運動神経は抜群で、

その実力はスザクやカレンにも引けを取らないくらい高い水準を誇る。成績も非常に優秀。

秋山　澪　（けいおん！シリーズ）

大人びたルックスや姉御口調とは裏腹に、人見知りが激しく寂しがり屋で、痛い話題や怖い話題が苦手な繊細な性格。

ロマンチックかつ甘々なセンスを持つ。部活ではリーダーシップを発揮することも多々あり。性格の関係で友達はやや少なかった。

成績は優秀で教えるのも得意でスポーツも万能。かなりスペックが高く、ファンクラブができるほどの高い人気を持っている。

【もてそうな女子『同性愛編』】ランキングNo.1という名誉なのかそうでないのかよくわからない称号を持つ。

男子を恐れている節がある。彼女のパンツ写真が裏では高額で出回っているらしい。勿論皆のムツツリ商会です。

琴吹　紬　（けいおん！シリーズ）

大企業の社長令嬢。性格はおっとりとして温厚。「ムギ」という愛称で呼ばれることが多い。

積極的な好奇心旺盛な一面もあり、予定を切り上げてまでも友達と

遊ぶことを何よりも優先する。

自分の家柄を鼻に掛けることはしないが、お嬢様育ちゆえの価値観のずれから他の部員達を驚かせることもある。

成績は滞と同じぐらい優秀で、腕力があったり様々な知識を持っていたりと、かなりハイスペック。

他のメンバーより一步引いた位置から見守り、唯達とのやり取り楽しんでる。

人氣が控えめだけど、こういう子がいるから物語が面白くなるんだなあ、と思える子である。

因みに琴吹グループは戦争が終わったことによって出来た不景氣をいかに立ちまわるか忙しい他の企業とは違って、

元々軍需産業に頼っていなかった為素早く持ち直したそうだ。アリサやすずかとは個人的な交流があったりする。

真鍋 和 (けいおん! シリーズ)

唯の幼馴染。唯とは対照的に冷静かつ理知的な性格で、運動も人並み以上にでき、料理などの家事も得意と、好人物である。

どこか微妙にズレた感性をもっており、方向音痴だったり、スルー力が非常に高かったりする。

つーか生徒会がないと「そうなんだ、じゃあ私生徒会行くね」が言わせられないんだが……

・Bクラス

西連寺 春菜 (TO LOVEる 一とらぶる一)

慎ましくおしとやかな性格の美少女。ショートヘアの前髪を2つのヘアピンで留めている。

普段の態度は控えめで、強く自己主張することはあまりなく、友人たちの中では一歩下がって相手を立てることが多いが、

幼い頃によく父親に言われた「悩むくらいなら行動しなさい」とい



う言葉の影響からか、リーダーシップも兼ね備えており、いざという時に頼れる芯のしっかりした少女である。それを悪い方向に誤解して根に持つようなことはしない寛容さ、他者の行動の意味を正しく洞察しようとする聡明さ、誰に対しても分け隔てなく優しく接する愛情深さ、時には自分の身を挺<sup>て</sup>してでも周囲の人間を守ろうとする勇気も併せ持っており、クラスからの人望も厚い。学業成績も良く、Bクラスでは二番目。根本がよく思われていない為、寧ろ彼女の方が代表に相応しいと思うクラスメートもいる。テニス部所属。幽霊の類が大の苦手で、恐怖が極限に達すると暴れ出すという癖があり、凄まじい馬鹿力を発揮する。因みに原作と違ってリト不在の為恋愛関連ではまだ未経験である。

古手川 唯 (To LOVEる 一とらぶる一)

髪型は黒のロングの美少女。

学校の風紀に厳しく、秩序を乱すものを許さない理性中心の思考をするガチガチの堅物少女。

美少女と呼んでいい外見だが、ほとんど気難しい表情しか見せず、明るく柔和な笑顔で人に接することが滅多にない。

生真面目で誠実な性格で、基本的には正論を主張しながらも、その活動ぶりが秩序と規律に関して妥協を許さない徹底したもの。

上記の理由で毎回騒ぎを起こすFクラス男子を目の敵のように見ている。彼らを厳しく注意、説教することがよくある。

しかし彼らにとって「注意されたこと」よりも「女子に話しかけられたこと」の方が重要になってしまい、空回りになりがち。

律達軽音部からは「真面目な唯」と呼ばれている。勿論リト不在の為彼女も恋愛は未経験。

的目あげる (To LOVEる 一とらぶる一)

今期生最高の成績を誇る生徒。実力はあの霧島翔子すら上回る天才

中の天才。

総合科目では5000点超という驚くべき結果を出すはずだった。しかし、振り分け試験で体調を崩し、いつも通りの成績を出すことができなかった

万全でない状態でBクラス上位である。驚くべき結果であるが、その時の状況をあまり知られていないので、

彼の能力を知る者はいない。あるいは彼が意図的に隠したのかもしれない。

スポーツも万全、しかし頭角を現すのはここではないと運動部には所属していない。

経歴等は一切不明。誰一人として知る由もない。

そして彼のカリスマは、一度発揮するとあらゆる人種関係なくまとめ上げることができるという。

その手腕が発揮された時、一体何が起こるのか……貴方も想像してみるといい。きっと面白いことになるだろう。

#### ・Cクラス

平沢 唯（けいおん！シリーズ）

けいおん！の主人公。おつちよこちよいな天然ドジっ娘で子供っぽい。普段はぼーっとしていることが多く、

のんびり屋でほわわんとした性格。嬉しい事は顔に出やすい素直なところがあるが、見栄っ張りな所もある。

悪気もないドジをやらすが、皆から憎めない存在でもあり、他人を思いやれる純粋で優しい面もある。

学業面ではFクラス並の時もあればAクラスを凌駕することもある。これは彼女の集中力のなせる業である。Cクラスでは中核戦力。

教科が不規則なムツツリーニと思えばわかりやすいだろう。故に奇襲・闇打ち能力が非常に高い。

絶対音感と相対音感を兼ねた才能の持ち主で、音楽面、学業面等も

天才肌。一種の天才だと作者は解釈している。

基本的に運動音痴。ギー太が大好き。ニュータイプに近い能力が見られることもしばしば。一時期宇宙で生活していた経歴がある。

田井中 律 (けいおん！シリーズ)

茶色の前下がりがショートカットにカチューシャをし、おでこを出している女の子。「りっちゃん」という愛称で呼ばれている。

軽音部では部長で、振る舞いはストリートかつ大雑把で豪快。とても社交的な性格で部内の空気を明るく盛り上げることもあれば、周囲への細やかな気配りも忘れず、軽音楽部のことをちゃんと考える部長らしい一面も見せる。普段は結構いい加減。

苦手科目は「体育以外」の勉強全般だが、濡に教えてもらえている為クラスの成績は維持している。

・後輩

中野 梓 (けいおん！シリーズ)

小柄な体格でやや青みがかった黒髪のロングツインテールの女の子。唯から「あずにゃん」と呼ばれ、良く抱きつかれている。

今後の活躍は考案中。出来るだけ活躍させてあげたいです。

平沢 憂 (けいおん！シリーズ)

唯の妹。姉の唯とは対照的に、真面目で礼儀正しい性格。姉妹仲は「溺愛」と言って差し支えないほど極めて良好。

ギンガ・ナカジマ (魔法少女リリカルなのはシリーズ)

青いロングが特徴的な女の子。梓と同じクラスで友人。妹のスバルがいるせいか、少し大人びている。正体は戦闘機人。

シューティングアーツ部を設立、部員募集中。

（細かい設定）

・S・E・E・D・

Superior Evolutionary Element  
Destined-factor（優れた種への進化の要素である  
ことを運命付けられた因子）の略称。

かつて一度だけ学会誌に発表され議論を呼んだ概念。その後の詳細は不明。

今作ではキラとアスランのみ持っている特殊能力。現在使いこなせるのはキラ・ヤマトのみ。

発現すると目から光が消え、頭脳や身体能力などの全般的な能力が向上する、視界がクリアになる、冷静になるなど、色んな副作用があるが、特に人体への害はない。召喚獣にもこの能力が付随する。

ギアスの力を完全に遮断する効果もある。「進化の力」が「王の力」を超える為かも知れない。

・ギアス

「王の力」と呼ばれる他者の思考に干渉する特殊能力。ルルーシュのギアスの効果は「絶対遵守の力」。

発動の際には左目に紋様が浮かび上がる。特殊な光情報を伝って命令をダイレクトに相手の大腦に刻みつけることにより、いかなる命令にもいくつかの制限に縛られる事が無い限りは一度だけ従わせることができる。二度は効かない。

召喚獣にもこの能力が使える。しかし本体と違い、様々な制約がある。

1. 簡単な命令しか使えない（高度な命令は情報処理が追いつかない為）

2. 人↓召喚獣は不可能。その逆も勿論不可能。

3. 点数で負けていると全く効果が無い。勝っていても点数が近い

とその分だけ効果が薄い。

逆に点数が大幅に勝っていると効果は絶大。目安として一科目百点差なら自在に操れる。

4・一度の召喚に対して使えるのは一人につき一度のみ。逆に言うなら召喚し直せばまた同じ相手に使える。

以下のとおりである。特にルールシユの学力ならば3が非常に優秀なアドバンテージになる。

・身体を通して出る力

バイオセンサーのオーバードとニュータイプ能力が共鳴し、初めて発現する能力。

近くで戦死者（点数0、敵味方問わず）が出ると召喚獣が共鳴し、赤いオーラを放出する。

攻撃力、射程が格段に上がり、攻撃を受けても怯まなくなる（ダメージはきっちり受ける）。

非常に強力な能力だが、欠点としてリバウンドがあり、使いすぎるとその召喚獣は全く動けなくなる。

もう一度召喚し直さない限り動かせない。そこは味方に助けてもらおう。

現時点ではカミーユ・ビダンのみ扱う事が出来る。

上で挙げた能力は、一定以上の点数獲得の際の腕輪の特殊能力とは全く別物である。要するに彼らだけの専売特許なのだ。

くちよこつと蛇足く

英語力（外国語力）

・ペラペラに話せる

キラ・ヤマト※

アスラン・ザラ※

ルルーシュ・ランペルージ※

相良宗介※

千鳥かなめ（多少不自由がある程度）

カミィユ・ビダン（但し日本語の方が不自由がある）

ファ・ユイリィ（上記と同じ。どちらかというと中国語寄り）  
フェイト・T・ハラオウン

※がついてる者たちは数国語喋れます。

・読み書きくらいは

紅月カレン

琴吹紬

それ以外はどっこいどっこい。

## 新約・キャラ紹介（後書き）

途中追加＋リクエストキャラも追加してみました。他のリクエストキャラも今後反映すると思います。

因みにリクキャラで優先的に決めたキャラは Z＞To Love  
る＞フルメタ だったりします。

少しTo Loveのキャラを忘れてるかもしれないので復習してきますへへ；

無理矢理感が半端ないけどすみません、これが自分の限界です。

## 12話〈ACE…Rでやれ〉（前書き）

どもーこんにちわー！ 部長の田井中律です！ 初めましての人は初めましてー！ 前書き乗っ取ってすいませーん！

私達けいおん部は日々の練習に明け暮れています！ たまーに休憩にお茶やってまーす！ ほ、本当に“たまーに”だよ！

今年から部活五人制になったけど、梓が入部してくれたおかげで廃部の危機にならなかったー！ よかったー！

この学校、学園祭が一学期にあるから、ライブの練習も早くからしないとな。

そうそう、去年のライブでは濤の奴が一躍スターになったの知ってるか？ あれで男子にも女子にも大人気になったんだぜ！

ファンクラブもできちゃってさー、もうしっとしちやう！ なーんてな！

で、ライブの練習なんだけど……放課後ミツチリやらないといけないんだけどよお……

そんな大切な時期に何でこんなことやってんだよおー！ ウチのクラスはあー！



## 12話〈ACE…Rでやれ〉

『早くFクラスを抑えろ！　今はあいつ等は主戦力が消耗してるからチャンスだ！』

『雑魚はさっさと片付けろ！』

攻めてくるCクラスと追い立てられるFクラスの構図が廊下に来る。

「すまん！　これ以上は無理だ！　撤退する！」

「おい、こっちももう無理だ！」

「点数が足りない！」

「右翼がもう持たないぞ！」

次々と悲鳴に近い報告が来る。キラが汗だくになって指示を飛ばす。

「点数が足りない人は今すぐに補充テストを！　ここは残存部隊で食い止める！」

スザク！　崩れかけてる右翼に何人か部隊を送って持たせるんだ！

「わかってるけど、こっちももう手一杯だ！　そっちに戦力はないのか！？」

「悪いけど、こっちももう戦線を保つだけでギリギリの状態なんだ！」

必死の攻防を繰り返しているFクラス。

実はAクラス戦の次の日、Cクラスが突如宣戦布告してきたのだ。

『私達Cクラスは、Fクラスに宣戦を布告します！　逃げるんじゃない』

ないわよ!』

Cクラス代表の小山友香はそう言って去っていった。

困ったのはFクラス。昨日の時点ではあの後何もせずに帰った。なのでテストを受けていない。

一騎打ちだったからよかったものの、瑞希の総合科目とムツツリーニの保健体育、スザクの古典という、Fクラスの主戦力が悉く衰えてる。カレンの世界史とスザクの古典は0になっている。ダメージが比較的少ないキラが前線を保つように言われた。それ自体は問題じゃない。

だが、相手はキラがそこまで高得点を取れていない国語を中心に攻めてきている。かなり分が悪い。

すぐさまキラは前線メンバーの構成に当たった。遊撃能力の高いスザクとカレンを引っ張り出した。

保健体育のないムツツリーニは戦力外、瑞希は最後の砦、他は似たり寄ったり……戦力ではCクラスの方が圧倒的に上だからきつい。これ以上国語で攻められたら、持たない――

「今から撤退する人は英語の教師を呼び続けて! 援軍の要請も!」  
『分かった! 出来るだけ早くやる! 必ず生きてろ!』

何人かがそう言って走り去る。追撃しようとする敵に牽制する。

「キラ!」

「何!」

「アンタ今点数どのくらい残ってる!?!」

「もうすぐ古典と現代国語が三桁切る! かなり苦しい!」

「スザクは!」

「こっちも結構きつい! 古典がいつもより点数が無いから動きにくい!」

一生懸命三人で叫びまくるように報告し合う。  
今の戦場は国語教科中心に回っている。現代国語、古典、漢文だ。  
順にスザク、カレン、キラで支えている状態が続いてる。  
勿論交互に変わっているが、それもそろそろきつくなってきた。

『相手は消耗してきた！ そろそろだぞ！』

『平沢はまだか！ もう投入してもいいぞ！』

「お、お待たせ」

Cクラスに何か動きがあったみたいなのでそちらを見ると、茶髪の少女が一人走り込んできた。

「え、えーっと、試獣<sup>サモン</sup>召喚っ」

何やら気の抜けそうな声で召喚獣を呼び出した。

『Cクラス 平沢 唯 VS Fクラス キラ・ヤマト  
現代国語 455点 101点』

三人とも驚愕しました。4倍以上とか……ねーよ。

「いいっ!？」

「はあっ!？ 何あの点数!？ 本当にCクラス!？」

「ここで切り札を使ってくるか……!」

「カレン！ スザク！ 君たちは周りの人たちを食い止めるんだ！  
彼女は、えっと、平沢さんは僕が止める!」

「いや、待ちなさいよ！ 点数が違い過ぎるじゃない!」

「やらないと全滅する！ 姫路さんでも対抗できるかどうかかわからない点数だから、ここで釘づけにしないと!」

「……わかった！ 無理なら替る」

「ありがとう！ あまり当てにはしないけど。じゃあ、また後で会おう！」

三人は散開した。キラの目の前に唯がいる。

（さて……で、どうやって対処すればいいんだ？）

キラは内心頭を抱えたくなっていた。

点数でも数でも負けている以上圧倒的に不利だが、既に自分達三人以外は戦闘続行不可能な状態なので、何としてもここで押さえておきたい。しかしどうすれば——そこまでキラの思考は途切れた。

「ふんす！」

「くっ！」

間抜けな掛け声とともに唯の召喚獣がギターを大きく振り回してきた。キラの召喚獣は後ろに飛びすぎるわけではなく、膝を落として態勢を低くしてやり過ごした。キラは唯が振り被った隙を見て咄嗟に蹴りを入れた。唯は蹴りをまともに食らった。

が、ちっとも応えていないようで、全く怯まずにギターを振り回す。キラは即座に素早くサーベルを抜いて応戦するも、

パワーで完全に負けている為まともに受けてはいけけないので、必死に受け流す。

「っ！」

パワーが違い過ぎる為受け流すのも簡単ではない上、観察処分者のキラは肉体に疲労とダメージがフィードバックする。

それでも全く攻撃の手を緩めない唯。

『ヤマトと紅月と柩木はここで確実に仕留めろ！ 残すと面倒だ！』  
『大丈夫だ！ ヤマトは平沢に任せておけ！ 後は今の紅月と柩木  
だけでこの人数を抑えられるはずがない！ 突撃しろ！』  
『応！』

キラと唯の横を雪崩れこんでいくCクラス。

『左翼が崩れたぞ！ 今だ！ 突入しろ！』  
「やらせるか！」

キラは唯から離れ、ライフルを速射させた。多勢に有効なフルバースト隙が大きくは、点数の高い唯が近くにいるのでやり辛い。滑り込んで行った何人かに命中させた。戦死には至っていない。

「ありがとう！」

「スザク！ お願い！」

点数が減った敵にスザクだ殺到する。一息つくキラに唯が凄い勢いで向かってくる。

「よそ見してちゃだめだよ！」

「ちっ！」

キラは盾を掲げる。構わず唯がギターを振りかぶる。

ぶつかって盾が砕け散る。キラは盾をすぐに捨ててサーベルを抜き、二刀流で構えた。

「みんな！ そろそろ終わりにするよ！ 準備はいい？」

『おい皆！ 平沢が暴れ始めるぞ！』  
『部隊は整えた！ いつでも行けるぞ！』

何やら唯が指示を出している。するとCクラスの召喚獣が一斉に伏せた。唯の召喚獣の腕輪が輝く。

「行くよ！ “ブラスト・ハウリング”！」

「！ カレン！ スザク！ くる！」

「「え！？」」

必死に応戦しているカレンとスザクがこちらに振り向く。

刹那、音の弾幕が乱れ飛んできた。発生する衝撃波にキラは必死に堪えるが、スザクとカレンが吹き飛ばされた。

キラが救援に向かおうとするが、唯が特殊能力を発動しながら突進してくるからそれもかなわない。

迫ってくる唯にキラがライフルを向けようとしたが、唯はライフルをギターで払い落とした。

「とうっ」

パワーの違いで大きくよろけるキラに、唯が容赦なく飛び掛かった。

「しまった！」

かわそうとしたがダメージが蓄積している身体ではついてこれず、そのまま唯に抱きつかれた。暖かくて気持ちよかったのは内緒だ。キラは必死に引き剥がそうとするが、パワーが違い過ぎてビクともしない。

戦闘力ではキラの方が圧倒的に上だから、唯は単純な力勝負に踏み込んできた。

「またまた行くよ！ “ブラスト・ハウリング” ！！」  
「ちいっ！」

そのままキラを押し倒した唯は大きく息を吸い込んだ。キラはダメ元で耳に手をやった。

『皆さんお待ちかね！ 平沢唯のお射程圏内スペシャル・ライブにようこそお〜！』

観客Ⅱキラ一人

次の瞬間、凄まじい振動がキラの召喚獣を襲った。抱きつかれて身体が密着しているから耳を塞いでもダイレクトに衝撃が襲う。

観察処分者であるキラにもその桁はずれの振動、衝撃がフィードバックする。そのダメージをキラは歯を食いしばって耐える。

キラの召喚獣が身体中の至る所から血を噴き出し始めた。キラ自身にも激痛が襲う。

（こ、これ……！ 凄く痛い……！ これ以上は身体が持たない……！ このままじゃ……！）

キラの意識が朦朧としてきたその時、唐突に振動が止んだ。

（……？）

「あ、あれ？ なんで？」

唯も困惑しているようだった。押し倒されていたキラの召喚獣が隙を見て巴投げを放つ。

さっきまで死にかけだった召喚獣が急に息を吹き返す様に力を増す。

「ヤマト、無事か？」

「間に合ったみたいだな」

『まずい！ 干渉範囲が乗っ取られた！』

駆け寄ってきたのは英語教師を引き連れてきた二人の男子生徒だった。二人とも今日Fクラスに編入された生徒だ。

名前は確か、相良宗介とカミュー・ビダンと言っただろうか。自己紹介直後にCクラスに宣戦布告されたのでよく覚えていない。

「ごめん。二人ともありがとう」

「構わん」

「このまま一気に攻めるぞ！」

『英語 キラ・ヤマト & 相良 宗介 & カミュー・ビダン  
545点 409点 210点』

表示される点数。かなりの高得点である。

「僕は紅月さん達の援護に向かう！ 君達は今のうちに、平沢さんの無力化を！」

「了解した」

投げられて態勢を立て直し切れていない唯に向かって、宗介は迫る。散弾銃を唯に向けて撃った。

唯は咄嗟にギターを盾にする。ギターは音を立てて破壊された。

「わわわ」

「唯！ 後退しろ！」

慌てる唯に一つの影が立ち上がる。宗介の召喚獣は構わず散弾銃



をぶつ放す。その影は盾で銃弾を防いだ。

「散弾ではなあ！」

律が叫ぶ。ブラン少佐つえー。アッシマーがあ！　しかしアムロの引き立て役なんだよなあ……。

『Cクラス　田井中　律　&　平沢　唯　VS　Fクラス　相良  
宗介

英語　　　　　150点　　　　　60点　　　　　40  
9点』

しかし点数差もあり、盾が二発目を喰らって破壊された。律は盾を捨てて唯を連れて逃げた。

「りっちゃくん、助かったよー」

「バカ、ここで戦死したら補習室送りだぞ！　そしたら放課後にやるはずの学際のライブの練習ができなくなるだろ！

それだけでなくもうちの戦力の要なんだからここで死なれたら困るんだからな！」

「ごめんねー」

危機的状況なのににへらと笑う唯に毒気を抜かれる律。しかし敵の攻撃の手が緩められることはない。

上空からカミーユの召喚獣がライフルを連射しながら降下してくる。

「直撃できれば！」

「クソっ！　上からか！」

「！　ダメ！　りっちゃん！　横じゃなくて前に行かないと！」  
「え？」

唯の助言も間に合わず、カミーユのライフルからでる銃弾の雨をかわそうと横に飛ぶ律。すると小規模な爆発が律の召喚獣を襲う。

ライフルを撃ったカミーユはすかさず避ける方向を予測し、グレネードを発射しておいた。律の左右辺りにだ。

直撃はしなかったが爆風で一瞬怯む。カミーユは持っていたライフルの銃口から刃を形成し、律に投げ付けた。

投げられた刃に、律の召喚獣は右肩からごっそり斬られた。

「しまった！ やられた！」

「りっちゃん！」

「唯！ 早く逃げろ！ 唯なら国語の干涉範囲に逃げれば、まだやれる！」

「でも、りっちゃんが死んじゃうよ！？」

「あたしのことはいいから！ 唯がいなくなったら最悪Cクラスの机がミカン箱になるぞ！」

「それは嫌だけど！」

「なら早く行け！ 唯！」

律に押し出され、唯は駆け出す。律は「これでいいんだ……」と安らかに目を閉じた。突っ込みがないって不便や。

その後ろで宗介が無造作に散弾銃のボルトを鳴らす。銃口を弱った律の召喚獣に突き付けた。

「終わりだな」

「「田井中さんを助ける……！」」

律にとどめを刺そうとする宗介に女子が殺到する。宗佑は舌打ちして律から離れ、散弾銃を連射する。

唯の方には男子生徒が三人ほど護衛につく。

「平沢さん！　もうすぐ国語の干渉範囲だ！　そこまで逃げれば勝機はある！」

「う、うん！　りっちゃんは！？」

「田井中さんの方には何人か行ってもらった。気にしないで――」  
「雑魚は消えろ！」

突如、一人の男子生徒の召喚獣が消し飛んだ。カミューの召喚獣がハイ・メガ・ランチャーで吹き飛ばしたからだ。

「ちいつ、すまん！　ここまでだ！　後は頼む！」

「わかった！　おい、お前は平沢さんを！　彼女を無くしたら奥に控えている姫路さんを止められる戦力が無くなる！」

「おう！」

そう言って男子生徒が二手に分かれた。一人はカミューに向かって行っている。

男子生徒の召喚獣が背中から槍を抜いてカミューに迫る。

「うおおおおおおおおお！」

「邪魔を！」

男子生徒の振り上げる槍に見向きもせず、カミューは二段蹴りを見舞った。

吹っ飛ぶ相手に、カミューは銃口に刃を形成させたハイ・メガ・ランチャーを思いっきりぶん投げた。

相手の召喚獣は回避行動も取れずに投げられたハイ・メガ・ランチャーが肉体ごと壁に突き刺さって、串刺しになって力尽きた。

「出てこなければ、やられなかったのに！」

カミィユはそう吐き捨て、逃げる唯の召喚獣に照準を合わせた。

「当たれ！」

二つのグレネードが唯の召喚獣を襲う。グレネードに気付いた護衛の男子はすぐ振り向いて迎撃しようとする。

唯には先に行くように伝える。しかしグレネードは唯の方に向かって行く。

「誘導するのか！？」

すぐさま男子が盾を使って受け止める。しかし点数の差か、盾が破壊される。盾破壊アクション大好きです^^  
フウっと一息つく男子生徒。しかし気を抜いた瞬間、横から影が躍り出る。

「戦場で動きを止めるなんて！」

「しまった！」

カレンだった。その声に男子生徒が反応して剣を抜こうとするが、その前に顔を掴まれる。

必死にもがくが、頭を掴んでいる手はビクともしない。

「くそっ！ 放せ！」

「弾けろォ！」

その瞬間、掴んだ手が赤熱し、バァンという音と共に相手の身体に熱を送った。ビクンツと痙攣した後、力尽きた。

（これで護衛は消えた。後は平沢を討てばこの戦いも終わりに――）  
「皆……ありがとう！」

唯は逃げずにその場に立っていた。破壊されたはずのギターが元に戻っている。

（英語の干渉範囲が、消えている……？　しまった！　逃げ切られた！）

「逃げて！　皆！」

カレンが叫ぶ。カミィユと宗介はこちらに振り向く。

「本日三度目！　“ブラスト・ハウリング”！」

唯の召喚獣が声を上げる。正確には声ではなく、音ですらなく、振動の弾幕だった。

逃げられない、とカレンが思った時、蒼い翼が煌めいた。

「紅月さん！」

キラの召喚獣がカレンの召喚獣を掴んで逃げる。キラ自身もカレンを引っ張って強引に下がらせた。

カミィユは変形して離脱し、宗介は腕輪の力を使って防御している。

☆

（――戦局は五分五分だね）

キラは周りを見渡す。

Fクラスの方には英語の干渉が、Cクラスには国語の干渉が広がっ

ている。相手の陣地に有利な教科が支配している。総合的にはCクラスの方が戦力が上だが、今前線にいるメンツはFクラス最強レベルの戦闘能力の持ち主たちである。

国語なら彼らに加えて他のFクラスが来ても崩せる。だが英語は無理だ。400点越えが二人以上いるからだ。

あとスザクには補充しに戻ってもらった。Fクラスで遊撃能力と国語の点数が高い彼は後々重宝するかもしれないからだ。

Cクラスも踏み込めないが、Fクラスも踏み込めない。あの平沢唯の能力は非常に厄介だ。

ハッキリ言ってしまうえば前に戦ったフェイト・T・ハラOWNよりも（点数が下なのに）面倒な相手だ。

（このまま終わりにしてくれればいいんだけどな。正直もう体が持たない……）

さっきの唯との戦闘でのフィードバックでキラの身体はボロボロだった。立っているのも辛い。

キラのその願いが叶ったのか、一人の使者が走ってきた。

「おい」

「吉井君？」

Fクラスを代表するおバカこと吉井明久がきた。

「どうしたの？」

「Cクラスと協定を結びたいって雄二が。これ以上やっても無意味な消耗戦になるだけだって」

それはありがたい。ハッキリ言って今の状態で続けても戦死する人が増えるだけだ。キラはそう思う。

Cクラスにはまだ大勢の戦力が残っているだろうし、こちらには姫路瑞希が温存されている。

そしてどちらにも勝つ為のプロセス、つまり勝利に導く策を思いついていない。どう考えてもいたずらに戦争は長引く。

明久が戦争中止を呼び掛け、Cクラスの代表との対話を望んだ。

相手の代表はあっさり了承した。これ以上戦争を長引かせても戦力を消耗させるだけだというのが分かっているみたいだ。

Cクラスは何も得しないし、経験値を稼ぐにしても戦死者を出し過ぎた。

その折で小山友香はこう言った。

「つつてもさあ、使者だけ来られても納得できないから代表呼んできなさいよ。協定結ぶなら直接話し合うべきじゃない？」

「え？ 雄二を？」

「別にいいでしょ？」

明久は驚いた。

確かに言い分はわかるが、わざわざ代表を呼ばなくても協定は結べる。しかし相手も代表が直接来ている。

ならそれくらい聞いてもいいんじゃないか？ 明久はそう考えた。

「わかった。雄二を呼んでくるよ」

「頼むわね」

明久が雄二を呼びに行った。それを見てキラがガクツと膝をついた。一番近くにいたカレンがそばによる。

「ちょっと、大丈夫？」

「これ……結構厳しい……」

そのままキラはばたつと倒れた。

☆

「――で、なんでわざわざ俺を呼んだんだ？ 理由を聞かせてもらおうか」

雄二は警戒心を解かずに言った。

明久に呼び出された雄二は何か企むでもあるんじゃないか、と疑ったが、これ以上戦争を続けてもこちらにとって有り難くないので、その明久の呼び出しに乗った。

しかしどうした事か、雄二が来てから友香が完璧な笑顔を張り付けて動かそうとしない。

雄二の問いを友香は無視して、話を進めた。

「私からの提案なんだけど、Fクラスがこちらの言う事を一つ聞いてくれたら停戦協定結んでもいいと思うの」

「なに？」

その言葉に雄二だけではなく、Fクラス全員が驚いた。つまりこれは『和平交渉』にあたるものになる。

雄二は慎重に聞いてみた。

「とにかく言ってみろ。呑むかどうかはそれから決める」

「それは簡単。貴方よ、Fクラス代表」

「何だと？」

（雄二に用がある？）

雄二も驚きの声を上げる。明久も隣で唸った。構わず友香は話す。



相変わらず動かぬ笑顔を張り付けている。

「少し前にね——貴方達で言うところのBクラス戦終結戦の朝に当たるかしら——Cクラスに木下さんに似た子が

うちのクラスをすごい勢いで馬鹿にしたのよ。確か開口一番に『この豚共!』だったかしら? それで私達、Aクラスに挑んだの。で、Aクラスに聞いたらさ、そんな事やってないって聞いたの。そしてさ、木下さんにはそっくりな双子さんがいるって聞いたの。

……Fクラスに」

雄二は背筋を震わせた。さっきから感じていた違和感が分かった。これは、怒りだ。

よく見ると後ろのCクラスも似た感じの感情に支配されてる。

「私さ、気の長い性質じゃないんだよね。そりゃいきなり豚呼ばわりされたらさ、ちょっとムカついたりするよ?」

「ちょっと待て、それは他に視線を向ける為の——」

「ああ、そんな事今言わなくても、停戦の後でゆつつくり聞かせてもらうから。で、どうなの? 受けるか受けないか」

慌てて雄二が弁解しようとしたが友香はそれを遮って協定締結の是非を問うた。

明久は思う。

（戦争が、終結するならそれに越したことはない。でもそれは、雄二を売るということだ。僕には出来ない! 友達を売るなんて!）

「交渉成立だね」

「ありがとう。すんなり交渉が済んでくれて助かるわ」

「おい明久! モノローグと行動が一致してないぞ!」

「え? 雄二って友達だったの?」

「デメエぐおっ」

雄二が明久に飛びかかろうとすると、友香が雄二の襟をがしつと掴んだ。「くぺっ」と雄二が変な声を上げて気絶した。

気絶した雄二を気にもせず友香は引きづってその場を去った。

☆

その後の事を言うと、

雄二はCクラスからリンチを喰らった。ボロボロになりながらも逃げ延びた雄二。その姿は宣戦布告に逝った時の明久みたいだった。

その後、友香が翔子に「坂本君が私に『俺の股間を触れ』って強要してきたの……」と言った。そして鬼神が生まれた。

凄まじいプレッシャーを放ちながら疾走する翔子と決死の形相で逃げる雄二。文字通りの鬼ごっこだった。

結果は翔子のボディーブローで終わった。その後どうなったかは明日になれば分からない。

明久は「よっぽどあれが頭に來てたんだね。まあわからなくもないけど」という言葉を残した。

しかし自分のクラスを豚呼ばわりされたら確かに怒るよねえ……

「しかし、立場が対等なのに一方的に要求押し付けたことに気付かなかったなんて、やっぱりFクラスなのねー」

家に帰った友香はノートを取る。今日の戦争を纏める為だ。

今回の戦争の過程と結果を記す為の物で、戦争中にも更新し続けている。後の戦争でも必要となる代物だ。

今回Fクラスに戦争を挑んだ理由は確かに私怨だったかもしれない。しかし結果的にはかなり重要なデータが残った。

まず今回の戦争はFクラスの全力だったと言える。消耗していたが、

それでも間違いない。

言わせてみれば、Fクラスは今までに何度か戦争行為を行ってきたが、どれも全力ではなかった（言い方が妙だが）。

まずDクラス。これはまだクラスの情報が広がってない状態だった。普通に戦えばDクラスの勝利は間違いない。

その慢心に付け込み、切り札の姫路瑞希を闇打ちで使ったのだ。手際が見事だったと言える。

Dクラス戦は情報を十二分に活用した勝利だった。

次にBクラス。まずBクラスはCクラスを使って牽制しようとした。名前だけ使われている状態だから特にどう思う事はないけど。

そしたらFクラスは木下秀吉（であってる？）を使ってCクラスを煽ってきた。踊らされてた事には頭に来るがいい手だと認めよう。

あとは設備を使つての戦法。今度は姫路瑞希を使わずに勝利した。色々問題のあるやり方ではあるけど。

なぜ切り札を使わなかったのかは知らないが、それでもFクラスにはBクラスと戦える力があるという証明にもなった。

Aクラス戦は戦争ではないから除外してもいい。ただここでは主力の戦力を見極めやすいという利点があった。

確かにAクラスがCクラスよりもFクラスを警戒する理由があった。そして今回のCクラス戦。主力が消耗している時に襲撃したにも拘らず、五分五分のままに終わってしまった。

正直に言う一気に押し勝てると踏んでいたので、この結果は予想外だった。まあ最終的にはこちらが満足したからいいけど。

「ふう……」

一通り書き終えてペンを置いた友香は腕を伸ばした。席を立てて紅茶をつぎなおす。

（どうしようかしら……三ヶ月後にはまたFクラスが戦争を仕掛け

てくるだろうし。今よりも警戒しないといけなくなるわね)

ノートを閉じて棚になおし、今日の授業の復習を始める。

(私たちも上のクラスの設備が欲しいから戦争起こすつもりだけど、Fクラスは絶対に障害になる。どうしたらいいかしら……。)

誰かに相談してみようかしら。こういうのはやっぱり経験者よね。茶道部の先輩ならAクラスの人いたし、相談相手なら最適かも。

ってここ、xじゃなくてθだったわ。いっつも使われてるから書き間違えたじゃない！)

必ず来る戦争を予感しながら、目の前の数学の式に悪戦苦闘する友香であった。

## 12話〈ACE…Rでやれ〉（後書き）

私小山さん好き過ぎワロタw

唯に強力な能力を与えてしまって後悔した。基本殴り合い宇宙にするつもりだったのに。

自己紹介シーンはカットしました。面白く作れる自信がなかったのだ；

あともっと戦争するべきだと私は思うのです。バカテスの特権ですし。

そういやACE…Rってランカuzeeee（システムの意味で）なゲームでしたね。

**13話〈練習用・日常でも書いてみっか!朝編〉(前書き)**

キャラ増やし過ぎると掘り下げるのが面倒くさいなあ……しかし楽しい。

高町なのはの家族がよくわからなかったので少し手を抜きましたへへ；因みにバカテスキャラは出ない。

### 13 話 く練習用・日常でも書いてみつか! 朝編く

多くの光が輝いたり消えたりしている。無重力帯特有の浮遊感がキラを包む。

友軍が、多くの戦友が次々と撃墜されていく。敵軍の機体も、次々に撃ち抜かれ、斬り刻まれる。

いっぱい人が死ぬ。大切な人が目の前で高熱の光に包まれていく。手を伸ばす。届かない。届かない――

$$(\text{---})!$$
[illegible]

笑い声が聞こえる。耳に直接聞こえるものではない、頭、いや、身体中の細胞が感じ取っているようだ。

この不快感、間違いない――

——君は、生きてはいけない人間なのだよ——



「またあの夢か……」

キラ・ヤマトは目を覚ました。汗で身体が濡れている。まだ身体が痛む。

辺りは薄暗い。構わずカーテンを開く。汗をふく為にまずタオルを取りに行く。

朝食を用意しようとキッチンに赴く。安いアパートなので狭い。昨日作って残っている味噌汁とご飯をよそい、同じく昨日作った口

ールキャベツを温める。母カリダ直伝のキラの得意料理だ。  
テーブルに持っていき、食べ始める。テレビをつけ、新聞を広げる。  
経済の深刻さを話し合うような番組だ。

食べ終わったキラは食器を洗って直し、自室に向かってPCを立ち上げる。

モルゲンレーテ日本支部からの仕事が来ている。表向きにはアルバイトだがほぼ正社員と同様の給金を貰っている。キラの資金源だ。仕事速度は他の正社員に比べるとかなり速いが、本分は学生だから学業を優先している。

キーボードを二つ用意し、凄まじい勢いで叩き続ける。しばらくして仕事完了する。

「って、もうこんな時間か！」

時計を見て焦るキラは立ち上がり、着替え始める。鏡の前で髪にくしを通す。寝癖はみつともないから。

戸締り、日の用心を行った後、ドアのカギを閉めて学校に向かった。時間が押してきているので、少し急ぎながら。

☆

ルルーシュ・ランペルージは目を覚ました。床に敷いてある蒲団から身を起こした。ベッドは忌々しい魔女に占拠されている。

日が出ておらず、辺りはまだ薄暗い。ルルーシュは迷わず洗面所にくし、ローション、乳液、下地クリーム等を取りに行く。

それらをもって行くのは妹ナナリーの部屋。この時間はまだナナリーは寝ている。

ナナリーを起こさないように手入れを行う。目が見えない妹にはこうやって手をかけてやる必要がある。

一時間以上かけて丹念に手入れを行っていると、日が昇り、それに



合わせてかナナリーが目を覚ます（目は開けないが）。規則正しい起床は健康な証拠だ。ルルーシュは優しく言う。

「おはようナナリー」

「んん……おはようございます、お兄様」

「すぐに朝食の準備をする。待ってろ」

「はいっ」

ナナリーが返事をする。ルルーシュは部屋を後にする。

キッチンに向かおうとすると、パジャマをだれた着方をしているチーズ君を手を持っている魔女が出てきた。

ナナリーには笑顔だったルルーシュが一気に不機嫌面になる。

「おいルルーシュ、朝はまだか？」

「今から用意するところだ。大人しく待ってろ」

「私を待たすとは、良い御身分になった物だな、ルルーシュ」

「うるさい」

構わずキッチンに入り、卵と野菜を取り出す。朝から油っこいものはナナリーの美容の敵だ。故にヘルシーなものを選ぶ。

トーストにハム、野菜の盛り合わせにスクランブルド・エッグと有り触れた一般の朝食のメニューだ。

「ルルーシュ、ピザが食べたい」

「黙ってろ魔女」

朝食を終えたので今度は登校の準備だ。ルルーシュはすぐさまナナリーの着替えを見繕い、沙代子に着させた。後は学校に行くだけだ。

「ナナリー、何かあったら俺の携帯に連絡を取るんだ、いいな」

「はい、お兄様」

「沙代子、ナナリーの護衛を頼むぞ。危険な人物や悪い虫がナナリーに近づこうものなら排除、無力化しろ、わかったか」

「はい、ルルーシュ様」

「ナナリー、気をつけて行ってくるんだぞ。絶対に無理はするな。俺が通う学校は近いから、すぐに駆け付けられる。安心しろ」

「わかりました」

「じゃあ僕も行くね」

「ああいつてこい」

「……」

「おまえいたのか」的な扱いを受けるロロはナナリーに向けて妬みの視線を送る。

（何で兄さんは僕には冷たくてナナリーをこんなに優遇するんだ！

僕だって弟なのに（血はつながってないけど）！

やっぱりナナリーを始末するしか……しかしどうしよう。僕が直接手を下せば兄さんは二度と僕を見にくれなくなる。

事故死に見せかけてもギアスを使えばC・C・に感知されるからバレル。それ以前に沙代子をどうにかしないと……

しかも皆には僕のギアスの弱点を知られている。どうすれば……）

ロロは必死にナナリー殺害計画を練るのだった。

三人が出て行くと、ルルーシュも鞆を持って外に出る。C・C・がヌツと出てくる。

「どうしたC・C・」

「お前が行っている学校は、文月学園、と言ったな」  
「来るなよ」

C. C. の考えを先読みするかのようにルルーシュが遮った。C. は不服そうに眉をひそめる。

「何故だ」

「お前は自分の立場が分かっていないのか？」

溜息をつきながらそれだけ言ってルルーシュは玄関から先に消えた。

C. C. はクスツと笑う。

「私の立場だと？ わかっているとも。私は魔女だからな」

C. C. はピザのカタログを開いた。

☆

相良宗介は目を覚ました。外から奇妙な物音がしたからだ。

（敵か？）

ベッドの下からナイフ片手にのっそりと這い出てくる。視線は窓に。

「にゃあ」

「……………」

猫が鳴き声を上げて窓の扉から跳び下りた。宗介は時計を見る。七時を僅かに過ぎていた。彼は朝食の準備に入った。

ベーコン一切れトマト半分ミネラルウォーター、そして砂糖と塩を一つまみ。そしてかなめに作ってもらったおにぎりの残り一つ。

中々豪華な朝食だ。幼少からの戦場や“この一年近く”は静かにメ

シにあり付けないこともよくあった。

先の戦闘で身体を負傷した彼は食事に制限が付いている。それを守らなければならない。特に塩分とアルコール。

その後歯磨きと洗顔を素早く済ませ、登校の準備にかかる。

各種銃器、各種ナイフ、各種爆発物、各種地雷、サバイバルキットに非常食に暗視スコープ……点検を澄まして身につけたり。

「おっと、これはいらないな」

宗介はそう言ってピンク色の鉄の筒を置いた。催眠ガスで、解放すれば学校全体を覆い、全ての生徒教師たちを無力化できる代物だ。協力過ぎる兵器であるため、持ち歩くことは危険だ。催眠ガスならこちらの方が効率がいい、と手榴弾型を手取る。

「よし、準備は完了した」

宗介は壁に貼っている古ぼけた写真を割と新しい写真に向かって背筋を伸ばした。

東南アジアで戦った戦友と、元ミスリルの兵士たちだった。もうこの世を去っている面も多々ある。

そして陣代高校元2年4組のクラスメイトとナムサクで会ったクロスボウのメンツもいる。

「……では行ってくる」

相良宗介は学生服を袖に通し、教材とノートを鞆につめた。戸締りを再度確認し、玄関を開けた。

☆

「カミーユ、いい加減起きなさい！」

カミーユ・ビダンは目を覚ました。幼馴染のファが大きな声を上げたからだ。

「もう少し寝かせろよ……あと五分」

「さっきもそれ言ったでしょ！ さっきからも10分よ！ 朝御飯の用意は済んでいますから、布団から出なさい！」

うるさいな。お前は俺のかーさんかよ。そう愚痴りたくなるカミーユはむくりと起き上がる。自分の母はこんなことやってくれない。カミーユの母親は仕事に没頭していて家には帰ってこない。父は愛人の所に入り浸っている。

子供である自分の事には一切興味を示さない。カミーユが小さい頃からコンプレックスを抱く一つの要因だ。

欠伸を噛み殺すカミーユはファが用意してくれた朝食を食う為テーブルに向かう。

トーストに卵焼きにサラダにココアと一般的な朝食の光景である。

カミーユだけならカップ麺で済ませるから助かる。

朝食を済ませたカミーユは洗顔と歯磨きを済ませ、着替えようとしてスリープ状態になってるPCに気付いた。

そういえば昨日はMSの設計図作る為に夜更かししていた事を忘れていた。カミーユは早速PCをつける。

何かの可変機の設計図だが名前の所が空欄になっている。カミーユは保存してすぐにPCを消した。

着替えたカミーユは鞆にノートと教科書を詰めて、空手着を持って玄関を出た。

「カミーユ、これ」

フアはカミューに弁当箱を差し出した。

「ああ、いつもありがとう」

「たまには早起きして自分で作ってみる事ね」

「俺が料理得意じゃないこと知って言っているのか？」

「そうね、嫌味かもね」

フアが笑う。カミューは不機嫌そうに口をへの字に曲げた。

（そーい、やあの学校って空手部あつたっけ？）

そんな事を思うカミューだった。

☆

「お姉ちゃん。起きてー。朝だよー」

平沢唯は目を覚ました。妹の憂が起こしてくれたからだ。

大欠伸をして目覚まし時計を掴む。音が鳴らなかったようだ。唯は時計を見て跳ね起きた。

「ええええええ！？ もうこんな時間ン！？」

ベッドから起きた唯はすぐに着替えに向かった。準備は昨日済んでいる。髪をとかし顔を洗って、

焼き上がったトースト一枚くわえて玄関を飛び出した。

「お姉ちゃん、まだ七時前だよ？」

憂のそんな言葉も唯には聞こえなかった。

☆

高町なのは目を覚ました。目覚まし時計がなったからだ。むくりと起きて階段を下りる。

父の士郎と母の桃子と姉の美由紀が朝食に入ろうとしている。なのはがこの時間に来る事をわかっていたみたいだ。

なのはも席に座り、家族の団欒に混ざる。たわいのない話をしながら朝食の時間が終わる。

そのあと準備を済まし、なのはは登校した。

☆

ドゴオオオオオオン……

文月学園から何やら大きな音が響いてきた。何かと騒ぐ生徒たちの中で真っすぐ走っていく女子生徒がいた。

「このバカ！」

スパアンツ！と軽快な音を立てて千鳥かなめがハリセンで相良宗介の頭をはたいた。

「なかなか痛いぞ」

「やかましい！ なんかもう久しぶり過ぎるフレーズで一日を始めんじゃないわよ！」

「しかし、俺の靴箱が開閉された跡が見られた。爆薬を仕掛けられた可能性も捨てきれず——」

「あるわけないでしょ！？ 何年同じことやってんのよアンタは！」

彼らの周りは黒こげた床と全壊した靴箱があるだけだった。相良宗介が爆薬を使って靴箱を吹き飛ばしたのだ。

「どーすんのよこれ！？ 流石に林水先輩もないし、アンタ観察処分者だから相当ヤバイ事になるわよ！？」

「その通りだ相良！」

突然野太い声が聞こえたので二人が振り返ると巨漢が立っていた。生活指導担当の西村教諭、鉄人である。背筋を伸ばす宗介と苦笑いをするかなめ。

「お、おはようございます、西村先生」

「おはようございます、西村先生」

「おはよう。とりあえず話を聞こう。補習室でな」

「はっ、かしこまりました」

「え、えと……私関係ないんですけど」

「話を聞いただけだ。すぐに釈放する」

“解放”ではなく“釈放”ときた。かなめは嫌な汗をかいた。

☆

宗介達の後に来た生徒たちは大いに混乱していた。靴箱が無残な姿になっていれば誰だってそうなるよな。

埃と煙が溢れるその中で何故か炎がパチパチ燃え続けている部分があった。

「……………」

「……………」



アスラン・ザラとルルーシュ・ランペルージの顔が引き攣った。自分たちの上履きの上で便箋らしき紙が燃え続けている。何かとハートマークのシールが貼ってあったりピンク色だったりしている。鞆でパタパタ炎を消して、上履きも見る。見事に丸焼けになって真っ黒焦げの状態だった。

履けそうにもないのは見て明らかだ。二人はその上履きを捨てて購買部に歩いて行った。

因みに彼らのラブレターを密かに始末して不幸の手紙にすり替えようとしたF F F団は陰で喜んだという。

しかしそんな事をやったところで彼らにはラブレターなど来ないが。

☆

「なにこれえ!?!」

中野梓が悲鳴を上げた。

もくもくと煙が立っている。煙の元は二年生の靴箱だ。ていうか全壊してる。

「何あれ。爆撃でもあったのかしら?」

「本当に爆発があったらしいのよ」

そんな会話が聞こえてくる。

（どうやったら学校の中で、しかも靴箱で爆発なんて起こるんだろう……）

まさか本物の爆弾で吹き飛ばしたなどと、現場を見ていない彼女には知る由もない。というか思いつきもしないだろう。

一年の自分の靴箱は何とか無事で、自分の上履きも全く支障がない。梓はホッと息をついた。

入学してまだ一学期過ぎていないのに吹き飛ばされたのではたまったものではない。

「あ、梓ちゃん。無事だった？」

「GINGA? ……何その格好」

GINGAは何故かピッチリした服を着ていた。ボディバランスがくつきり映って、その……エロい。

周りの男達の視線を集めている。……スタイル抜群だなあGINGAって。それに比べて私……、と梓が自分の平野を見下ろした。

「ああ、うちにあった防御スーツで今性能を見ているのよ。それで紅月先輩や枢木先輩と組手してたら爆発が聞こえて、

それで飛んできたの。幸い怪我人もいないようでよかったわ。梓ちゃんも大丈夫そうね」

「うん、私は平気。……あそこの人大丈夫かな」  
「え？」

梓は何かを見つけたようだ。GINGAもそちらを見ると、顔を青ざめてフラフラしている女子生徒がいた。見た限り、二年生だ。

梓とGINGAはそちらに向かった。

「大丈夫ですか？」

梓がその女子生徒に話しかけた。女子生徒は依然上の空だ。ゆすつてみるとうわ言のように声を出す。

「こ、こんなの……非常識よ……」

「は、はあ」

現場を見た梓にとっても曖昧な事しか言えず、とりあえずどこかに座らせようとすると、向こうから誰か近寄ってきた。この人の知人だろうか。

「唯ちゃん。大丈夫？」

（え？ 唯先輩？）

梓は周りを見渡したが唯の姿はない。

その人たちは梓が駆け寄った人に寄ってきた。

（あ、この人の名前が唯なんだ。じゃあ私の知ってる唯先輩とは違う人ってことか）

何人かに付き添って行ってしまった“唯”を見て、梓はその場を去ろうとした。

「あ、おはよーあずにゃーん！」

振り向いたらそこに唯が抱きついてきた。今度は自分が知ってる“唯先輩”だった。

……あったかい。でも恥ずかしい。

☆

「こんな時に電車が遅れるなんてえー！」

高町なのはは走る。

今日の電車が事故でかなりの遅れを取った。電車通学の彼女にとっ

て痛手だった。

そしてかなり遅れて目的の駅に着いたが、ここからでは文月学園には結構遠い。走らないと間に合わない。

自分の周りにも一生懸命走っている生徒もいる。急いで自転車倉庫から自転車を引っ張りだしている生徒もいる。

自分はそんなないので走るのみ。走りながら角を曲がる。

「きゃっ！」

「わっ！」

突然なのはが誰かとぶつかった。勢い余って思いつきり転ぶなのは。

「ご、ごめん！ 大丈夫！？」

なのはとぶつかった人が慌てて声をかけた。男の人のようだ。茶髪にショートジャーギーの髪型、優しそうな相貌……というか、

この人は先日のAクラス戦で見覚えがある。確かフェイトを倒した人で、名前は確か……思い出せないのはであった。

「うん、私は大丈夫……いたっ！」

なのはは立とうとして、すぐに足を抑えて座り込んだ。太股の所が赤く腫れている。血も出ていた。

コンクリートの破片が散らばっていて、足に刺さっていたのだ。

少年も顔を顰めて、その怪我の様子を見た。

「これは酷い……早く手当てしないと。ここからなら学校の方が近い、早く保健室に行かなきゃ」

「ごめんなさい。迷惑かけちゃって」

「突っ立ってた僕の方が悪かったし、責められるのは寧ろ僕の方だ

よ」

少年は持っている鞆を背中にかけた。そして一回学校の方への道を見て、なのはに近づいて腰を下ろした。

「へ？」

なのはは妙な浮遊感に襲われた。

「えー！？」

浮遊感の正体がわかった。少年に抱き上げられたからだ。俗に言う“お姫様抱っこ”と言う奴である。

「あ、あ、あ、えと、これ」

「不快かもしれないけどごめん。でももう時間がない。僕のせいで君を遅刻扱いにするのはダメだ。今からなら走れば間に合うし、早く怪我の手当てもしておかないといけない。――しっかり掴まっけてね！」

そう言えば時間が圧していた。ここでこんなことをしてる場合じゃない。だけどこれは正直恥ずかしい。

それでもなのはは少年の服を掴んで身を寄せた。少年の腕がなのはを抱きしめる力を強くする。意外と筋肉があって驚いた。

「行くよ！」

「きゃっ！」

少年は途端に疾走した。なのはが本気で走っても絶対に体感できない速度だ。というか物凄く速くないか？　と思うのである。

次々と生徒たちを抜いていく。抜かれた生徒が絶句した顔でこちらを見ているのをなのは見た。恥ずかしさが一層増す。

キンコーン

チャイムが鳴った。学校が見えたが、校門が閉まり始めている。この人が速くても、ここからでは間に合わない！

ガチャンと音がして、校門が閉まった。しかし少年は速度を落とさない。

「あれ？ え？」

「しっかり掴まって！ 舌を噛まないように口を閉じて！」

少年がそう言うが早いか、なのは更に掴む手に力を入れた。口もキュッと締めた。

少年は踏ん張ることなく、まるでフワッと飛翔するかのように跳躍した。軽々と校門を飛び越え、ガンッと門を踏み台にし、

音もなく着地した。少年は止まることなく駆ける。止まった時になのは目の前に保健室があった。

校庭などで怪我した人の為に、保健室には外から入れる入口がある事を知っているな？ 学校によっては無い所もあるらしい。

少年は保健室に入ってなのはを椅子に下ろして保険医を呼んだ。やああって保険医が来て、少年は立ち去って行った。

「あ、そういえば名前聞いたくの忘れてた……痛っ」

なのはは消毒液の痛みにビクンと震えた。

### 13話〈練習用・日常でも書いてみつか! 朝編〉(後書き)

ボケ役で宗介以上のキャラがいるだろうか? と思えるほど宗介が使いやすい。ツッコミのかなめもいて本当に痒い所に手が届く状態です。次の更新は月曜日ではないかもしれないです。いつになったら清涼祭編始まるのやら。

そんなことよりこいつらを宇宙に行かせたいです。どうやったらいいんだ……?

**14話〱練習用・日常でも書いてみっか！放課後編〱（前書き）**

月曜日に間に合ったー！

もう二度と書かん……！！色んなキャラを出しながら日常描くのって想像以上に難しい……！

次からは2巻の話に入っていくつもりです。



## 14話 練習用・日常でも書いてみっか！放課後編

「練習しましょう！」

部室にて、中野梓は叫んだ。

「えー？ お菓子食べてからにしようよおー」

「いけません！ この学園祭はもうすぐなんですよ！」

テーブルにベタツとくつつく唯。ムギは紅茶を入れている。

「まあまあ梓ちゃん。もうすぐ紅茶を用意するから待っててね。ケーキもあるから」

「あ、どうも。……って違う！？」

「あずにゃーん、ショートケーキ一番苺が美味しいやつ選らばせただけから落ち着きなよー」

「私が言ってるのはそういうことじゃありません！」

「そうだぞー。すこしは真面目にやらないといけないぞ。まあその前に腹減ってはなんとやらってね」

梓が一人で空回りしているといきなり扉がバタンツと開いた。

全員が振り向くと転がり込んでくるかのように一人の男子生徒が入ってきた。髪が赤くて人相も怖い長身の男子生徒だ。

「だ、誰ですか！？」

「すまん！ 今だけここに匿ってくれ！ 迷惑はかけん！」

「ちょー——」

梓が何か言う前に男子は物陰に隠れた。一息おいてもう一度扉が開

いた。

今度は美しい黒長髪の美少女だった。滯かと思ったが違った。

「あら、代表じゃない。どうしたの？」

反応したのはムギだった。

（ということは、この人が二年Aクラスの代表の霧島翔子さんなんだ。美人だな……）

梓は一人で納得した。

構わず翔子はムギに問いかけた。

「……紬、雄二見なかった？」

「……雄二？ Fクラス代表の、坂本雄二君のこと？」

「……うん」

「それだったらさっき——」

「……もういい。今雄二の臭いがした」

——臭い？

梓はわけがわからず首を傾げた。

「……この部屋から雄二の臭いがした。まだそう遠くない。多分……この部屋にいる」

何か物陰からビクツとする気配がした。翔子は迷わずそちらに向かった。

物陰に向かって手を突っ込む翔子。

「……えい」

「ギャアアアアアアアアアア！ 痛い！ 翔子痛い！ 頭が割れる！」

「……雄二と一緒に帰ってくれないから。悪い子はお仕置き」

「婚姻届もって迫ってくる奴と一緒に帰れるか！ それに今日は明久達と一緒にゲームやるーグエ」

「……また吉井……！ そんなに吉井がいいの……！？」

「ちょ……何勘違いして……オウプ」

メキメキと音を立てていた雄二の頭蓋骨がパキユツと不吉な音を立てた。雄二が泡を吹いてその場に倒れた。

翔子は気にもせずに雄二を引きずって外に出た。その姿をうつとりと眺めるムギ。

「二人とも仲がいいわね」

（え？ あれで？）

翔子が雄二を引きずって外に出ると入れ替わるように滯が入ってきた。

「さっき代表がこの部屋からでてきてたけど、何かあったのか？」

「さあ……私には何が何だか」

「うふふ」

☆

「へえ、今日なのはが珍しく朝遅れてきたかと思ったらそんなことがあったのね」

「なのは、足大丈夫？」

「うん。でも一応帰りに病院で検査してもらうつもりだよ」

包帯を巻かれた足を触りながらなのははそう言った。  
結局なのは朝のHRに間に合わなかったが、事情を話した結果遅刻扱いされなかった。

アリサとフェイトと一緒に帰っているなのは。因みにはやてとすずかは図書室にいるそうです。

昇降口に向かう途中、アリサは更に聞きこんでみた。

「で、誰に助けてもらったの？ 教えなさいよ」

「そういえば聞いてなかったね。誰だったの？」

「うーん。名前が分からなかったんだよね。確かFクラスの男子だったと思うんだけど」

「「Fクラス……？」」

アリサとフェイトが同時に言う。

「うん。確かこの前のFクラスとの一騎打ちで顔を出してた人だよ。フェイトちゃんと戦った人だったんじゃないかな」

「私と？ ——確か、キラ・ヤマトって人のこと？」

フェイトは僅かに顔を歪ませて言った。あの勝負で負けた事を思い出したのだろうか。

なのははそんな親友の微妙な感情の変化を察しつつもあえてスルーして話を進める。

「キラっていうんだ……去年いたかな」

「いなかったんじゃないの？ そもそもフェイトに勝……じゃなくてまともに戦えるだけの点数持つてる奴がFクラスにいたら、

去年の時点でわかっているはずじゃない。それこそ姫路さんみたいに」

「アリサ……気を使わなくていいよ……」

シヨンボリと肩を落としてフェイトは呟いた。

「それに負けたのは点数もだけど、相手の方が強かったのもあるかな。こっちは腕輪の能力使ったのに向こうは使わなかったもの。」

しかも一太刀も浴びせられなかったなんて」

「でも確かにそうだったわよねえー。最初はフェイトと相手の点数見間違えたほどだったし。代表よりも取れてたんじゃない？」

「……」

なのはは二人の会話に入らずに黙って歩く。アリサとフェイトはそんななのはの様子に気がついたようだ。

「どうしたの？　なのは」

「何か考え事でもあるの？」

「……いや、よく考えたらあれから今日一度も会ってないし、まだお礼も言っていないし……まだ学校にいるなら、

今のうちにお礼言っておこうと思うの」

「まあそうした方がいいかもね」

「ちよっと思ってくる。二人とも先に帰ってていいよ」

なのはは身を翻して去っていった。残ったアリサとフェイトはなのはの背中を見送ってから昇降口に向かった。

「そーいや今日靴箱壊れてるんだっけ」

「どこの馬鹿よ、靴箱を爆破するなんて。有り得ないわよ」

☆

その馬鹿こと相良宗介は、汗水垂らして新しい靴箱を運んでいた。実際には召喚獣を使っている。勿論フィードバックがついてくるので宗介自身にも疲労と苦痛が伝わる。

本来靴箱を運ぶというのは大の大人数人でやるほどの大仕事なので、一人でやるのは相当の重労働だ。

何故宗介がこんなことをやっているかと言うと、今朝の件で補習室に連行させられた時、宗介が鉄人に状況をそのまま説明した。

その時の鉄人は目眩がしたように頭を抱えたとか。

一応学校側には“戦場で育って日本の常識が分かっていない”と説明を受けてあったとはいえ、流石に看過しきれず、罰として破壊された靴箱を片づけて新しい靴箱を運んで来い、と言われてそうした。

弁償に関しては『二度はないと思え』との事らしい。要するに見逃してもらった。

とはいえ――

「……重い」

宗介は汗を流しながら呟く。

人一人では持つのは到底不可能な大きさと重さの物でも、召喚獣なら持ち上げることができる。

だからと言って、楽になる物でもない。寧ろ非常にきつい。

勿論教師の監視下なので逃げられない。最も宗介は逃げたりしないが。

「だいじょぶ？ ソースケ」

「大丈夫だ。問題ない」

後ろで千鳥かなめが声をかける。僅かに心配そうに。

「まあアンタの自業自得だし、同情するつもりはないけど、なんか重そうだし」

「確かに重い。だがこの学校の試験召喚システムに慣れるならこれくらいやった方がいいだろう」

「いや、こうなったのはアンタのせいなんだから、自分からやるって言っただけみたいな言い方やめなさいよ」

「むう……」

僅かにしょんぼりしているような宗介を見て、かなめは僅かにほほ笑んだ。

宗介はドシンと靴箱を配置に置く。空いてる部分の1／4が埋まった。既に爆破した靴箱は撤去した（宗介が）。

「あと三つか……」

「頑張りなさいよ！ 終わったらなんオゴってあげるから」

「助かる」

「もう一年以上になるかしらねー。まだ『おはいお屋』やってるのかしら。久しぶりにトライデント焼き食べたいわーグフフ」

☆

「で、なんで僕がこんなことに付き合わされてるんですか？」

「うるさいガキだね、口よりも手を動かしな」

ここは試験召喚システムの中枢部。そこでキラがキーボードを叩いている。

キラは見るからに不愉快そうに目を細めた。

「前に“情報漏洩は云々”と言っていたのは貴方でしょう。その僕を起用する意味が分かりません。第一僕の肩書は一応生徒だ」

「アンタが知る必要もないし、黙ってやればいい。ただ人出が欲しいだけだ」

「……そうですか」

納得してないように目つきを鋭くしたままだが、キラは黙って従った。どちらにしろこの学園長——藤堂に弱みを握られているのだ、後々面倒なことにもなりかねない。

（しかし、誰なんだろう：メンデルの人間であることは確かなんだけど、よく考えたら僕メンデルについて詳しいわけじゃないから、誰かを特定することができないな。僕に、敵意があるってことだろうか？）

有り得ない話ではない。前大戦でキラに殺された者の仇とかなら納得できる。しかしそんな回りくどい事をするだろうか？  
ビービーっと音が鳴ったのでキラは思考を中断した。

「またですか……」

「またってお前がメンテナンスしたんだろうが。他人事のように言うな」

「そうですけど元々僕が設計したわけじゃないし、今の段階ではこれが精一杯ですよ。やっぱり最初から練り直す必要がありますよ」

「……ツチ、折角ここまで嗅ぎつけたのに……！ 一体何が足りないっていうんだい……！」

学園長はいらただしそうに吐き捨てた。

「この“白金の腕輪”は欠陥は致命的です。破棄すべきですよ」

「折角の新技术を、捨てろってのかい！？」

「仕方ないでしょう。点数が一定以上になると暴走するなんて、恐



ろしくて使い物になりませんよ。それにこれで被害を喰うのは  
ここの生徒だ。メンツなんて捨てて生徒の事を第一に考えてくだ  
さい」

実際“暴走”どころではない。下手すると“爆発”してもおかしく  
ないくらいだ。

試験召喚獣は人間の数倍のパワーを持つと言われているが、その出  
力をコントロールできるのはここにあるマザーマシンだけだ。

それをコンパクト化しよう、と言う試みから“白金の腕輪”が開発  
されたわけだが、どうやっても正常に働かない。

しかも結構無理矢理コンパクト化しようとした物だから、点数が高  
いと不具合が起るようになってしまった。

これはわかりやすい例で例えるなら、PSSのゲームをPSPにそ  
のまま移植しようというようなものだ。

例の通りに言うなら、今回の不具合とは音声や画像、ロード時間等  
の著しい劣化に当たる物だ。

話を戻すが、ある意味エネルギーの塊とも言える召喚獣の制御に失  
敗すれば、それはすぐに大惨事になる。

学園長もそれが分かっているだろうから、それ以上は反論しなかつ  
た。

「……アンタが別に設計したっていう“黒金の腕輪”はどうなんだ  
い？」

「あっちは暴走こそしませんが、使用できるのが精々一回だけです。  
この短期間ではこれが精一杯です。すぐに破棄する予定です」

「……あとでそのデータを寄越しな。わかったね」

「構いません。恐らく役に立ちませんよ」

キラはシレッと答えた。

後ろの扉が突然開いた。入ってきたのは教頭先生だった。両手に何

かの契約書を持っている。

「学園長、いますか？」

「なんだい、私は入れなんて言ってないはずだが」

「そうは行ってもですね、貴方の了承がないと動けない事柄もあるんですよ」

学園長は不機嫌そうな顔を直そうとしない。教頭先生は構わず話を切り出す。一瞬だけ開発中の腕輪をチラッと見た。

「今度の清涼祭の件ですが」

「こっちは召喚システムの開発で忙しいんだ、そういうのはアンタに一任しているだろ」

「わかりました。ではこちらでやらせてもらいます」

「わかったらさっさと失せな。こっちは忙しいんだよ」

教頭は一礼してメンテナンス・ルームを出て行った。やけに“こちらで”を強調してたような、と思うキラであった。

「では、今日の所は帰ります」

「明日“黒金の腕輪”のデータ、全部持ってきたよ」

「……わかりました」

あくまで上から目線の学園長に溜息をつくキラであった。

因みにこの日になのはとは入れ違いで出会う事はなかったとか。

**14話〜練習用・日常でも書いてみっか！放課後編〜（後書き）**

恋愛書きたくなった。出来れば男↓女で。逆ハーでもいいや。

あとロロっでもしかしてルルーシュと一つ違いなんだろうか。そうなら一年に入れれるのに。

生徒会がないと学園物はつまらんね。独自解釈で勝手に作っちゃおっかな。

## 前章く暗く、重く、長い事件の始まりく

『で、君の方の準備は整ったのかね？』

「はい」

文月学園の教頭——竹原がそう言った。

ここは文月学園ではない、どこかの建物の会議室のようだ。

そこには他校の代表者や企業の責任者が揃っている。錚々たる顔ぶれだ。全員竹原が配ったプリントを持っている。

『では聞かせてもらおう。我々が手助けする必要があるかも知れないからな』

「わかりました。例の通り藤堂学園長が開発した新技術には欠陥がある事が判明しました。それに付け込む計画は既に立っています。

基本的に私があの学校の経営を任されていますので、大体手筈通りに行きました。先手は取れているはずです」

竹原が配ったプリントは、文月学園の学園祭——清涼祭を宣伝するものだった。

それを手に掲げながら竹原は説明を続ける。

「我が校の試験召喚獣の技術は発展途上の段階です。欠陥があるとなればどのような形であれ暴走が起きるはずですよ。

あの技術自体不安定な部分がありますので、そこは間違いありません。それを利用して世間の視線を浴びる不祥事にします。

今回の清涼祭——高校における学園祭のことです——の開催の際に、『試験召喚大会』を企画しております」

それを聞いて僅かに不愉快そうに眉を潜める他学校の代表者。

これは言わば世間に試験召喚システムを宣伝するもので、毎年何度か行われている。

その結果この学校、つまり試験召喚システムに注目し、興味を持つ者が大勢現れる。当然文月学園に足を運びたくもなる。

そうやって学校の生徒を取られ続けてきたのだ、彼らにとって面白いわけがない。

企業の間も、こういう宣伝が毎年ある学校の技術においてそれと手が出せない。世論を傾けさせかねないからだ。

竹原はそんな彼らの表情を確認することなく続けた。

「今回の大会では、商品に賞状、トロフィーと如月グループの『如月ハイランド プレオープンプレミアムペアチケット』と、後一つ用意してあります。この学校を使つての如月グループの強引な宣伝の件は置いておいて、本題は最後の一つ」

因みに如月グループはここにはいない。企業としてもシステムの技術が欲しい所と只の客寄せパンダとして使うだけの企業に別れている。

如月グループの他には琴吹グループなどがある。戦後のこの時代を独自で生き抜く力がある所と言えるだろう。

大戦にかこつけて軍事メーカーに頼り切っていた企業とそうでない企業には、平和な時代こそ差がつくものだ。

「今回新たに開発された『白金の腕輪』を商品に加えました。その効果を一言で言うなら召喚関連の性能ですかね。

ここでの詳しい説明は省略させてもらいます」

『それが今回の欠陥品と言う事かね』

「そうです。学園長の手から宣伝させるとすると欠陥があると分かった時点で何かしらの手を打たれかねないので、

こういう優勝賞品、と言う形ならあちらも手が出せないでしょう。

回収も、あちらにとっては出来る限りやりたくないでしょうね」

とある企業の責任者は唸った。

『大体の事は把握した。しかし暴走を起こさなければ意味がない。どうやるのかね?』

「それについては簡単です。平均点以上の点数を取れる生徒が使用するだけで暴走を起こせます。要するに高得点の処理ができない、それが今回の欠陥と言えるでしょう」

『使用してくれるのか? その場で使わずに済みますかもしれないだろう。それに学園長に忠告されたりマザーマシンを止められれば使用は出来なくなるかもしれないだろう?』

「その点に関しては大丈夫です。『白金の腕輪』は完全に文月学園と独立したシステムです。マザーマシンを止められても

使用できますのでその心配は御無用です。そしてもう片方のほうも、こちらで手を打ってます。大会に参加させる生徒を

何人かこちらで見つけ、事情を話しております。生徒には優勝すれば大学のほうに推薦状を書く約束をしたら、

喜んでこちらの要求を呑みました。学力も非常に高い生徒たちなので全く問題はないでしょう」

『なるほど……しかし暴走した時の処置はどうする? 少なくともその生徒は只では済まないだろう』

誰かがそう言った。すると竹原は初めて感情の様なものを表に出した。それは嘲笑、みたいなものだった。

「処置? 何を言っておられるのです? 寧ろ何かあってくれた方が我々にとって都合がいいでしょう。」

彼らには『システムに乗っ取った不祥事』を起こしてもらうだけです。全く問題ないでしょう。

何が起こるかは私にもわかりませんが、点数が高い者が使用すればそれこそ大規模な第惨事に発展するかもしれない。

見繕った生徒は点数が高い為、命の保証もできかねますけど、まあ大したことではないでしょう。

たかが大学の推薦如きに人生を捨てるというのもまた、一興ですね」

それを聞いた者たちはうすら笑いを浮かべた。

元々ここは（平たく言うと）目障りな文月学園を潰したい連中の集まりだから、わざわざそれに反論する者はこの場にはいない。

やり方がどうだろうと、それは自分の責任にならないから、気にする必要もない。黙っていれば利益が勝手に転がってくるのなら、黙りもする。

『分かった。やり方に関しては君の方に任せる。支援の必要があれば言ってくれたまえ』

「ありがとうございます。では、あちらに対策を打たれた時の為に――」

竹原はそのまま内容の説明を続けた。

**前章く暗く、重く、長い事件の始まりく（後書き）**

もっと人間の屑を書きたい。“悪”を書きたくてしょうがない。  
そう思う今日のこの頃。

本当にクルーゼやガウルンはとても魅力溢れるキャラだった事に痛  
感しますね……



15話〈猿山アー！！！！！早く来てくれエー！！！！！！〉  
(前書き)

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください  
『思い出せ！ お前は何が欲しかったんだ！？ Fクラス編』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良  
いかもしれませんか。  
写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

千鳥かなめの答え

『高校二年生の思い出』

教師のコメント

人生で一度しかないですからね。大切にしましょう。

土屋康太の答え

『×Hな本』

○成人向けの写真集』

教師のコメント

訂正の意味があるのでしょいか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

枢木スザクの答え

『筋トレ器具』

教師のコメント

部活に励んでください。

カミュー・ビダンの答え

『うるさくない幼馴染』

教師のコメント

贅沢は敵です。欲しくても手に入らない人もいるのです。

相良宗介の答え

『フローベルゲよんじゅうごこうけいオートマティック四十五口径自動拳銃』

教師のコメント

学園祭で武器を欲しがらないでください。

キラ・ヤマトの答え

『平和な日々』

教師のコメント

すごく実感があるのはなぜでしょう？

15話 く猿山アー!!!!!! 早く来てくれエー!!!!!!

「……雄二」

「なんだ？」

「……『如月ハイランド』って知ってる？」

「ああ。今建設中の巨大テーマパークだろ？　もうすぐプレオープンっていう話の」

「……とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

「廃病院を改造したっていうアレか？　面白そうだな」

「……日本一の観覧車とか」

「おお、相当デカいみたいだな。聞いた話だけでも凄そうだ」

「……世界で三番目に速いジェットコースターも」

「速い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするってヤツか。どんなモンなのかわからんが、

考えるだけでワクワクしてくるな」

「……他にも面白いものが沢山ある」

「それは凄いな。きつと楽しいぞ」

「……それで、今度そこがオープンしたら、私と」

「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そこまで行きたいなら——」

「……うん」

「今度友達と行ってこいよ」

「……握力には自信がある」

「ぐあああっ！　アイアンクローはよせっ！」

「……私と雄二、二人で一緒に行く」

「オープン直後は混みあっているから嫌ぐぎゃあっ！」

「……それなら、プレオープンのチケットがあつたら行ってくれる？」

「プ、プレオープンチケット？　ケホッ、あれは相当入手が困難ら

しいぞ？」

「……行ってくれる？」

「んー、そうだなー、手に入ったらなー」

「……本当？」

「あーあー。本当本当」

「……それなら、約束。もし破ったら――」

「大丈夫だっの。この俺が約束を破るようなヤツに見えるか？」

「――この婚姻届に判を押してもらおう」

「命に代えても約束を守ろう」

以上、文字数稼ぎですた。

☆

新学年始まると同時に試験召喚戦争が始まるといふ、しかも最下級クラスが最上級クラス相手にけしかけるという、

文月学園始まって以来の大事件が発生してから一ヶ月以上が経った。

桜の木が桃色を失い、緑色に染まり始めた初夏の日。

文月学園では清涼祭――俗に言う学園祭の準備に取り掛かっている。

お前らちゃんと学園祭楽しんだか？

私はひたすら雑用押し付けられてて面倒だった記憶しかない。うちの学校本当に地味過ぎてつまらなかつたなあ……。

近くの他校の学園祭の方を見ると、とても楽しそうで羨ましかつたなあ。なんだようちの学校。

そんなこんなで活気が満ちている一方、物語の中心のFクラスは――

カコーン

「しまった！ 打たれた！」

「よし！」

学園祭？ 準備？ 何のことです？ と言わんばかりに野球していた。

明久のボールをカミューが打ち返した。見事ライトとセンターの間に落ちた。

カミューがファーストに向かって走り込んだ。

ドオンッ！

突然カミューが爆発して吹き飛ばされた。

「最前線は死守したぞ」

ファーストを守る宗介がシレッと答えた。口をあんぐり開けた明久と雄二は宗助の所に飛んでいった。

「チョットオオオ！？ 相良君何やってんの！？」

「一塁線上に地雷を数個埋しただけだ。殺傷力は抑えてあるから死んではないだろう。問題ない」

「いや問題あり過ぎだろ！ さり気なく『地雷を埋設した』とかとんでもないこと言ってんじゃねーぞ！？」

「いつやったの！？ 全然そんなのわからなかったけど！？」

「サガラアアアア！」

吹き飛ばされたカミューが復活したかと思うと、激昂して宗介に殴りかかってきた。宗介は腕でガードした。

「くっ」

「どこの世界に野球で爆発物使う奴がいるんだ！ 歯あ食い縛れえ！」

「それ以前に、学園祭の準備をサボって野球なぞしてる場合か！」

突然野太い声が介入したかと思うと、鉄人が走ってきていた。

「ヤバい！ 鉄人だ！」

「まずい！ 逃げろ！ 奴に捕まったらボコボコにされる上に補習のフルコースだぞ！」

Fクラスの皆が蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「吉井！ 貴様がサボりの主犯か！」

「ち、違います！ どうして僕をいつも目の敵にするんですか！？ それに野球を提案したのは代表の坂本雄二です！」

言い終えるか否か、その時鉄人が爆発した。残っていた地雷を踏んだようだ。

土煙が立ち上がる中、そんな煙を吹き飛ばすかのように鉄人が躍り出た。

「馬鹿な……！ 殺傷力を抑えたとはいえ地雷を踏んで無傷だと……！？」

「妙なところで戦慄してる場合じゃない！ 逃げないと！」

「全員教室に戻れ！ この時期になってもまだ出し物が決まっていなんて、うちのクラスただだぞ！」

そうして皆で汚くて古い教室に戻されましたとき。

☆

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃ

いけない時期が来たんだが――」

野球を中断された連中が戻ってきて（宗介とカミューは殴り合い宇宙をした挙句、かなめとファに絞られた）学祭の打ち合わせに入った。しかし代表である雄二はやる気なさそうに欠伸をした。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

明らかにやる気がないですね。そんなこと言って、高校の学園祭は三回しかないんだよ？ もっと楽しまないと。因みに私はry

「吉井君、坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

「直接聞いたわけじゃないからわからないけど、楽しみにしているってことはなさそうだね。」

興味があるのならもっと率先して動いているはずだから」

「そうなんですか……。寂しいです……。吉井君も興味がないですか？」

「うゝ」

「ん、どうだろ？ 別にそこまで何かをやりたいてってわけでもないしなあ」

「私は……。吉井君と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」

「ほえ？」

――なん……。だと……？

美少女からこんなこと言われたら一男子生徒なら舞い上がりそうな発言。明久は間拔けな声を上げたただけだったが。  
美波やFFF団の視線が鋭くなったとか。

「その、吉井君は知ってますか……？　うちの学園祭ではとっても幸せなカップルが出来やすいって噂が——ケホケホッ」

「大丈夫？」

「は、はい。すみません……」

先の戦争で只でさえ貧相な設備が敗北したことによって更に酷くなったので、衛生的に余りにも配慮がない。

その中にいれば体調を崩す者も出てくるだろう。冬なんかは地獄絵図だろうね。今は春だからいいけど。

☆

なんやかんやで実行委員が千鳥かなめに決まった。そうして意見を集めたのだが——

- ・写真館（覗き部屋）
- ・ウェディング喫茶
- ・中華喫茶
- ・古本屋
- ・レンタルショップ
- ・同人喫茶
- ・居酒屋
- ・ゴルフ場
- ・ビリヤード場
- ・パンチラ喫茶
- ・赤線
- ・魔法少女
- ・UC3『ラプラスの箱』上映会

「いい加減にしてよ！」



とうとう大声を上げるかなめ。

「とりあえず意見出してって言ったのは確かに私だけど、もっと現実感のある企画にしてよ！ 実現出来っこないものを、

その場のノリで上げられても困るのよ！」

「いやぁ千鳥さん、そうは言ってもこのクラスは結構皆いい加減だし」

副実行委員の明久は微妙そうに言った。

このFクラスは基本的にバラバラで特別な時しか団結しない（その時は凄いものだが）。

「そうは言っても、これはないんじゃないの？ 大体魔法少女って何よ。何する企画なの？ ていうか上げたの誰！？」

僕と契約して魔法少女になってよ b y Q B

「千鳥さーん、赤線ってなんですか？」

「ああ、これはね、国公認での公娼のことで、地図で赤く囲った部分の事を言うのよ。50年くらい前には廃止されてるのよね。

貴方達のおじいさんやおばあさん辺りに聞けばわかるんじゃない？ “銀魂”とかでの吉原の元ネタよ。以上」

「なんか妙なこと知ってるなおい」

「質問、それってやらしいの？」

「やらしいの」

「詳しく聞きたいんだけど」

「知らんでよろしい」

（ムツツリーニ、知ってた？）

（……………俺の知らない物があったとは……………！）

ムツツリーニは自分の知らない（やらしい）知識に遅れを取ったことに戦慄した。

と言うか今の人間は赤線知ってるのか？

「それに上映会とか、自分で金払って行けば勝手に行きなさいよ。それかバ○ビジュに頼むか」

忙しくていけねえんだよk sがアアアアアアアアアアアア！

いやあ四月のDVD発売楽しみすなあ。マリーダさんマジ美人。オードリーはシラネ。寧ろミコットの方が可愛いですよ。

そこで宗介が手を上げた。

「射撃場を提案する。身近で手軽な兵器の使い方や戦術を学べる機会を設ける、という意義のある取り組みだ。

特別サービスでライフルや迫撃砲などの小火器や、手榴弾や対人地雷などの爆発物の運用法をわかりやすく講義し、

実際に使ってみる射爆場もやるという。そうすれば兵器に対する偏見を減らせる有意義なものに――」

「はい却下ー」

いや、兵器は身近じゃないからと明久が突っ込む前にかなめが途中で中断させた。なんかあしらい方がうまい。

今度はキラが手を上げた。

「ハッキングについての講座はどうか。様々なコンピュータ相手に侵入して痕跡残さずにハックする、という講座だよ。

情報を手に入れること以外にも、AIを自分の制御下に置いたり、情報を改ざんしたり、逆にそういうのに対する対策も取れる、

とても意義のある企画だよ。今ならサービスとしてジオトロン社の企業実績や取引相手、社員等の機密情報が載ったデータも――」

「はい却下ー」

またもかなめがあしらう。しかしさっきよりも苦々しい表情になっていた。

今度はカミィユが手を上げた。

「拳による修正喫茶はどうだ。優柔不断で自分の立場をハッキリさせない人やわがままや文句ばかり言ってる人や自分の事しか考えない大人を、

拳（蹴りやはりてでも可）で目を覚まさせるんだ。そうすることで行動に対して少しは積極的に――」

「はい却下ー。ていうかそれ喫茶の必要ないでしょ」

またまたかなめがあしらう。何故か美波と瑞希が明久をジッと見た。今度はスザクが手を上げた。

「ならトレーニング教室なんてどうだろう。肉体と精神を鍛え上げることで心の落ち着きを手に入れられるし、

そうなれば学校の生徒のイメージも良くなるよ。更に特別に筋力や技、他にも体力を競うゲームも――」

「却下……！」

そろそろかなめが我慢の限界に達しようとしていた。今度は誰かが手を上げた。

「ピザ喫茶はどうだ？ 客をピザをメインで振る舞う喫茶店だ。割と手軽だと思うが」

「なんでピザなのよ……って、テッサ！？」

なんかもう色々憔悴していたかなめが急に顔を上げた。しかしかな

めの知っているドジっ子ではなく、見たことない美少女がいた。ていうか、Fクラスの生徒ではない。このクラスの女子は少ないから皆覚えてるはず。

「あなた誰？ Fクラスの生徒じゃないわね」

近くにいた美波がそう言った。見知らぬ美少女が教室を見回す。

「汚い教室だな。こんなところで生活してるのか？」

「な、何よアンタ！ 勝手に入ってきておきながら何さまの言い草よ！」

「事実を言ったただけだ」

冷めた目で言い切った美少女に、美波は「ぐぬぬ」となる。そんな彼女を放置して美少女は別に生徒に問うた。  
名もなきモブのFクラス男子は、美少女に話しかけられて鼻の下を伸ばす。

「ここはFクラスらしいな。Aクラスはどっちだ？」

「え？ あ、ああ。あっちの新校舎だよ」

「わかった」

それだけ言って美少女は去っていった。それと同時に他の男子生徒が立ち上がる。

『これより、異端者の審問を始める。異端者には？』

『『『死の鉄槌を！！！！！！』』』』

「は？ え？ ちょま」

男子達がさっきのモブを廊下に引きずっていき、何やら生々しい音

が聞こえ、少しして戻ってきた。モブがボロ雑巾になっていた。

「……まあともかく、無理のある企画なんて通せないでしょ？　と  
りあえず今ある選択肢から決めて行くから。手を上げてね」

そしてなんやかんやで中華喫茶に決まったそうだ。因みに一番手があがったのはUC3『ラプラスの箱』上映会だったりする。  
どう考えてもむりやて。

「よかったわ。一番マトモなのが当たってくれて」

「千鳥さん！　俺はユニコーンガンダムが見たいです！」

「それは自費出費でね」

僕も見たいです！

決まったようなのでかなめは座る。隣の宗介が話しかけてきた。

「千鳥、だいぶ疲れてるようだな。かつて副会長や学級委員をやっていた君なら造作もないと思っていたが」

「このクラスって、すごい我的強い人たちばかりだからめんどくさいわあ……」

「そうか。しかしなぜ射撃場が受理されないのだ？　とても有意義な――」

「まだ言うか！」

かなめはハリセンで宗介の頭を叩いた。そのまま宗介は後ろに倒れた。

「かなめ。まだ終わってないわよ」

かなめを呼んだのはファ・ユイリイ。なんか一緒に謝りに言っ  
てから仲良くなった女の子である。

「どーして？」

「ホールや厨房とかの役割を決めたいといけないでしょ？ それに  
シフトも。喫茶店やるんだから」

「あ、そうか」

かなめが再び立ち上がる。須川とムツツリーニが立ち上がった。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

「……………（スクツ）」

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

中華料理と紳士の何があるのか知らないが、やってくれるならそ  
れでいいだろう。

「じゃあとりあえずホール班と厨房班にわかれてね」

宗介も立ち上がる。

「では、俺が食料調達の方をやるう」

「ダメよ。アンタは『安いから』とか言っ  
てクソ不味いレーション  
でも持ってくる気でしょ？」

「……………何故わかった？」

「わかるに決まってんでしょ。ったく。――なんか前にもこんな会  
話したわね」

かなめは溜息をついた。今度はカミューが言う。

「じゃあ俺は厨房の方で」

「だめよ。カミューは目を離すとすぐにずるけるから、人目の付くホールの方をやってもらわないと」

「ギクっ……そんなことするわけないだろ」

「ふーん、じゃあ私はカミューが掃除サボって怒られたり宿題サボって怒られたり空手の練習サボって怒られたりした回数を

教えてあげようか？ それにカミューは料理なんてできないからどっちにしても厨房は無理よ」

「はいはいわかったよ……どうせ料理なんかやった事ありませんよ」

カミューがどよんとした目でファを睨む。

（凄いですねあの二人……付き合い長いやりとりですよ）

（あそこまでいつも通りの会話展開出来るなんて、ちょっとやそつとの間柄じゃ無理よ。勉強になるわ）

瑞希と美波がその二組の様子を見て囁き合う。余談だが“ふたくみ”で交換したら腐匠フタクミになってビビった。

「あ、それじゃ、私も厨房班に――」

「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

平然と厨房班に入ろうとした瑞希を明久が止める。間一髪だ。

「明久、グツジョブじゃ」

「いい判断だよ、本当に……！」

「……！」コクコク

「もう嫌だ……！ あれをまた繰り返すのは……！」

「「?」?」」

破壊力を知っているムツツリーニ、秀吉、キラ、スザクがアイコンタクトを送った。寝ている雄二は、何故か小刻みに震えていた。事情を知らないカミューと宗介は頭に疑問詞を浮かべるだけだった。そんな事知らない必殺料理人は首を傾げた。

「え？ 吉井君、どうして私はホール班じゃないとダメなんですか？」

「あ、えーと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接したほうがお店として利益が痛あつ！」

み、美波！ 僕の背中にはサンドバックじゃないよ！？」

「か、可愛いだなんて……吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ♪」

『来るな……！ 厨房には絶対に入ってくるなよ……！！』

五人で必死にそう祈ったとか。

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

「……………」

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「私も、ホールよりも厨房に行こうかしら。料理の方が好きだし」

「接客業って面倒臭いし、私はホールにまわるわ」

「秀吉、何を馬鹿なことを言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってるだろう？」

それに千鳥さんと紅月さんもFクラスの貴重な女子で美人なんだから客寄せの為にホールでてくれないとみぎゃああつ！

み、美波様！ 折れます！ 腰骨が！ 命に関わる大事な骨が！

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」



（大丈夫なのかなあ……）

そんな様子を見たキラがそう思った。

15話　猿山アー！！！！早く来てくれエー！！！！！！（後書き）

C・C・は後で出番を増やします。鉄人も。

女より男の方が数倍動かしやすいですね。かなめとカレンは例外で。  
ファもカミューと一緒にの时限定で動かしやすいです。なのは達と唯  
達どうしよう？

いっそ彼女等でインスタントハーレムでもやらせるか？

**16話〜皆震災募金するんだ。買い占めなんて絶対すんなよ〜（前書き）**

バカテスト

**【第十三問】**

問 以下の問いに答えなさい。

『地震が起こった時の適切な行動を挙げなさい』

紅月カレンの答え

『机の下に身体を隠す』

教師のコメント

そのとおりです。地震発生時には落下物に気をつけましょう。

千鳥かなめの答え

『TVをつけて速報ニュースを確認する』

教師のコメント

緊急時こそ情報が要求されるので、冷静な行動をとりましょう。

カミィユ・ビダンの答え

『排出される酸素マスクをつける』

教師のコメント

地震では酸素漏れはありません。酸素マスクはどこからでもませんよ。

キラ・ヤマトの答え

『シェルターに逃げ込む』

教師のコメント

お二人とも、ここは宇宙コロニーではありません。地球に慣れてください。

## 16話　皆震災募金するんだ。買い占めなんて絶対すんなよ

「アキ、ちよつといい?」

美波が明久を呼んだ。

「ん、何か用?」

「用って言うか、相談なんだけど」

「相談?　僕で良ければ聞かせてもらうけど」

「うん。ありがと。多分アキが言うのが一番だと思うんだけど――  
―その、やっぱり坂本を何とか学園祭に引っ張り出せないかな?」

「うーん、それは難しいなあ……。さっきも言ったけど、雄二は興味の無い事には徹底的に無関心だからね」

「でも、アキが頼めばきっと動いてくれるよね?」

「え?　別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

「ううん、そんなことない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だってンタたち――一晩共にしたんでしょ?」

「もう僕お婿にいけないっ!」

明久が悲鳴を上げた。宗介がびっしり汗をかき、キラが思いつき顔を引き攣らせてる。かなめとファとカレンが目丸くしている。

「……なんというか……反応に困る……」

「……いやその、自由だと思うよ……?」

「ああ……そんな……」

「地球って……どうなってるの……?」

「最っ低……キモッ」

「ちよつと美波さんんんんんんん!」　　変な誤解が一気に広

まっていますよ!？」

誤解が広まり、明久は叫んだ。

そう言えば中学生の頃だった。姉のBL本を屋根裏で見つけたのが私のBLとのファーストコンタクトであった。

因みにBL本は段ボール数箱分なって、中にはギッシリ詰まっていた。一番多かったのはデジモンだったと記憶している。

その頃の私はジャンプに夢中な普通の中学生で、初めてBLを見たときのカルチャーショックは絶大だった。

そして私はBLに夢中になった。カカシ×イルカとかゾロ×サンジの普及率の異常さには驚かされた。

しかしイケメン×イケメンでは何かと物足りなくなった日が来た。勿論それもいいが、別の嗜好も考えてみるべきだ、そう思った。

そして私は中年×中年を探した。すると部長×両津なる物を見つけた。しかし私は署長×部長がいい。

少年ジャンプが腐向けなどと言われているが私は否定しよう。何故なら奴らは寧猛な魚と同じで、ネタがあれば勢いよく喰いつく。

ジャンプを実際に見ているのは大部分が男なのである。おっと話が逸れたね。

そうして私の記憶の中に黒い歴史として刻まれていくのだった。

補足しておくと、私のその頃はガンダムSEEDが大ヒットしていて、アスラン×キラの勢いが凄まじかった。

他にもムウ×キラやディアッカ×イザーク、レイ×シンにステイング×アウル等多かった。

コードギアスも凄かった。スザク×ルルーシュが特に多かったな。主に攻め、受けの概念は年齢、身長を主とした体格などが基準で普及に比例していた。腹黒は攻めも多いが受けもいけた。

BLではないが、なのは×フェイトやかがみ×こなた、唯×梓等といった物が増えていた事があったが私は男出せよと思う次第である。

最後に一つだけ言っておこう。そう言う層に露骨に媚びると本来の層に受けなくなるのだ。

あくまであちらがハイエナのように勝手に喰いつくので、こっちから呼ぶ必要はどこにもないのである。

ちよつと二人で話をするとかだけでもうたまんなああああああい！となるのが奴らなのだ。

結論…アンパンマン×バイキンマン、中島×カツオこそ至高。因みに私はタラヲ×アナゴとか持ってますw

「誰が雄二なんかと！　だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」

「……あ、明久？」

さりげなく秀吉がいたでござるの巻。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなこと言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。

その、ホラ、歳の差とか……」

「ひ、秀吉！　違うんだ！　もの凄いい誤解だよ！　さっきのはただの言葉のアヤで！」

（いや待てよ？　秀吉と一晩熱く過ごすということは――）

（妄想）

「秀吉……脱がすよ」

「いつでもいいぞい……」

「秀吉の肌って、凄く白くて綺麗だよ……」

「お、御世辞を……アンツ」

「秀吉の喘ぎ声、すっごく可愛いよ……もっと聞かせてよ、秀吉」  
フウツ

「ヒヤッ！あ、明久あ……ワシはそこは弱い、知ってるくせに……！」

「秀吉の可愛い所、もっと見せてよ……いいだろ？」

「……ど！どこに手をつ突っ込んでおるのじゃ！ワシはまだ心の準備が……！」

「いいじゃないか。秀吉もそろそろ欲しいだろ？」

「あ、明久あ……！」

「孟宗終了……ふう」

「……悪くないなあ」

「明久！？突然鼻血を出してどうしたのじゃ！？」

「はっ！？」

明久は鼻から出た血を拭いた。美波はそれをジト目で見たが敢えて触れず話を進めた。

「……それで、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？あ、うん。そういうことになるかな」

「なんとかできないの？このままだと喫茶店が失敗に終わりそうし……」

「ところで、お主らは何の話をしておるのじゃ？そんなに思いつめた顔をするとは、随分と深刻な話のようじゃが」

「深刻ってほどじゃないんだけど、喫茶店の経営とクラスの設備の話で……」

「アキ、そうじゃないのよ。本当に深刻な話なのよ……」

「え？どういうこと？」

「本人には言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし……。けど、一応秘密の話だからね？」

「う、うん。わかった」



「実は、瑞希なんだけど」

「姫路さん？　　姫路さんがどうかしたの？」

「あの子、もしかしたら転校してしまうかもしれないの」

「ほえ？」

——明久は——

2度と元へは戻れなかった……。

精神と妄想の中間の生命体となり、永遠に虚数空間をさまようのだ。

そして死にたいと思っても死ねないので

——そのうち明久は考えるのをやめた。

「む。マズい。明久が処理落ちしかけとるぞ」

「このバカ！　不足の事態に弱いんだから！」

不測の事態に最も弱いⅡルルーシュ

不測の事態に最も強いⅡカリーニン

「明久、目を覚ますのじゃ！」

——秀吉か……いつ見ても可愛いな……性別詐欺だろ……いや性別が秀吉だからOKか……？

「明久が目を覚まさない。こうなったら、スザク！」  
「なに？」

ホール組で近くで帰りたくしていたスザクが秀吉の声で振り返った。

「明久があっちに行って戻ってこないのじゃが」

「それは危ないね。フンッ！」

「グボラッ!？」

スザクが拳で明久を起こした。嫌な目覚ましっすね。

「……あ、あれ？　ここは……ハッ！　美波！　姫路さんが転校つて、どういうこと?!」

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと……?」

「島田よ。その姫路の転校の理由がさっきの話が全然つながらんのじゃが」

「そうでもないのよ。瑞希の転校の理由が『Fクラス的环境』なんだから」

「ってコトは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて——」

「そうね。純粹に設備が問題ってことになるわね」

Fクラスの設備の酷さは今更語ることはないだろう。

振り分け試験で成績の低い生徒がここに来ることになっているのだ。その中に成績がズバ抜けて高い瑞希がいるのだ。

慣れたとはいえ、改めて考えると不自然なことだろう。競争相手もいるにはいるが、バカだらけのこのクラスではいい影響もない。

そんな環境にいつまでもいさせられない、彼女の両親がそう判断した結果だろう。

「それに瑞希は、身体も弱いから……」

「そうだよな。それが一番マズいよね……」

このとても衛生的と言い難く老朽化した教室という劣悪な環境は、

冬になれば体調を崩す者も出てくるだろう。

MSの自爆に巻き込まれても生きていた人間も（このクラスに）いるのに、世の中は理不尽である。

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、

やっぱり設備をどうにかしないとどうしようもないのよね……」

「やっぱりそこを納得してもらわないと話にならないよね。姫路さんの体調が第一だし」

「……アキはその……瑞希が転校したりとか、嫌だよね……？」

「そんなのもちろん嫌に決まってる！ 姫路さんに限らず、それが美波や秀吉であつても！」

「そっか……。うん、アンタはそうだよね！」

美波は嬉しそうに頷いた。

「とにかく、なんとしても雄二を焚き付けてやらないと！」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

明久がポケットから携帯を取り出し、雄二にコールした。雄二の鞆が教室にある以上、学校内にいるはずだ。

prrrrと音が鳴り、雄二の声がこぼれた。

「あ、雄二？ ちょっと話が——って雄二！？ もしもし！ もしもーし！」

「坂本はなんて言ってた？」

「えっと、『見つかった』とか『鞆を頼む』とか言ってた」

「……なにそれ？」

「大方、霧島翔子から逃げ回っておるのじゃろう。アレはああ見えて異性に滅法弱いからのう」

「ああ……」

諸君、あの野郎は贅沢な奴だと思わないか？

「とにかく、これじゃ坂本と連絡を取るのは難しいわね」

「いや、これはチャンスだ」

「え？　どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引っ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。じゃあ秀吉と美波。ちよっと協力してくれるかな？」

「それはいいけど……坂本の居場所はわかつているの？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「何か考えがあるようじゃな」

「まあね」

これが愛か……

明久はニヤリと笑ってから二人を連れて教室を後にした。

☆

千鳥かなめは帰り支度を始めた。横で相良宗介も同様にしている。

「しかし、また学園祭やるとはねえ」

「俺もだ。また以前のようにアフガンの戦友を呼びたいものだ」

「いや、やめなさいよ。せめてミスリルのほうにしときなさい」

かなめは溜息をついた。

そういえば無事日本にきてから、かなめは一度もテッサ達に会って

いない。一緒にいる宗介は別だ。

宗介も元米軍基地から助け出された（正確には自力で逃げ出したのだが）後は一切の連絡が取れていないそうだ。

かつての総攻撃でミスリルは事実上壊滅し、その後アマルガムも立て直しが効かないほど衰退して、その上であの大戦が起きて、世界の勢力図が大きく書き換えられたあとなのだ。

いろいろあったが、それも全て終わり、平和な時が戻ったが、自分達だけ時間が巻き戻っている気がする。

「キョーコ達、元気でやってるかなあ……」

「大丈夫だろう。この日本が戦場になったという話は聞いてない。春に会ったばかりで何かあるとは思えん」

「そりゃそうよね」

「カナメー」

かなめを呼ぶ声がした。ファ・ユイリイである。何やらチラシを持っている

「どーしたのよ」

「今回の学園祭、試験召喚大会っていうのがあるんだって。それに出てみない？」

「へえ、そんなのあったんだ」

この学校に来たばかりのかなめはそういうのはよく知らない。

横から宗介がチラシを覗きこみ、口を挟む。

「なるほど、この学校のパフォーマンスか」

「学校の事は私もよく知らないけど、面白そうだし、優勝したら賞品が貰えるって」

「ふーん」

かなめは相槌を打つ。

「フアは出るの？」

「私は出るわよ。カミィユと一緒にね」

そう言えばビダンくんは教室にいないな、と周りを見渡したかなめ。チラシを手にとってこう言った。

「考えとくわ。ありがと」

「そう、じゃあ」

フアが去っていった。もう一度チラシを見て、宗介に話しかけた。

「賞状にプレミアムチケットに、腕輪……？　よくわかんないわね。ソースケ、アンタも一緒に出てみる？」

「構わんぞ」

いつものムツリ顔のまま、宗介は頷いた。かなめは嬉しそうにチラシをポケットの中に突っ込んだ。

☆

「私たちも、誰か出るべきだと思います！」

音楽室で中野梓が吠えた。ケーキを食べながら唯が聞いた。

「なにに？」

「試験召喚大会です！　他の部活動だってこの機会を利用して知名度を広げようとしているって聞いてます！」

この試験召喚大会は全校生徒（特に1，2年生）が注目する。新勸ライブとは比較にならないくらい注目が集まるので、存在感をアピールできるいいチャンスでもあるのだ。好成績を取った部活動はその後部員の数が増える、と言う現象がかなり頻繁に起こっている。

因みに過去に参加者の多くが同じ部員の生徒だった事があったりしたため、一つの部活動から一組——つまり二人だけと決まってる。

それを聞いた紬は面白そうに顔を輝かせていた。

「面白そう！ やってみましょう！」

「えーいいよー。ライブの方に集中したいし」

「そ、そうだよ。それに人前に出るなんて恥ずかしいし……」

「うーん、でも確かにいいかもしれないな、大会参加。部員が増えれば部費も……」

律が立ち上がった。

「よし、うちからも一組出そう！」

「「えー!?」」

「やったー♪」

漣と唯が声を揃えた。ムギははしゃいでいる。

「やるからにはそれなりに上を目指さないと。つーことで、ムギ！ 漣！」

「はーい♪」

「な、何だよ」

「二人とも、頼んだぜ♪」

ウインクしながら律が言った。

「ちょちょちょ、何考えてんだよ律！」

「何って、普通に考えたら当然の組み合わせだろ？ Aクラスの二人が出ればそれなりに進めるだろ」

「そういうことじゃなくて」

「私はCクラスでは平凡な方だし、唯は尖ってるところと凹んでるところの差が激し過ぎるし、梓に至っては1年だから論外。」

それに比べてムギと漣はAクラス。完璧じゃん」

「わ、私に、大勢の前に出ろって言うのか!？」

「だいじょぶだいじょぶ。前みたいにもたまたま転んだりしない限りは」  
「わー!!」

漣が耳を塞いで縮こまった。梓はそれとなくムギに聞いてみた。

「あのー。何のことです？」

「梓ちゃんにも、その内教えてあげるから」

☆

明久達が学園長室を去った後、突如扉が開いた。入ってきたのはキラ・ヤマトだった。

「失礼します」

「……最近のガキってのは、ノックの仕方也不知道のものかねえ？」

学園長のぼやきを聞きもせずキラは進み、学園長の机の前までいった。



「伺いたい事があります」

「……アンタが来た時点で何の用か大体わかっていたけど、“白金の腕輪”の事かい」

「そうです」

キラは表情一つ変えずそう言った。学園長は深いため息をついた。

「なぜ失敗作を賞品に出したのですか！ 何かあったらどうするんです！」

「指定したのはわたしじゃあない。それに“何かあれば”喜ぶんだろうねえ」

「？ 何のことです？」

「今回、指定したのは教頭だ。私もついさっきまで知らなかったもんだよ」

「つまり、他校や企業から手が回っている、と言う事ですか？」

「そういうことだ」

キラは苦い表情になった。

「今すぐ回収してください」

「残念だがもう無理だね。既に教頭の懐にある。それに大々的に宣伝された後だ、この学校の存在意義を問われかねない。」

「今からではもう間に合わないね」

「……」

キラは押し黙った。確かに生徒の安全が第一だが、まだ何も起っていない件なのだ、追求されれば面倒になる。

学園長も難しい顔をしている。

「私だって指咥えて傍観している気はないよ。既に打てる手は打っておいた」

「……？　どういう事です？」

「Fクラスのバカコンビー——吉井と坂本に頼んでおいた。優勝してこいってな」

キラは一瞬反論しそうになって、思いとどまった。

確かに優勝賞品として出されるのならば、正攻法で手に入れてしまえばいい。

“白金の腕輪”は確か高得点者にしか効果がない。低得点者なら問題なく動く。

しかし、彼らが優勝まで扱ぎつけるのは非常に困難だ。

——結局、後手に回るしかないのか……。

「じゃあ僕もこちらで支援するつもりで動きます」

「何をするんだい？」

「僕も誰かと組んで大会に参加します。対戦表では彼らとは決勝までは当たらないような配置をお願いしますか？」

「まあ出来ん事はないね」

「彼等とも一応話をつけてきます。では」

「わかった。しかし絶対に広めるんじゃないよ。あのバカどもにもそこまで深くは説明してないからね」

キラは返事もせず学園長室を後にした。真っ先にAクラスに向かう。

まず明久達と合流する前に、パートナー探しだ。出来る限り強力な相方がいい。勿論伝手もある。

☆

キラはAクラスに着いた。喫茶店の準備をしているらしく、大勢の生徒がまだ残っていた。

すぐ近くを歩いてるボーイッシュな女子生徒を捕まえて聞いた。

「アスランいる？」

「アスラン？ 誰のこと？」

「あ……」

（そうだった。ここではアスランで通ってなかったんだっけ）

キラはコホンとせきをして再度聞き直した。

「アレックスって、今いる？ いたら呼んでほしいんだけど」

「うん、いいけど」

「俺がどうかしたのか？」

女子生徒が呼びに行こうと振り返ると横から声が聞こえた。

「あ、アスラ……アレックス」

「どうしたキラ。俺に何か用か？」

「ここでは話しづらいな……ちょっとこっち来て」

アスランを引っ張り出すキラ。女子生徒は暫くしてAクラスの出し物の方を協力しにいった。

周りに人がいない事を確認する。アスランが怪訝そうに聞いてきた。

「で、俺に用ってなんだ？」

「頼みがあるんだ。僕と一緒に試験召喚大会に出てほしいんだけど、いい？」

「特に用もないし、構わないが……どうしたんだ？ 急に。別に教

室で言ってくれてもよかっただろう」

「あ、いや、まあ大会にちょっとした興味があつて――」

「……なにか事情があるみたいだな。あとでちゃんと教えろよ?」

「……うん。それじゃ」

キラは礼をしてその場を去っていった。アスランはその後ろ姿を見送った後、教室に戻ろうとした。

すると、走ってきた女の子がアスランにぶつかった。

「お前は、高町か? こんなところで何をやっている?」

「あ、アレックスくん。さっきの人、知り合い?」

「? キラのことか?」

**16話く皆震災募金するんだ。買い占めなんて絶対すんなよく（後書き）**

最近なのは、けいおんキャラ動かすのが面倒になってきたわ。てかなめちゃん汎用性高過ぎワロタw

そういやけいおん再連載らしいですね。男出してほしいですね。もつとラブコメが見たいです。なのはさん達はいいい加減に男捕まえろよ……

最近になって出したい作品出てきました。でも悪役やれそうなの思いつかないな……

18才前後の悪役でなんかいいのありませんか？

## 17話〈酢豚「中華!？」ガタツ〉（前書き）

バカテスト

清涼祭アンケート

### 【第十四問】

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

キラ・ヤマトの答え

『清潔感のある私服』

教師のコメント

喫茶店は清潔感こそ必須ですからね。これもコストのかからない案になるでしょう。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。』

色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもので用意し裏にロゴを入れる。

靴は5センチ程度のヒールを――』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

相良宗介の答え

『迷彩服』

教師のコメント

嫌な学園祭になりそうですね。

枢木スザクの答え

『柔道着』

教師のコメント

喫茶店で、ですか？

クワトロ・バジーナの答え

『赤いノースリーブ』

教師のコメント

悪趣味ですね。て言うか貴方誰です？

## 17話　酢豚「中華!？」　ガタッ

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「素直に褒めてあげなさいよ……」

清涼祭初日の朝。

Fクラスの教室は普段の小汚い模様を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えた。

「この見た目は立派なテーブルもみかん箱に小奇麗なクロス積み重ねて作ったやつだし、よくやるもんね」

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこから綺麗なクロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」

瑞希が尊敬の目で秀吉を見る。つまりこのクロスは演劇部で使ってる小道具だ。

「ま、見かけはそれなりのものになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲ると、その下にはFクラスのきたねえみかん箱が。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

「仕方ないでしょ。あるもんで何とかしないと」

カレンと美波が明久の隣から覗き込んでいる。彼女らの言う通り、これを見られたら、確かにイメージダウンするだろう。

飲食店は清潔感こそ命である。店だけではなく従業員もね。リピー



ターが来てくれるように良い印象を与えねばならないのだ。

「きっと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるさ」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよ、きっと」

「そこまでする連中なんているものでもないでしょ」

「まあ……以前の富田みたいな手段使ってこられたら別だけど」

「？ どうしたの？ 千鳥さん」

「あーいや、こっちの話」

「ふうん。まあいいや。それにしても室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

「学園祭に高いクオリティを求めてくる客はなんてそうはいないし、これなら充分じゃない？」

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

明久の後ろにムッツリーニの声が響いた。特に意味もなく気配を隠して明久の背後にいた。

「ムッツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……………味見用」

そう言ってムッツリーニが差し出したのは、木のお盆。上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた。

「わぁ……美味しそう……」

「よくこんな風に作れるものね……」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………」コクリ

「では、遠慮なく頂こうかの」

秀吉、美波、瑞希が胡麻団子に手を伸ばした。そして口の中に放り込んだ。

「お、美味しいです!」

「本当! 表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし!」

「甘すぎないところも良いのう」

絶賛する三人。そんなうまい胡麻団子作れる高校生が羨ましいです。

「ふむふむ。それじゃ、僕も頂こうかな」

「……………」コクコク

「……………」私は遠慮しとく」

明久は残った最後の一つの団子を手にとって噛みついた。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても…………んコパッ」

なんか明久の口の中から有り得ない音が聞こえた。

「あ、それらはさっき姫路が作ったものじゃな」

「やっぱりそう来たのね…………」

「……………!!」グイグイ!

「む、ムツツリーニ! どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口の中に押し込もうとしているの!？」

無理だよ! 食べられないよ!」

ムツツリーニが団子の残り半分を明久の口の中に押し付けてくる。

明久は必死に抵抗する。

「なんか美味そうな臭いがするわね」

「本当だな。なんだ？ この臭いは」

「何かの食べ物の臭い？」

「あ、二人とも、おかえり」

カミューとファが教室に入ってきた。

因みに宗介とかなめ、キラは召喚大会の方に行っている。

「これはなんだ？ 団子？」

「あ、これは試食用の胡麻団子だけど――あ」

明久が言い終える前にカミューが近づいてきて、半分残った胡麻団子を口の中に放り込んだ。

「……たいした男じゃ」

「カミューくん。キミは今、最高に輝いてるよ」

「そういや転校生だったわね。耐性あんの？」

「？ 何を言ってるんだ？ ……ふむふむ、初めての食感だな胡麻

団子って。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。

甘すぎず、辛すぎず味わいがとっても……んこパっ」

明久と同じようにカミューの口から有り得ない音が出た。

「お、美味しかった？」

明久は背中にびっしょりと汗をかきながら、顔では笑って問いかけた。

カミューはムくりと起き上がった。

「大丈夫です」

（なんで敬語？）

明久達は驚いた。瑞希の料理を食べて無事だった者は今までいなかったからだ。

しかしよく見ると、カミーユの動向が開き切っていた。凄い笑顔で。

「それにしても暑いなここ。出られないのかな」

フラフラと窓の方に歩いていき、窓から身を大きく乗り出そうとした。

「まずい！ 彼を止めろ！ 頭からおっこちたら死ぬぞ！」

「カミーユ！？ 突然どうしたの！？」

「だめだ！ 暑いどころか冷たくなっちゃう！」

「ちよつとごめん！」

「へ？」

カミーユが振り向くと同時に、カレンがカミーユの首筋に手刀を見舞った。カミーユは何の声も上げずに崩れ落ちた。

（危ない所だったね……）

（まさか姫路の料理が人の精神すら破壊する代物とは、想像もできん……）

（吉井、アンタが全部食べなかったから変に犠牲者増やす結果になったのよ）

（……………）コクコク

（え？ 何でこの流れで僕が責められてるの？）

明久と秀吉とムツツリーニとカレンが声が漏れないように掛け合う。

「カミュー！ 生きてるんでしょ！？ 返事をして！」

何も事情を知らないファがカミューを揺さぶって悲痛の叫びを上げた。

「うーっす。戻ってきたぞ。ってなんだこの状況は」

そこに雄二が戻ってきた。

（今北産業）

（カミューくんが

姫路さんの胡麻団子を

食べた）

（おk把握）

三行で説明した気になってる奴ってなんなの？

「ビダンくん……どうしたんでしょう？」

「さ、さぁ……きつと持病かなにかじゃない？」

カミューを心配する瑞希に、少し苦しそうな言い訳をする明久。カミューはまだ寝てますよ。

「ところで、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

「ああ、ちよつと話し合いにな」

秀吉がさり気なく話を逸らしたので、雄二もそれに乗った。

「そうですか。それはお疲れ様です」

「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「ばっちりじゃ」

「……………お茶と飲茶も大丈夫」

さっきの出来事から良く言えるなその発言。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツリーニとキラに任せる。

俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「あれ？ アンタたちも召喚大会に出るの？」

「え？ あ、うん。色々あってね」

明久達が適当な言葉で茶を濁そうとすると、美波が低い声を上げた。

「……………誰と行くつもり？」

「ほえ？」

「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうかと思っていたんですか？」

瑞希も目を細めて低い声を上げた。

「だ、誰と行くって言われても……………」

「明久は俺と行くつもりなんだ」

「「なん……………だと……………」」

美波と瑞希が同時にオサレな悲鳴を上げた。

「坂本とペアチケットで、『幸せになりに』行くの……………？ アキ。

アンタやっぱり、木下よりも坂本の方が」

「ちよっと待って！ その『やっぱり』って言葉は凄く引かかる

！ それと秀吉！ 少しでも寂しそうな表情しないでよ！」

「ダメよ！ カミューと私で幸せになるんだから！ 男同士でなんて不潔よ！」

「ファさん！？ だから違うって！ て言うかさり気なくライバル増えてるんだけど！？」

「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持った方が……」

「ふっ、それができれば明久だって苦労しないさ」

「雄二、もっともらしくそんなこと言わないで！ 全然フォローになってないから！」

「っと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「……くっ！ と、とにかく、誤解だからね！」

捨て台詞をはいて明久と雄二は二人揃って教室を出て行った。その途中、雄二は三階への階段を上がりはじめた。

「どうしたんだい、雄二。ステージは校庭だよ？」

「わかってる。その前にお前にしとかなきゃいけない話がある」  
「？ 何？」

「今回の大会の件だ。——いたかキラ」

三階からキラが降りてきた。

「代表、今なら人も余りいないよ」

「注目が浴びない初戦辺りの方が人が集まりにくいからな」

「え？ え？ 何のこと？」

「明久」

混乱している明久に、雄二が話しかけた。

「キラに、一通りの事情を話してある」

「え、本当？」

「うん。姫路さんの転校に関係していることなんですよ？　それで学園長と交渉して優勝するって。」

「それだったら、僕も手伝うよ」

「え？　いいの？」

キラには明久の召喚獣の点数を操作できる技術がある。ハッキリ言っ  
て反則技だが、雄二と話をつけている辺りやってくれるだろう。  
手数が増えるのはありがたい、明久はそう思った。

「いざという時は僕が全責任を取るから。こっちの心配はしなくて  
いいよ。あと僕も召喚大会に参加してるけど当たるのは決勝だ。  
こっちもできる限るサポートする。絶対に準決勝まで上がってき  
てね」

「だ、そうだ。明久」

「でもいいの？　Fクラスが優勝すればそれで姫路さんの両親への  
印象もよくなるのに」

「……君たちが優勝しないと、意味がないんだ」

「え？　どういうこと？」

「あ、いや、設備の一部改修の交渉してるんでしょ？　だったら優  
勝は僕よりも君たちの方がいいよ」

「あ、そうだね」

キラはホッと息をつく。雄二は時計を見た。

「キラ、点数操作に関してはこっちから連絡を取る。その時は頼む。  
明久、そろそろ時間だ」

「あ、うん」

「じゃあ、頑張ってきてね——ゴメン、変なことに巻き込んだじゃっ  
て」



最後の部分は、  
去っていく明久達の耳には届かなかった。

**17話〱酢豚「中華!？」ガタツ〱(後書き)**

テンションがあがらない……

とりあえずCCAフラグが立ちますた^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3649o/>

---

SEEDとギアスとリリカルと召喚獣！

2011年10月7日23時38分発行